
あたしは悪くないもん

猫満月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしは悪くないもん

【Zマーク】

N4790C

【作者名】

猫満月

【あらすじ】

小さな嫉妬から始まった、暗く重い物語。

警告（前書き）

2009 / 07 / 29 ... 修正が終わりました

この小説はいじめ系小説です。いじめの描写が出てきます。私は決していじめを「面白いもの」だと思ってこの小説を書いたわけではなく、いじめがどれ程辛くて苦しくて酷いものなのか、もっと沢山の方に理解して頂けるようにと願い、この小説を書きました。以上を「理解頂いた上でお読みください。

第1話　日常

天気は快晴、雲ひとつ無い青空が広がる平日の昼下がり。給食時間後の教室には人もまばらで、冷たい冬の空気が窓の外から真っ直ぐにあたしの髪の毛を揺らして通り過ぎていく。

ほとんどのクラスメイトは校庭や体育館に出たり、他の教室や屋上に行つたりしているのだろう。中学2年生というのは、基本的に元気で活発な年頃なのだ。日々、新しい刺激を求める為に前進している。勿論あたし、葉山涙はやま るいも、今まさに前進しているところだ。……他の子達と違つて、もう刺激の対象は見つけてしまった後だれど。

「ああ、もう、いつ見てもかつこ良すぎ……雪山先輩！」

あたしのお世話の先輩は、中学生らしく校庭で元気に汗を流している。先輩の蹴ったシュートトが、綺麗にサッカーゴールへと吸い込まれていった。

目が合つたわけでもないのに赤くなつてしまふ顔を、両手で覆う。ただこうやって脣休みに彼の姿を見つめるだけでこんなにも幸せを感じることが出来るなんて、本当に先輩のことが好きなんだなあと再確認したあたしは紅潮した頬を片手で押さえたまま、隣で一緒に校庭を見つめている少女に視線を振つた。

「ねえ、美衣子！ 雪山先輩、今日もかつこいいよねー」

すると彼女は大きな瞳をくらくらさせて、二日月の寝転んだよくな可愛らしい口元を緩め、うんと頷いた。

「やうだね」

「」の子は、あたしの小学校時代からの大親友である、春風美衣子。

美衣子は優しくて可愛くて、まるで絵本に出てくるお姫様のような女の子。大好きな人がいる上に、そんな非の打ち所の無い女の子が親友だなんて、つづづくあたしは幸せ者だと思つ。

「流石美衣子だよね～！　あのかつこよさを分かってくれるなんて

「

美衣子に抱きついて歓喜の声をあげると、美衣子は、あははと控えめな笑い声をあげて顔を赤らめた。何から何まで、本当に可愛いなあ。

美衣子から離れて、再びあたしは窓の外の先輩をうつとりと見つめる。昼休みはあと数分で終了してしまうので、先輩たちはサッカーボールの片付けを始めていた。

「もうすぐバレンタインだし、雪山先輩に告白しちゃおうかな。
…ね、美衣子はどう思う？　そろそろ告白した方が良いかなあ」
「……え？」

その瞬間、美衣子の顔が若干強張ったような気がした。母親に叱られた子供みたいな顔をして静かに俯くその姿に違和感を覚え、首を傾げる。

「どうしたの？　美衣子」

すると美衣子はハツとしたように顔をあげ、首を左右に振つた。

「な、なんでもない……」

美衣子は弱々しく笑みを浮かべ、再び俯いた。あたしの気のせい

だつたのだろうか。気を取り直して、美衣子の細くしなやかな両手を自分の両手で包み込んだ。

「美衣子、今度、チヨン選び付き合つてね？」
「……」

美衣子はそつとあたしの手を握り返して、あたしの顔をじっと見つめた。

「あのね、るうちゃん」
「何？」
「るうちゃんにね、言わなくちゃいけない」とがあるんだけど……
聞いてくれる？」「うん。いいよ？」
「ねえねえ、るう！」

美衣子は何度かあたしの顔と教室の床とを交互に見ていたが、やがて、決意したように口を開きかけた。しかし、丁度そのタイミングで、あたしたちのもつ一人の親友である井上瑠夏いのうなつが、話に割り込んできただ。

思わず美衣子の手を離してそちらに駆け寄る。瑠夏はとても面白い話を持ちかけてくる事が多いので、あたしは瑠夏の事も大好きだった。

「瑠夏！　どうしたの？」
「見て見て、この待ち受け！」

瑠夏が大笑いしながら、自分の携帯電話を突き出してきた。待ち

受け画面には、今流行りの芸人の画像が映っている。その芸人が大のお気に入りだったあたしは、思わず大笑いして瑠夏の背中を叩いた。

「何これ～！ 瑠夏、最高！ あたしに送つてよ、これ。赤外線受信するから」

「うん！」

瑠夏から早速画像を送信してもらい、上機嫌で美衣子の方を振り返ったあたしは、もうこの時には、先程の美衣子の氣まずそうな顔をすっかり忘れてしまっていたのだ。

「美衣子もこの芸人好きだよね！ 送つてあげるから3人でお揃いにしようよ～」

「あ……ひ、うん！」

美衣子は一瞬だけ何か言いたそうな顔をしたが、すぐにはにかんだ笑みを浮かべて小さく頷いた。

第2話 裏切り

その日の放課後、あたしは一人、薄暗い廊下を歩いていた。ふと誰かに肩を叩かれ弾かれたように振り返ると、そこには笑みを浮かべた瑠夏が立っていた。

「ああ、瑠夏。急に肩叩くからびっくりしたじゃん！ 声掛けよ

瑠夏はけりけりと明るい笑い声をあげて、指でVサインを作る。

「ごめんごめん、ちょっと脅かそうと思つて。……っていつか、る
うまだ帰らないの？」

「うん、もう帰るつもりなんだけど……美衣子見てない？」

「美衣子？ 見てない」

「そつかあ」

溜息を吐いて、何気なく廊下の方に視線を振る。オレンジ色の光の中を、部活動を終えた生徒たちが帰宅していくのが見えた。

「今日美衣子に、委員会で遅くなるから先に帰つててって言われたんだけどさ、ちょっと用事があつてこんな時間になっちゃったから、もしかしたら一緒に帰れるかもと思って。やっぱ一人で帰るのって心細いじゃん？ でもこんだけ捜してもいいってことは、もう帰つちやつたつてことかな」

「そうかもねえ。なんならあたしと一緒に帰る？」

「あ、それじゃあ一緒に帰ろっか

窓の外眺めながら瑠夏にそう返した時、あたしの瞳が一人の女子生徒の姿を捉えた。

「あれ？……ねえ、瑠夏。あの後姿、美衣子じゃない？」

あたしが指差した方向を見て、瑠夏が「ほんとだ」と小さく声をあげる。

「今なら召前呼べば気付くかもよ？」

「そうね」

窓を開き、そこから身を乗り出して大きく息を吸い込んだあたしは、そのまま、固まつた。

「……えつ？」

その声を聞き逃さなかつたのか、瑠夏が首を傾げてあたしの隣にやって来る。

「どうかした？」

何も答えずただ呆然と一点を見つめているあたしを不思議そうに見た後、瑠夏は隣の窓を開け、あたしと同じように身を乗り出した。窓の外の光景を目にした瑠夏もまた瞳を大きく見開いて、ハッと息をのむ。

「……なんで？」

やつとの思いで、あたしは声を搾り出した。

「なんで、美衣子と雪山先輩が一緒にいるの……？」

頭の中で沢山の感情が沸騰している。言いたいこと、疑問が山ほどあるのに、上手く言葉にならない。もうそれ以上言葉を紡ぐことが出来なくなつたあたしは、更に大きく目を見開いて、美衣子との隣を歩く雪山先輩の姿を目に焼き付けた。本当はすぐにでも顔を背けたかつたけれど、信じたくなかったけれど、今あたしが見ている光景は間違いなく現実に起こっている事だった。2人は、物凄く仲が良さそうに見える。時折笑みを浮かべながら、何かを話している。会話が聞こえるはずも無いのに、あたしは思わず全神経を2人に集中させていた。

嬉しそうに笑う美衣子。 楽しそうに笑う雪山先輩。

あ、と思わず喉の奥から声が洩れた。夕暮れをバックに、2人が突然手を繋いだのだ。こんなに遠くからでもわかるくらい、美衣子の顔は真っ赤だった。とても幸せそうな笑顔を浮かべている……。

(どうして？ ねえ、美衣子。聞いてないよ……)

あたしの脳内に浮かんだ言葉は、ただそれだけだった。今までみんなと一緒に居たのに、あんなに雪山先輩への好意を彼女に包み隠さず打ち明けてきたのに、その雪山先輩と美衣子があんな関係だったなんて全く知らなかつた。

あたしの両目から、涙が溢れ出した。気持ちの整理はまだ全然追いついていないのに、体はもう美衣子と雪山先輩の関係を理解し、勝手に悲しみモードに入ってしまっている。頬を伝つて床に落ちていく涙の粒を見ても、まだ事態を良く理解できなかつた。美衣子は誰よりも何よりも大切な友達だつたし、あんなに優しい美衣子が自分を裏切ることなんて絶対に無いと確信していた。だから今回のことも夢なのではないかと思つた。

美衣子と雪山先輩が手を繋いだまま校門を出て行つて、その後姿が夕焼けに溶けていつてもまだ、夢なのではないかと思つていた。

「 る…… るう、 大丈夫？」

瑠夏が慌ててあたしの腕を引っ張った時、突然あたしの脳は、認めたくない真実を理解した。入学してから今まで見てきた色々な雪山先輩と美衣子の笑顔が重なつて離れて、くつついで、また分裂して……。

その瞬間、あたしは膝を折ってその場にへたり込んでいた。自分でびっくりするくらいの量の涙が溢れ出して、どうしても止まらない。震える両手を暫く見つめた後、その手を強く握って床を殴りつけた。

「 なんで……？ なんでなの？ …… あいつ…… あたしを裏切ったの？」

魂が抜けたように感情の無い声で呟くあたしの肩を、瑠夏が必死に揺さぶる。

「 る、 るう…… 落ち着いてよ……！」

「 …… おち、 つく……？」

あたしの脳は今にも爆発しそうだった。悔しさと怒りと、親友と好きな人をいつぺんに失つた喪失感があたしの心中を支配していく。

「 落ち着いていられるわけないでしょ！ どうしてあの2人が手、繫いでるの？ ねえ、 瑠夏！ なんで！ どうしてなの！」

金切り声を上げながら、あたしは瑠夏に抱きついた。

「 あたし…… 美衣子のこと、信じた…… 信じたのに…… 美衣子

はあたしを裏切った！』

絶対に許せない。……許さない！

あたしは大声を上げて泣き喚きながら、瑠夏の腕を力一杯掴んで美衣子に対しての暴言を吐き続けた。瑠夏は何も言わなかつたけれど、ただ、あたしの背中をゆっくりと擦つて、落ち着かせようしてくれた。

あたしは家に帰つてからすぐさま自分の部屋に駆け上がり、ベッドに突つ伏して大声で泣いた。この気持ちをどうすれば良いのか解らなくて、自分自身が酷く惨めに思えた。

どれだけ泣いても涙は止まらなかつた。悲しい気持ちや辛い気持ちもちつとも薄まらなくて、それどころか泣けば泣くほど逆にそんな気持ちが強くなつたような気さえした。

何かで気を紛らわせようと、大きく首を横に振りながら、だるくなつた体を無理矢理ベッドから起こす。本棚を漁つていたらアルバムが出てきた。小学校時代から今までの思い出が詰め込まれているアルバムだ。少しでもここの苦しみや悲しみを薄めようと考えてそのアルバムを開いたのに、一瞬であたしの心は更に深い闇に突き落とされた。どの写真にも、必ずあたしの隣には美衣子が立つていた。

小学校の時初めて出会つてからずっと一緒にいたんだから、仕方ないことなのかもしれない。だけど、写真の美衣子の笑顔が物凄く幸せそうで、それが酷く憎たらしくて、脳の血管が切れそうになつた。

「ああああああああ！」

狂つたように叫び声を上げたあたしは、机の中からカッターナイフを取り出して、写真に写る美衣子の笑顔を切り刻んだ。机にがりがりと傷をつけながら、美衣子の笑顔が細かい紙屑になるまで必死に全ての写真を切り刻んだ。

要らない。要らない。要らない。こんな人間、生きている価値なんて無い。いなくなれ。あたしの前から消えてしまえ。この写真と同じ様にズタズタになつて、死んでしまえ！

「……つ死ね！」

悲鳴に近い声でそう叫び、山になつた紙屑にカッターナイフを突き刺す。がつんという音がして、机にカッターナイフがめり込んだ。それを見てあたしはまた言いようのない虚しさに打ちひしがれ、再び涙を流しながら、傷だらけになつた机を叩いて泣き喚いた。どうしてあたしがこんな目にあわなくちゃいけないの。あたしはずつと……美衣子のことを親友だと信じていた。大好きだった。雪山先輩と同じくらい、大好きだった。それなのに、あんなに大好きだったた親友に、裏切られたのは何故？

自分が1人ぼっちになつたような気がした。この自分の痛みを、もつと自分自身で強く感じたいと思つた。

あたしはいつの間にかカッターナイフを片方の手で握り締めていた。静かにもう一方の手を見つめ……手首に刃を当てる。

……それからのことは、あまりよく憶えていない。気がついたらあたしの片方の手首からは、赤い液体が流れていった。その液体はあたしの腕を伝い、肘のあたりから、ぽたぽたと床に落ちる。それが血だとわかるのに、数秒の時間要した。

あたしは呆然とそこに座り込んでいた。血とは違う生暖かい液体が頬に流れるのを感じながら。

どれ程時間が経つただろう。突然、背後から扉を叩く音がした。ハツとして振り返り、咄嗟に赤く染まつた両手を後ろに回して隠す。部屋に鍵が掛かっていることを忘れるほど、気が動転していた証拠だつた。呼吸を整え、氣を落ち着かせてから、扉の向こうに声をかける。

「だ、誰？」

その間で、遠慮がちに返事を返してくれる、聞き慣れた声。

「涙？　お母さんよ」

「お、お母さん？……ど、どうしたの？」

「大丈夫？　さっきから何か叫んでるみたいだけど」

「え……ううん。なんでもないの。平気……」

「うう……？」

お母さんの声は沈んでいた。きっと、娘の異変に気がついてくれたのだろう。胸が一杯になつたけど、どうしても真実を話す気にはなれなかつた。

「涙。お洗濯物があるの。鍵、開けてくれない？」

「い、今着替えてるから、そこに置いといて。自分でしまえるから」

慌ててそう言つと、心配そうなお母さんの声が聞こえた。

「わかつたわ……。夕飯になつたひ、下りてきなさいね」

あたしは、うんともすんとも返事を返せなかつた。扉の向こうではまだお母さんの気配があつたけど、暫くしたら足音が階段を下りていくのが聞こえた。

「……」

はあ、と大きく息を吐いて、あたしはよつやく自分のしでかしたことの重大さに気がついた。とにかく、手当てをしなければ。

消毒薬で傷口を消毒し、タオルでそつと血液を拭い、そこに包帯を巻きつけた。その作業をしている間、あたしは自分でもびっくりするくらい、無心でいられた。

これがリストカットといつやつなのだらうか。自分がそんな事をしてしまつなんて、全然実感が湧かない。でも、漫画やドラマで見てくるときは“なんでこんなことをするんだろう。”って思っていたけど、自分でやってみて、初めてその理由が分かつた気がする。なんだか少し……ほんの少しだけ、心の痛みが安らいだような気がしたのだ。多分手首の痛みに気をとられて、心の痛みを感じる余裕がなくなるからなんだらう。

「美衣子……びひじて裏切ったのよ」

小さく呟いて、あたしはベッドに腰を下ろした。頭を抱えて、お母さんに聞こえないよう、声を殺して泣いた。

結局、あたしはその日から学校を欠席した。美衣子と雪山先輩の顔を見たくなかつた。今の状態で2人を見たらきっとあたしは狂ってしまう、そう思つたから。

食事が全く喉を通らなくなつてしまい、そのせいで、たつた3日の間に5kgも痩せてしまつた。元々瘦せ型だったあたしは、5kg減つただけで、外見にも大きな変化があらわれた。勿論、一番近くにいる両親がそんなあたしの変化に気づかなかつた。毎日、両親は必死にあたしにこづ尋ねてきた。

「涙、どいつしたの?」

「悩みがあるなら、言いつてみなさい」

そう聞かれる度、あたしは耳を強く塞いで首を横に振り、絶対に何も答えなかつた。言つたところどおりにどうなる問題ではないし、こんなあたしの悩みなんて、きっとトドケないの一言で片付けられてしまうだろう。

今朝も、お父さんがなんとかしてあたしの口を開かせようとした。だけどあたしは首を激しく横に振り、最終的には泣き喫いて抵抗した。その結果、お父さんは酷く悲しげな顔をして、仕事に行つてしまつた。

……「めんなさい、めんなさい。お父さんのせいじゃないのに。お母さんのせいじゃないのに。」

自分の情けなさに呆れて、更に悲しくなつて、また食欲が無くなつた。

「……それじゃあ、母さん仕事に行くわね。涙、もし気分が悪くなつたら、電話かけてね」

「……」

お母さんの遠慮がちな声が自室の扉の向こうから聞こえたけど、あたしは返事を返さなかつた。

パジャマ姿のまま膝を抱えて、ジーっと、電源の点いていないテレビの画面を凝視する。

「テーブルに朝ご飯、用意してあるからね」

「……」

「……ちゃんと食べるのよ?」

「……」

お母さんは小さな声で行つてきますと呟いて、階段を下りていつた。

それから暫く待つて、あたしは静かに立ち上がり、誰の気配もなくなつたりビングへ下りた。テーブルの上には、ラップのかかつた少し冷たいご飯が用意されていた。それを生氣のない瞳で一瞥してから、溜息を吐く。

あの日以来、食事を口に運ぼうとした瞬間美衣子の笑顔が脳裏に浮かんで、凄く気分が悪くなるようになつてしまつた。

美衣子は幸せ。あたしは不幸せ。どうしてこんなに差があるの…

…?

あたしは激しく首を左右に振つて、美衣子の顔を脳内から削除した。そして、茶碗に盛られているご飯やお味噌汁を、ひとつ入れ物の中に混ぜた。

それを持つて、あたしは裏口からパジャマ姿のまま外へ飛び出した。

今朝早く、お父さんとお母さんがあたしを心配して、精神科に連

れて行くと言つていたのを聞いてしまつた。取り敢えずこれを捨て、食べたことにしておこう。折角用意してくれたご飯を粗末にするなんていけないことだけど、この際仕方が無いだろ？。だつてあたしは正常だもん、病院になんて行きたくない！

ゴミ捨て場まで20㍍くらいの距離を歩いたけれど、幸いに誰にも会わなかつた。ゴミ捨て場ではカラスがゴミ袋を漁つている。片手でカラスを追い払い、持つてきた入れ物の中に入つてはご飯を、カラスが破いたゴミ袋の中へ流し込んだ。

「めんね、お母さん。

小さくそう零して、あたしは足を引きずるように血中に向かって歩き出した。

最近、突然胸が張り裂けそななくらい痛くなつて、どうしようもなく、涙が止まらなくなることがよくある。そんな時、決まってあたしはアレをする。自分の痛みが、少しラクになる気がするから。家に辿り着いたあたしは、玄関に鍵をかけて自室に引き籠もつた。迷つことなく机の引き出しを開け、その中からカッターナイフを取り出す。手首を切つて、自分の血を眺めて、静かに泣いて、呆然と天井をみあげる。

自分の体を傷つけることがどれだけ悪いことなのか、わかっているはずなのに。それなのに、何故か涙が溢れ出したときに、自分の血を見たくなる。痛みや辛さが腕の痛みに吸い込まれて、少しだけラクになるような錯覚に陥つてしまつ……。

「はは……っ」

緩んだ口元から、無意識のつまに笑みがこぼれた。それと同時に、両目から涙が溢れ出した。

「あはは……あはははは……。」

止まらない血と涙が床に落ちて混ざり合い、水玉模様を描いていく。あたしは笑うのを止め、暫くその液体を眺めた。……そして、片手に握り締めたカツターナイフを、床に突き刺した。何度も、何度も……。

ねえ、どうしてあたしがこんな目に遭うの？ 普通逆じゃないの？ 悪いやつが苦しむんじゃないの？ こんなのは、間違ってるよ。

「復讐してやる」

突然口からこぼれたその言葉にあたし自身が一番驚いたけど、妙に納得した。そうよ、美衣子が悪いんだから、辛い思いをして当然なのは美衣子のはず。

絶対許さない。……今に見ろ。あたしより何倍も痛くて苦しくて辛い思いをさせてやるから。

未だに血が流れている腕に乱暴に包帯を巻いて、あたしは携帯電話に手を伸ばした。震える手で、瑠夏にメールを作成する。

『瑠夏。ちょっと相談があるんだけど、いいかな？』

瑠夏からの返信は、1分程で来た。

『るう！ 元気になつた？ こないだ色々あつたから心配してたんだよ。もう大丈夫？』

その文面だけで本当にあたしを心配してくれていることが伝わってきて、あたしは思わず泣きそうになつた。何度も瞬きをしながら、返信ボタンを押す。

『うん……あのね、あたし、休んでる間ずっと、いっぱい考えたんだ。だけどやっぱり美衣子のこと、許せない。だから、瑠夏……』

ボタンを押す指が一瞬止まる。少し躊躇つたが、あたしは決意を固めて、続きを打ち込んだ。

『あいつの事、一緒にいじめない?』

送信して、再び携帯電話を床に転がし、両手で両耳を塞いだ。なんだか、今自分がやった行為がとても最低なことのように思えて、苦しくなった。

『うん、……大丈夫。だってあたしは悪くないもん。悪いのは全部美衣子なんだ。あたしのしようとしている事は間違ってなんか無い。』

そう考えたら少しだけ楽な気持ちになつて、普段どおりに呼吸ができるようになった。

第5話 復讐

翌日、3日ぶりにあたしは登校した。クラスメイトたちが次々に近寄ってきて、あたしの復帰を歓迎してくれた。

「るうー！ 元気になつた？」

「もー、たつた3日休んだだけなのに大袈裟だよ！」

瑠夏がこちらに歩み寄つてくるのに気がつき、あたしはクラスメイトたちを適当にあしらつた。そのまま瑠夏へと視線を移し、にっこりと微笑んでみせる。

「おはよー、瑠夏」

瑠夏は薄く笑みを浮かべておはようと返した後、口の端を微かに吊り上げて、ある方向を指差した。そちらの方に視線を振つてみると、そこには憎き美衣子の姿があつた。美衣子は机で何かを必死で書いているようで、あたしが来た事に気づいていないようだつた。瑠夏が少し声のボリュームを絞つて、あたしに耳打ちする。

「るう、昨日の作戦、もう実行しちゃう？」

「……うん」

あたしは小さく頷いて、ふふ、と笑みをこぼした。

昨日、瑠夏に送ったメールの返信はこうだつた。

『いじめるの？……いいよ。あいつ、裏切り者だもんね。たくさんいじめてやるうよ。ちゃんと作戦練つてからやつた方が上手いくかもしないから、作戦立てよう！』

……その後、2人で何度もメールをやり取りして作戦を立てた。
準備は万端だ。

（さあ、美衣子！　あんたに生き地獄を味わわせてあげる……）

あたしは瑠夏と顔を見合わせて額きあい、まっすぐに美衣子の方へ向かった。

美衣子は英語の課題をやつていいよつだ。これだけ近づいてもあたしたちに気づいた様子はない。すぐ背後に回り、片手でその肩をポンポンと叩いて、笑顔で美衣子に声をかけた。

「美衣子～！　おはよつー！」

すると美衣子は一瞬驚いたような顔をして、慌ててこしからを振り返った。そして、あたしたちの姿を見た瞬間、ほっとしたような、やわらかい笑みを浮かべた。

「おはよつ、るうちやん、瑠夏ちゃん。良かった、今日はるうちやん、元気になつたんだね」

「うん、心配してくれてありがとつー。美衣子に会いたくて、頑張つて風邪治してきちゃつたー！」

勿論こんな台詞は口からでまかせだった。美衣子の顔なんて、もう一度と見たくない。でも、美衣子には体験してもらわなくちゃいけないんだ。信じていた親友に裏切られることが、どれ程悔しくて辛いことなのかを……。

「あつ、あのね、るうちやん、瑠夏ちゃん……お願いがあるの」

美衣子は今にも泣きそうな顔をして、机に広げられているノートを手に取った。

「英語の課題出てたよね？ 今日締め切りの……。私、間に合わなくて……。もし良かつたら、見せてもらえないかな？」

「ああ、うん。…………いいよ」

あたしはこいつひとつと笑顔を浮かべて頷いた。…………瑠夏もまた、同じように。

「じゃあ、ちょっと待っててね！」

瑠夏と共に美衣子の傍から離れ、それぞれ自分の机に向かう。そして机の中から英語の課題を取り出して、瑠夏に配せした。

「美衣子～！ ノート、投げるよ～！」

あたし達は同時にそう叫び、ノートを思い切り力一杯、美衣子に向かつて投げつけた。

「…………えっ！」

美衣子は慌ててノートを受け取るうと身構えたが、あたしと瑠夏が正反対の方向から投げたせいで、ノートは、美衣子の腹部と頭部に命中した。

「あやあっ！」

小さく悲鳴を上げ、美衣子がその場に蹲つた。……右手で腹部を、左手で頭部を押さえて涙目になっている。一瞬だけ、周りのクラ

スメートがその声に驚いてこちらを見た。あたしと瑠夏は、さやつ！ とわざとらしく叫んで、慌てて美衣子の側へ駆け寄る。

「「」「めんな、美衣子！」

「大丈夫？ 怪我しなかった？」

「うん……へ、平氣だよつ！ ちょっと痛かっただけ。ノート、ありがとう…」

美衣子はそう言って微笑み、あたしたちのノートを握り締めて首を軽く横に傾げた。その笑顔と仕草を見たあたしは、一瞬にして作り笑顔を顔から消しおった。

何笑つてんのよ。幸せそうに……楽しそうに……。あたしは、“平氣”だなんて言えないくらいに傷ついたんだよ？ 痛くて、苦しくて……。この3日間、呼吸をすることすら必死だった。それなのに、どうしてあんたは笑うのよ？ このあたしの、目の前で。

「瑠夏。トイレ行こ」

あたしは瑠夏の手を引き、廊下に向かって歩き出した。慌てて美衣子がついていくよつとしたけど、振り返つて、大声で怒鳴るよつにして

「美衣子は課題しなきゃでしょ？ ……すぐ戻つてくるから、やつてなよ」

やつ言つて、2人きりで廊下に出た。

第6話 仲間

瑠夏と廊下に出たあたしは、一度教室の中を覗き込んだ。……美衣子はちゃんと課題をやり始めたみたいだ。美衣子は何かに集中している時、話しかけない限りずっと集中し続けているから、静かに行動すればあたし達の作戦に気付かないだろう。

瑠夏の手を握り締めて、先程出たほうとは違う扉から、再び教室内に入る。扉のすぐ近くで、いくつかの女子の集団が集まって話をしていた。

「ねえ、ちょっといい？」

その中でもいちばん明るい、クラスの中心的なグループを狙つて、
瑠夏が声をかけた。瑠夏の声に気づき、そのグループの中心人物である中山京子なかやま きょうこが首を傾げて此方を向いた。

「ん？ どうかした？」

「あの方、聞いて欲しいことがあるのー マジ、最悪な事があつて
さあー！」

瑠夏が、音量は小さいけれど荒々しい口調で京子の方に詰め寄る。そして、一旦あたしの方に視線を振つてきた。……あたしは、ワザと哀しそうな顔をして、静かに俯く。

「ねえ、るう。……京子たちに言つても、良い？」

瑠夏が遠慮がちに尋ねてきたので（勿論元々打ち合わせておいた演技だけど）、あたしは少しだけ躊躇う素振りを見せた。

「え……でも、それはちょっと……」

あたしの様子がおかしいことに気づいた京子が、あたしの手を握り、優しい笑みを浮かべて、こう言った。

「なんか悩みもあるの？ 力になれないかもだけど、もし良かつたら相談にのるよ？ ね、みんな」

京子が問うと、グループの女子は、勿論だよ。と言つて一斉に頷いた。その優しさに、胸の中があたたかい気持ちでいっぱいになれる。

「…………ありがとう。でも、やっぱりあたしの口から話すのは辛すぎるよ……。だから、瑠夏、お願ひできる？」

「うん、わかった。それじゃあみんな、るうのかわりに話すからよく聞いてね。4日前のことなんだけど……、」

瑠夏はあたしの手を握りながら、みんなに4日前の出来事を話し始めた。京子と、そのグループの子達は、みんな時々頷きながら、真剣に話を聞いてくれた。

数分後、話を聞き終わった京子達は驚きの色を隠しきれない様子だった。あたしの方を気まずそうに見ながら、必死に言葉を選んでいるようだ。

…………重苦しい沈黙の後、京子が小さな声で、尋ねてきた。

「あの、……そ、それってもしかして、美衣子が…………るうを裏切つてたつて事なの？」

「……。やっぱり、そつなるよな」

あたしはそつくりて、力無く笑つた。頑張つて泣くのを我慢し

てたのに、夕焼けに染まつた2人の幸せそうな笑顔が脳裏を掠めて、何故か分からぬけど、すごく惨めな気分になつた。気がつくと、両目からは大粒の涙が溢れ出していた。しゃくりあげながら泣くあたしに、京子がそつとハンカチを差し出してくれる。それを受け取つて涙を拭いながらお礼を言つと、京子は唇を噛んで、言つた。

「美衣子つて酷いね。あたし、美衣子がそんな子だなんて知らなかつた……。るう、もう大丈夫だよ。あたしたちみんな、るうの味方だからね。だから、安心していいよ」

京子のその言葉で、またあたしの目に涙が浮かんだ。涙が止まらない。優しい気持ちが、こんなにも嬉しい。京子のハンカチで涙を拭いながら、あたしは掠れた声を絞り出した。

「美衣子を、懲らしめたいの。お願い。協力して……」

京子は迷うことなくあたしの両手を掴んで、力強く頷いた。

「勿論、協力してあげるよー。だってあたしたち、友達なんだからー。」「…………ありがとう……」

みんなの優しさが嬉しそぎて、あたしは涙を流し続けた。瑠夏が微笑みながら、あたしの頭を撫でてくれる。あたしは泣き腫らした目を瑠夏に向けて、瑠夏と同じように小さく微笑んだ。

第7話 開始

京子たちと美衣子いじめの作戦を話していると、不意に誰かに肩を叩かれた。振り返ると、そこにはあいつが居た。……そり、美衣子だ。

「ねえ、ぬうちゅあん。ちょっと良いい?..?」

京子がすぐわまあたしの代わりに、優しい笑みを浮かべて首を傾げる。

「あ、美衣子。どうしたの?」

京子のその問いかけに、美衣子は一瞬、怪訝な顔をした。あたしゃ瑠夏が他の子と仲良くしたことなんて、今まで一度も無かつたから、きっと戸惑つてしまつたのだろう。

「え、えっと……」

美衣子は暫くもじもじしていたが、やがて顔をあげて、こいつ四つ

た。

「消しゴム忘れちゃつたみたいなの。良かつたら、貸してもらえないかなあ……」

その瞬間、グループ全員の会話が止まつた。しんと張り詰めた空氣の中、瑠夏があたしの耳元で囁いた。

「……今、メールで協力頼んだんだけど、みんな協力してくれるつ

てた

あたしと田が会った女子たちがみんな小さくサインを出したのを見て、あたしは思わず口元を緩めた。クラスの女子全員が、あたしの味方になつたのだ。

「あの、るうちゅん……お願い、消しゴム……」

遠慮がちに話しかけてくる美衣子。折角いい気分だったのに、その耳障りな声を聞いてだけで再び怒りが湧いてくる。

「分かつてゐるつて……ちょっと待つて」

一応美衣子にそう言つて笑いかけて、あたしはもう一度自分の席へ向かつた。机から筆箱を取り出し、消しゴムを取り出す。猫のキャラクターが印刷されている、あたしのお気に入りの消しゴム。ちょっと勿体無いけど、この際仕方が無い。あたしは覚悟を決めて、その消しゴムを構え、にやりと笑つた。

「美衣子、それじゃあこれ貸してあげる！ 投げるから、ちゃんと受け取つてね！」

あたしが強い力で投げたその消しゴムは、美衣子の体に勢い良くぶつかつた。びしっという鈍い音に、美衣子の驚いたような悲鳴が重なる。その瞬間、まったく別の方向から、またしても美衣子めがけて消しゴムが飛んできた。それは美衣子の頬に当たつた。流石に痛かつたのか、美衣子はぎゅっと目を瞑つて慌てて頬を押さえた。美衣子にその消しゴムを投げたのは瑠夏だつた。瑠夏は静かに美衣子の傍へ歩み寄り、にっこりと微笑んだ。

「あたしのも貸してあげるから、使つてね」

「…………うん……瑠夏ちゃん、ありがと…………」

美衣子は急いで床に散らばった2つの消しゴムを拾い上げようとしました。それ待っていたかのように、京子が自分の消しゴムを美衣子の背中に投げつけた。

「あたしのも貸してあげるね、美衣子」

あたしたちの行動を見て、クラスの女子がいっせいに筆箱を漁り、自分の消しゴムを美衣子に投げつけ始めた。

「それじゃああたしのも貸すー！」

「あたしもー！」

「あたしのも使っていいよー！」

これが漫画やテレビドラマの世界ならば、誰かがいじめに遭つていたら助けるなんていうヒーローがクラス内に必ずいるはずだが、あたしたちのクラスは酷く現実的だった。男子達は普段どおり好きな漫画やゲームの話をしてはしゃいでいるだけで、此方には見向きもしない。いや、もしかすると気づいてしているのかもしぬないが、誰も助けはしなかった。

美衣子を虐めるあたしたちにとっては、この環境はとても適していた。更に調子に乗つたあたし達は、美衣子をもつと傷つけようとして躍起になつた。

「ねえ、美衣子お

「誰の消しゴム使うの〜？」

「あたしの、使わなかつたら殺すからね！」

「私も使つてよ？ あんたなんかに貸してるんだからー！」

「あたしのもひゅんと使ってよー。」

クラスの女子全員から理不尽な罵声を浴び、美衣子は涙目になつて震えてくる。あたしと瑠夏と京子は美衣子の側へと歩み寄り、黒い笑みを浮かべた。

「ねえ、美衣子。どの消しゴム使つの?..」

「る、るうちやん……瑠夏ちゃん……京子、ちゃん……? ピリヒたの……? なんか、怖いよお……」

「折角貸したんだから、全部使い切つてね? もし捨てたり無くしたりしたら、あたしたち全員、あんたと縁切るからね! わかつた?」

美衣子はひとつひとつ泣き出しつた。泣きながら、何度も首を縦に振る。

「じやあれと逆じゴム、拾えよー。」

美衣子は泣きじやくじながら、大量の消しゴムを拾い集め始めた。あたしたちは全員で美衣子を取り囲み、その姿を嘲笑つた。

第8話 快感と怒りと偽り

あたしは一人でにやにやと笑みを浮かべていた。憎い誰かをいじめる事が、こんなに楽しい事だったなんて、知らなかつた。もつと苦しめて、もつと痛めつけて、もつと傷つけてやりたい。もつと楽しみたい。もつと優越感に浸りたい。あいつはこれから先ずっと、あたしのおもちゃだ！

1限目が終わり、10分間の短い休憩時間になつた。すぐさま自分の席を離れ、片手で肩にかかつた自分の髪の毛を払いながら、美衣子に声をかけた。

「美衣子」

美衣子は、大慌てで振り返つた。……あたしを見つめる目が小刻みに震えている。何だか凄く嬉しくなるわ、その表情^{カオ}。

「ねえ……数学の課題、できないつて言つてたでしょ？ 手伝つてあげようか」

なるべく優しげに微笑んだおかげで、美衣子はすぐに肩の力を抜いて、あたしに笑いかけてきた。

「え、ほ、ほんと？ あ……ありがとう」「いいよいよ」

笑顔でノートを受け取り、そこに並んだ問題をひとつずつ解いていく。問題を笑顔で解いていたら、沸々と怒りがこみ上げてきた。あたし、もしかしてこいつに、利用しやすい女だと思われてたのかな？ 雪山先輩の恋バナを真剣に聞くフリをしたり、あたしの恋

を応援するフリをしたり……。今までずっと、『ぬうぢゅあんなら何も分からぬ』……。そう思われたのかな？

そんなことを考えていたら頭に血がのぼって、問題を解き間違えてしまつた。苛立つたあたしは消しゴムを探すため、乱暴に自分の筆箱の中を漁つた。

(あれ？ 無い……あ、そつか)

……思い出した。あたしの消しゴムはやつれこつに“返給”してたんだつた。

「美衣子。消しゴム貸して」

苛立ちを隠そつともしない声でそう言つて、片手を美衣子の方に突き出した。美衣子は一瞬どきりと肩を震わせ、慌てて頷いた。

「あ、う、うん！ ええと……ど、どれ、だつたつけ？」

「どれでもいいわよ！ 早く貸して！」

「う、うん。じゃあ、これ……で、いい？」

美衣子が差し出してきた薄汚い消しゴムを受け取つて、ノートをこする。その消しゴムはとても消し難く、あたしの苛立ちを更に煽つた。

「もう！ なんで消えないのよー！」

あたしがそう叫んで力いつぱいノートをこすつた途端、大きな音がした。力を入れすぎてしまつたせいでページが真つ一つに破れたのだ。美衣子が、大きく目を見開いて、あたしの顔とノートを交互に見ている。あたしはその顔を見て、薄く笑つた。ああ、やつ

た。美衣子を失望させることができた。

「ぬ、ちやん……？」

美衣子の、悲しみに満ちた瞳。あたしが美衣子に裏切られた時の絶望的な瞳とそっくりだった。あたしは噴出しそうになるのを堪えながら、あえて普段どおりに振る舞つた。

「『めん！ ちょっと、手に力が入っちゃつた。ほんと、ごめんね』

あたしはそのまま、席を立つた。声は出さず、表情だけで笑いながら、瑠夏と京子に合図を送る。瑠夏と京子は笑顔で小さく頷いて、ほつきとちりとつを美衣子に投げつけた。

「美衣子、そこ掃除しといて。あんたみたいにすつ『じい汚いから』

第9話 恋愛

夕焼けが綺麗。空気がとても冷たい。私の口から、溜息と共に小さなくしゃみが飛び出た。

「はあ……寒い……」

咳いた私の口から出た白い息が、赤い空へ昇つていった。

……今日は、色々あつたなあ。何ていうか、皆の態度がおかしかった。特にるうちちゃんが一番変だつた気がする。大好きな親友なのに、今日はなんだか怖かった。違う人になつちゃつたみたいに……。

「るうちちゃん……」

るうちちゃんの顔を思い出したら、何故か少しだけ悲しくなつた。

「るうちちゃん」

もう一度るうちちゃんの顔前を咳いたその時、後ろから、誰かに声をかけられた。

「美衣子」

誰?…………もしかして、るうちちゃん?

振り返る。…………そこに立っていたのはるうち hadn't been there. そこには私の彼氏、雪ちゃんこと雪山拓正(私は、雪ちゃんって呼んでいる)。雪ちゃんは、私に向かっていつものように、優しく微笑んだ。

「どうした？ なんか、ほーっとしたのね？」

私は慌てて首を横に振り、満面の笑みを雪ちゃんに向けた。

「んーん、なんでもないよー。」

「そうか？ それじゃ、帰るつぜ。」

「うん！」

雪ちゃんが大きな手で私の手を握り締めてくる。私は雪ちゃんの手を握り返して、ぴたりとその隣にくつづいて歩いた。

「なあ、美衣子？」

突然顔を覗き込まれ、私の頬は一瞬にして真っ赤になる。私は雪ちゃんから目を逸らし、聞き返した。

「な、なあに？」

「あのや、さつき、誰かの名前呼んでなかつたか？」

「え？」

「ほら、ね、ちやん？ とか……」

複雑そうな雪ちゃんの表情を見て、私はすぐに理解した。自分の頬を両手で包み込んで、えへへ、と小さく笑う。

「ね、ちやんは私の親友だよ。男の子じゃないから、安心してね」

「そつか。それなら、いいんだけど」

「私、浮気なんてしないよ？ だって、雪ちゃんのこと大好きだも

ん

「…………うん。ありがとうな。…………たまに、不安になるんだ。俺、美

衣子につつあつたのかなつて……

頬を赤く染めて、雪ちゃんはそう呟いた。なんだか嬉しいような照れちやうようなその言葉に、私の頬も更に赤みを増した。

「…………私だつて。不安だよ？ 雪ちゃんかつこにこし、モテるし」

「はは、モテねえよ」

「ううん、モテてるよー。だつて、るうちやんわ……」

「…………私はハツと息をのんだ。

「…………、自分自身が幸せすぎてすっかり忘れていた。るうちやんも、雪ちゃんのことが好きだつたんだ……。雪ちゃんの事を奪つたみたいになつちやつて本当にじめんねつて、謝らなくちやいけないんだつた。」

「…………」

雪ちゃんに告白されてから、もう二週間くらいに経つ。毎日幸せそうに雪ちゃんを眺めて恋バナをする、幸せそうな笑顔のるうちやんを見てたら心地しても言に出せなくて、こんなにも月日が流れてしまつていた。

正直、言に出すのが怖かつた。るうちやんがこのことを知つたら、もしかしたら私との付き合つをやめてしまうかもしない。それだけは、絶対に嫌だつた。雪ちゃんも大切だけど、るうちやんも私の大切な親友。絶対に絶対に、るうちやんとは離れたくなかった。

だから今日も謝るタイミングを掴めなくて、謝罪の言葉は喉の奥に引っかかる出でこなかつた。メールを送るひとつとしても、いつも途中で指が止まつてしまつ。いうこう大事な事は自分の口からるうちやんに直接伝えた方がいいと思つし、文章、じゃ、自分の気持

ちが上手へわらひなこ事もあこかい……。

(ものを、今日よりと変だつたな。明日やることお出で
あればよくな)

私は雪うやんに氣づかれぬよつ、小さくしゃべ溜息をついた。

白い息が雪のゆき、ふわっと舞つた。

「じやあ美衣子、氣をつけてな」

「うん……一つもありがと、雪うやん」

こつもの衣差点で私たちは別れた。手を振つて、雪うやんの背中
を見つめる。

ばこばー。また明日ね。

私は自分の家に向かつて駆け出した。明日せ、明日やまねやん
といちがんに謝り。……やつ心に決めて。

第10話 狂氣

田覚まし時計の音が部屋に響き渡る。あたしは慌ててベッドから飛び起き、クローゼットに掛けてある制服を着ると、階段を駆け下りてリビングへ向かった。階段を下りる音を聞きつけたのか、台所から顔を出したお母さんが、あたしに笑顔を向けてくる。

「おはよー、涙」

「おはよー、お母さん！」

あたしもお母さんに笑いかけてからテーブルについて、朝ごはんを口にかきこむ。そんなあたしの様子をじっと見ていたお母さんは、嬉しそうに微笑んで、じぶん咳いた。

「お母さん安心したわ。涙が元に戻ってくれて……」

あたしは一瞬、箸を止めてお母さんの顔を見た。……“元に戻つた”ところはきっと、あたしが休んでいた3日間を思い出して言った言葉なのだ。「

「うん、もう大丈夫だよ。だつて、」

だつて……。その続きは言わず、あたしは椅子から立ち上がった。

「それじゃ、学校行つてくるね」
「ええ。気をつけてね」
「はーーー。」

靴を履き、お母さんに手を振つてから元気良く玄関を飛び出す。駆け出すあたしの足取りは軽かつた。マフラーの中を冷たい風が吹き抜けていったが、その冷たさすらも嬉しく感じた。

（お母さん、もう大丈夫だよ。だって、いいおもちゃを見つけたんだもん）

沢山、沢山遊んでやらなくちゃ。それはもう、壊れるほどに。いくらいあいつを痛めつけたってあたしの傷は癒えないから、あいつの心にも大きな傷を刻んでやるんだ。

第1-1話 エスカレート

「みんな、おはよーー。」

元気良く教室に入ったあたしの元に、瑠夏が笑顔で駆け寄つてくれる。

「るー、おはよーー。今日も、やるんだよね？」

「当たり前じゃんー。とにかくやるのよ、とにかくー。」

胸を張るあたしを見て、瑠夏は嬉しそうに笑つて大きく頷いた。

「あのね、るー！ 奈々ちゃんが、るーのために作戦考へてくれたんだって」

瑠夏はそう言つて、自分の後ろにいた女の子があたしの前に押し出した。その子は無表情のままで、あたしに一枚の紙を差し出した。

「……奈々が書きました。良かつたら参考にしてください。」

この子の名前は、前田奈々《まえた なな》。何を考えているのかわからぬ不思議なタイプの女の子で、今まで一度も話した事は無い。けれど、どうやらこの子もあたしに協力してくれるらしい。

「ええと……これは？」

「……お役に立てるかどうかは……あまり自身が無いのですが、一応作戦らしきものを考へてきました」

「ふーん……どうもありがと。ね、読んでみてもいい？」

「はー……えうわー」

その返事を聞いて、折り畳まれた紙をゆっくりと開く。その紙には、沢山の文字が細かく書き込まれている。それらすべてがいじめの計画だということに気がついて、あたしは思わず目を丸くした。

「……うーん、下駄箱に虫入りたり机隠したり落書きしたりするのは、確かに王道だけどありきたりだよね」

「……やっぱり、そうですか……。とつあえず、漫画やドラマを参考にしたものが多いので……」

すると瑠夏がその紙を覗き込んで、急にニヤニヤ笑いを浮かべた。

「いいじゃん、この際全部試してみよう。結構こうひこう王道のほうがキツいかもしれないよ?」

あたしはそれを聞いて、小さく笑い声を上げた。それから顔を上げて、頷く。

「……うん、そうしようか。確かにそのほうがあたしたちも楽しいしね。奈々ちゃんも、手伝ってくれる?」

奈々は少し驚いたような顔をした後、すぐに、少し恥ずかしそうに頷いた。

「はい、勿論です。……あ、奈々で結構ですよ」

「ありがとね、奈々。ええと、それじゃ、瑠夏。京子も呼んできてくれる?」

「わかったー」

瑠夏が笑顔を浮かべて京子を呼びに走る。あたしは口の端を歪め

て、黒く微笑んだ。

京子、奈々、瑠夏の3人がそろつたところで、あたしは3人を従えて下足場へと移動した。美衣子の靴箱に駆け寄り、外靴を片一方だけ取り出す。そして、中庭から取ってきた湿り気のある土を、たっぷりと靴の中に詰め込んでやった。

「こんなもんかな。……それじゃあ、京子」

もう片方の靴は、京子に渡した。

「これ、よろしくね」

京子は親指と人差し指でマルを作つて、元気良く返事を返してくれた。

「うん、任しといて！」

そしてそのまま、靴を握り締めて中庭に向かつて駆け出していく。あの靴は、中庭にある小さな畝に埋めてもらつ事にしたのだ。

「さて、じゃ、あたしたちは」

「しつかり書きますか」

あたしと瑠夏はお互いに笑い合つて、ポケットの中から油性ペンを取り出し、美衣子の靴箱に中傷の文字を書いた。

『ばーか。学校来てんじゃねーよ。死んじまえ』

『お前みたいなヤツ、生きてるだけで害なんだよ…』

『マジきもい。死んでくんない?』

……他にも色々書いたけど、書い出したらキリが無いから、思い出したくない。ただ、思いつく限りの中傷の言葉は、一つ残さず書いた。そういうしてくる内に、京子が満面の笑みを浮かべて戻ってきた。

「言われたとおりの場所に埋めてきたよ!」

「あ、京子ありがと! とにかく、アレは取つてきた?」

あたしが尋ねると、京子は満足げに頷いて見せた。

「うん、勿論。これでいいでしょ?」

京子が差し出してきたのは菊の花。中庭の後ろの墓地にあつたものを持借したのだ。

「これこれ!」

あたしたちは菊の花を美衣子の下駄箱に詰めた。ついでに、自販機の下で死んでいたトカゲの死体も入れておく。美衣子はこれを見てどんな顔をするだろうか。想像しただけで、笑いが止まらなくななる。

「あとは美衣子が来るのを待つだけ!」

「教室戻ろっ かあ

「美衣子、どんな反応するかな?」

「楽しみですね……」

あたしたちは教室に戻り、(悲劇の)ヒロイーンが来るのを待つことにした。

第12話 Crazy

瑠夏が、「あー」と大声を上げて窓から身を乗り出した。あたしはその様子を見てほくそ笑む。……どうやら、ヒロインの「」登場らしい。

「るう、来たよ！　みい……」

突然瑠夏の顔が強張ったのを、あたしは見逃さなかつた。首を傾げて、瑠夏の傍に近寄る。

「どしたの？」

「ちょっ……あの、ええっと……ごめん、あの、人違い！　人違いだつた！」

明らかに乾いた笑い声を上げ、あたしに窓の外を見せまいと阻止していく瑠夏。

「何、瑠夏つてば。変なの？」

無理矢理瑠夏の脇をすり抜けて、身を乗り出して窓の外を見たその瞬間、あたしの笑顔は凍りついた。奈々と京子が首を傾げながらあたしと同じように窓の外を見て、ぱつが悪そうな顔をする。

「……」

窓の外にいたのは、美衣子と一緒に登校してきた（らしい）、雪山先輩だった。

呆然と見ているうちに美衣子が自分の下駄箱を開けた。その瞬間、

泣きながら雪山先輩に抱きつく美衣子。 雪山先輩は美衣子を強く抱きしめた後、靴に入っていた大量の泥を払い、菊の花を引き千切つて、ゴミ箱へ捨てた。

あたしは震える足を踏み締め、窓の外をじっと見つめ続ける。雪山先輩の怒鳴り声が、2階にまで聞こえてきた。

「ふざけんなよー。マジ許せねえ！ 誰だよ、美衣子にこんな真似したの！」

通り過ぎていく他の生徒たちは不思議そうな顔をして2人を見ているけれど、先輩が怒鳴るたびにあたしの心は、深く深く傷ついた。

雪山先輩が怒ってる……。あたしのした事に対して怒ってるの……？

涙がこみ上げてきて、物凄く悔しくなった。

先輩、先輩、先輩……。大好きな先輩。あたしだつていっぱい傷ついたよ？だから、あたしの為に美衣子を怒鳴つてよ。泣かせてよ。苦しませてよ……。そうやって美衣子ばかりをかばうなら、あたしは、もっと美衣子に嫉妬してやる。もっと美衣子を傷つけてやる。

「る、るう……」

「その……」

「大丈夫、ですか……？」

瑠夏と京子、そして奈々が遠慮がちに尋ねてきた。あたしは何も答えず悪魔のように目を光らせ、美衣子を鋭く睨みつける。

「3人とも、早く次の準備しろよ。あいつが来る前に、早くー！」

「う、うん……」

返事を返したのは、瑠夏だけだった。その他の2人はまだ付き合
いが浅いせいか、あたしの豹変ぶりに言葉を発せなかつたらしい。

「何棒立ちになつてんのよ。早くしてつてばー。」

あたしは立ちすくむ3人に、油性マジックを投げた。3人はなぜそれを渡されたのかすぐ理解したらしく、戸惑いながら頷いて、美衣子の机に近寄つた。

「まずはコレで出来るだけ精神を削つてやろう。その後は、美衣子をもつと傷つけられるような方法を考えなくちゃね」

あたしは薄く笑い、油性マジックのキャップを外して、机に中傷の文字を書き連ねた。それを見た瑠夏と京子、奈々もあたしの後に続く。

「……これでよしつと」

あたしたちは美衣子の机から離れた。あたしの机に移動して、普段通り雑談を始める。だけどどうしても無意識のうちにドアのほうに視線がいつてしまう。

数分後、沈んだ美衣子の顔が、あたしの瞳の端に映りこんだ。

「来たつ……！」

満面の笑みを浮かべて、思わず椅子から勢い良く立ち上がりつしまつた。しかし、次の瞬間あたしは口をボカンと開け、両目を大きく見開いた。

「る、るう……」

「あれって、もしかして……」

「……ヤバい、ですか？」

瑠夏、京子、奈々の3人の視線があたしに集まる。心臓が早鐘のように脈打ち始めた。てのひらに汗が滲んでいく。

美衣子の隣には、雪山先輩の姿があった。

先輩は美衣子に優しい言葉をかけながら、美衣子を支えるようにして教室の前にやつてくる。先輩が教室のドアを引いて、美衣子を席まで誘導してきた。美衣子は少し安心したような表情を浮かべていたが、机の上に書かれた文字を見て、悲鳴をあげて両目を瞑つた。

「いやあああああああ……」

静まり返る教室。泣きじゃくる美衣子を必死に慰める雪山先輩。人目も気にせず抱き合つ2人……。

それを見ていたら怒りが最高潮に達して、思わず、あたしは2人のほうへ歩き出していた。足音に気づいて此方を見る、美衣子と雪山先輩。美衣子の机を一瞥したあたしは、薄ら笑いを浮かべて、言った。

「うわあ……かわいそー。美衣子つてば、どうしたの？」「これ」「る、るうちゃん……つこれ、誰かが……私に嫌がらせ、してるみたいで……つひつぐ、朝から、変なの……。靴も無かつたの……つ。どうして？ なんでなの？ 私……なにか、したのかな……ひつく……つ助けて、るうちゃん！ 私、怖いよお……つ」

抱きついでこよつとする美衣子の手を、思い切りはねつけてやつた。美衣子は涙を浮かべたまま、え？ と小さく声を上げる。あたしは美衣子を鋭く睨みつけて、低い声を出した。

「ねえ…… 美衣子さあ、何で雪山先輩と一緒にいるわけ？ まあ、それを説明してくれない？」

美衣子はハッと息を呑み、それから制服のスカートを両手で握り締めて、途端に顔を蒼ざめた。

「あつ…………これはっ、あの、…………その…………あつと書おつと、思つて、たんだ、けど…………」

……今更、言い訳なんて聞きたく無い。 あたしは大きく笑い声を上げて、美衣子の肩を強く掴んだ。

「あんた、裏切ったんだ？ あたしの事」

「ち、違…………違うの、るうちゃん…………！」

「違わないでしょ？ もうあんたなんて大嫌い！ 絶交よー！」

この世の終わりみたいな顔をしてあたしを見ている美衣子から手を離し、2人に背を向けて歩き出す。

「あ、そういう

途中で軽く振り返り、こう付け加えてやつた。

「いやいやするなら、外でやつてくれる？ 教室、暖房入りすきて暑いくらいだから」

それから片手で、しつし、と2人を払う仕草をした。

……これでいい。これで反吐が出るほど嫌だった、あいつとの仲良じいっこも終わる。

瑠夏たちの元へ駆け寄ろうとしたら、此方を見ていた瑠夏たちの表情が固まつた。

「？」

あたしはそれを不審に思い、首を傾げた。……その時。襟首を、力一杯後ろから誰かに掴まれた。

「きやあつ！」

その場に倒れ、振り返つて後ろを強く睨みつける。そしてあたしは、ハツと目を見開いた。あたしの襟首を掴んだのは、雪山先輩だったのだ。雪山先輩はあたしを乱暴に立たせると、あたしの肩を強く掴んで、大声で怒鳴つた。

「お前か？ 美衣子に嫌がらせしてた奴は！」

「……はあ？」

その言葉に、思わず反抗的な声が出る。

「今すぐこの机綺麗に拭けよ！ 土下座して美衣子に謝れ！ 僕の彼女に何すんだよ！」

美衣子が慌てて雪山先輩の腕を掴んで、甲高い声を上げた。

「雪ちゃん、ダメ！ 違つよ、るっちゃんのせいじゃない。だからお願い、そんな事言わないで。お願いだよ……っ！ 私なの。私が全部悪いの。……ちゃんといえなくて、だから……っ」

必死に雪山先輩を宥めようとしている美衣子の顔を、今すぐズタ

ズタに切り刻んでやりたいと思った。そしてその隣で尚もあたしを怒鳴り続けている、雪山先輩の顔も……。

気付くとあたしは先輩に向かって片手を大きく振り上げていた。先輩の頬を力一杯打つたその瞬間、乾いた音が教室内に響き渡った。あたしの手には淡く痛みが残つて、それが更にあたしの怒りと悲しみを煽つた。

「……っ」

あたしは息を大きく吸い込み、涙をいっぱいためた瞳を先輩に向けて、叫んだ。

「先輩の馬鹿！ どれだけあたしを傷つけたら気が済むのよ！ あんたなんて大嫌い……っ。美衣子と一緒に死んじゃえれば良いのよ！」

あたしは泣きながら教室を飛び出した。瑠夏、京子、奈々が、慌ててあたしを追いかけてくる。あたしの中はボロボロで、どうしようもなく悲しくて悔しくて……死にたくなつた。

どうしてあたしじゃダメなのよ。どうしてあいつを選んだのよ。あんなやつになければよかつたのに。そうしたら先輩はきっとあたしだけの人になつたのに。

醜く歪んだ恋心は、“どどまる”という言葉を知らなかつた。だからあたしはあんな酷い過ちをおかしてしまつたんだ。もしもこのときちゃんと諦めることができたのなら……もしもこの時2人の幸せを願うことが出来たなら……このあとに待ち受ける悲しい運命は回避できたのかもしれない。

「ぬう、待つて！」

瑠夏に腕をつかまれ、あたしは涙目のまま立ち止まって振り返った。

「 るう……。大丈夫……？」

心配そうに、あたしの顔を覗き込む瑠夏。あたしは涙を拭つて、平静を装つた。

「…………ん。大丈夫、だよ？ もう、あんな男大嫌い。だけど、やつぱり…………あいつらは、どうしても許せない…………」

「うん…………わかる、わかるよ、るう…………。あたしたち、味方だから。るうの、味方だからね…………」

「ありがとう…………瑠夏、京子、奈々…………嬉しい…………」

あたしはこのとき、強く誓つたんだ。美衣子と雪山先輩を、地獄に突き落としてやるって…………。

第13話 隠湿

長い授業時間が終わり、10分間の休憩時間が訪れた。机に書かれた落書きを消す為に美衣子が職員室へバケツと雑巾を借りに行つたのを見て、あたしたち4人は美衣子の机へと近寄つた。言つまでもなく、更なる嫌がらせを仕掛ける為だ。まずカッターナイフの刃を思い切り出して、美衣子の机の奥の方へと忍ばせる。その後、筆箱の中のシャーペンは床に叩きつけて割り、定規も真っ二つに叩き折つた。机に入っていたノートや教科書には落書きをしたり、ビリビリに破いてゴミ箱へ入れてやつた。

そこまでの作業を終えてもまだやり足りなかつたあたしは、奈々に顔を向けた。

「ねえ奈々、他に何か面白いいじめ方無いかなあ

奈々は暫く考え込んだ後、あ、と呴いてポケットから接着剤を取り出した。

「……これ使ってやりましょう
え、どうやって？」

そう尋ねると奈々は口の端を歪めて接着剤をチューブから出した。

「決まつてゐるじゃないですか……。椅子と机をこいつやって床に貼り付けて……」

それを美衣子の椅子の足にたつぱりと塗り付けて、床とくつづけた。あたしもようやく意味が理解できて、顔を輝かせて両手を叩いた。

た。

「なるほどー、奈々、あたしにもひょいとひょうだいー！」

接着剤を指に出してもらい、美衣子の机の足に塗つて床に貼り付ける。ついでに机にも塗りつけて、美衣子の筆箱や読書用の本もそこに固定してやった。

「玩具屋さんのディスプレイみたい！」

「これ、絶対ショックだよー。あたしなら泣こいやうねー！」

あたし達はこれを見た美衣子の顔を想像して笑つた。あいつ、どれくらい絶望的な顔をするだろ？

接着剤の臭いが教室内に充満する。流石にそれには男子たちも参つたのか、みんなゾロゾロと教室から出て行つた。そして、男子達が教室から消えたその直後。……教室の扉が開いた。

「！」

「来たよ」

その弱々しい扉の開け方で、扉の方を見なくとも美衣子が帰つてきた事が分かつた。あたしはにやりと笑みを浮かべて、その場に居た女子全員に指示を出した。

「……みんな、静かにー！」

それを聞いたみんなはお互いに顔を見合させて、一切のお喋りを止めた。

水を打つたように静まり返る教室内を、美衣子がゆっくりと歩いてくる。自分の机に広がっている光景を目の当たりにした美衣子は、

一瞬だけ、唇を噛み締めた。が、すぐに無表情になつて、机の上に貼りついた筆箱や本を剥がしにかかつた。その行動を見たあたしは笑いを堪えながら、そつと美衣子の方へと歩いていき、声をかけた。

「美衣子」

あたしが名前を呼ぶと、美衣子はそつと此方を振り向いた。

「な、何？ るうちゃん……」

嬉しさと不安が入り混じつた表情。あたしは美衣子に向かつて優しく微笑み……一瞬で、眉を吊り上げた。

「雑巾貸して欲しいんでしょ？ 貸してやるわよっ！
「え……っ！ さやあ！」

あたしは隠し持つていた雑巾を美衣子に向かつて投げつけた。泥水に浸しておいた、とびきり汚い真っ黒な雑巾が、美衣子の制服を黒く汚した。瑠夏が甲高い笑い声をあげて、美衣子のその格好を指差して嘲笑う。

「すつーーー めっちゃ似合つてるーーー もつと綺麗にしてあげる
ねつ」

瑠夏は予め用意していた泥団子を美衣子の顔面目掛けて投げつけた。他の女子たちも、クスクス笑いながら、泥団子を美衣子に投げつける。

「痛つ！ 痛いよお！ みんな、やめてえ！」

美衣子の苦しむ顔を見て、あたしは腹の底から笑い声をあげた。

今までに味わったことが無いくらい、本当に最高な気分だった。

沢山の泥団子が美衣子の体にぶつかり、粉々に砕け散る。美衣子は、だんだん抵抗するのをやめてきた。両腕をだらりと下げて、瞳から涙を流しながら、飛んでくる泥団子を体で受け止め続けている。美衣子のそんな様子を見ても、あたし達の勢いは増すばかりだった。

「ちょっとお……」

「面白くないじゃん」

「もつと泣き叫びなよー。」

あたしは泥団子を引っつかみ、爪に泥が入るのも構わず美衣子の顔目掛けて思い切り投げつけた。今までより一際大きな音が教室内に響いたその瞬間、美衣子の体がその場に崩れ落ちた。美衣子は鼻を押さえて呻き声を上げている。美衣子の鼻から、滴り落ちる血。泥団子が鼻を直撃したらしい。それを見たあたしは、思わずガツツポーズをとつていた。

いじめ始めてから初めて美衣子に血を流させることが出来たから、物凄く嬉しかった。だけどこんなのまだまだ、あたしが流した血よりももうひとつ大量の血を流せないと、気が済まない。

鼻を押さえて床に蹲っている美衣子と皿が合つた。美衣子の皿に生気は無く、あたしを見る美衣子の瞳は、もつ友達を見ているような瞳ではなかった。

「……」

美衣子は何も言わずにゆっくり立ち上がり、ポケットからティッシュ

シユを取り出して、それを鼻に詰めて止血を始めた。暫くの間黙つて美衣子のその姿を見つめていた瑠夏が、妙に明るい声を出して、両手を叩いた。

「あ。そういうばさ、次つて体育だよね！」

「あ、そっかあ。着替えなくちゃね」

あたしたち4人とその他の女子は、美衣子に背を向けて着替えの準備を始めた。

いつもは瑠夏と美衣子との3人組で着替えていたけど、今日からは体育の度に、美衣子は一人ぼっち。そう考えただけで堪らなく嬉しくて、思わず笑いが込み上げた。

美衣子はどうやら鼻血が止まらなかつたらしく、手洗い場のほうへ駆けて行つた。あたしたちはその後姿を無言で見送つた後、机の脇に掛けてあつた美衣子のスクールバッグを漁つて、その中身を次々と取り出していった。

「あつたあつた、体操服！」
「切つちやえ切つちやえ」

瑠夏は躊躇う事無く体操服にハサミを入れた。一定のリズムを保つてハサミが進んでいく。京子と奈々はその様子を、息を潜めて見ていた。

「ここのくらいでいい？」
「まだまだだよ。貸して！」

あたしは瑠夏の手から体操服を奪い取り、何度も何度も体操服を切り裂いた。その間あたしの脳内には、美衣子が必死に許しを請いながらもあたしたち4人にナイフで切り刻まれる、とても生々しい映像が浮かんでいた。何度も何度も美衣子は「助けて」とあたしに懇願し、あたしはニヤニヤ笑いながらみんなと顔を見合させ、「絶対許さないから」と美衣子を突き刺す。美衣子の生暖かい血が飛び散つて、あたしの頬に付着する……。

「最高」

あたしは無意識のうちに、そう呟いていた。
体操服は見るも無残な布の塊と化し、完璧に一度と着る事が出来ない状態になつた。しかし、幾ら待っても肝心の美衣子が戻つてこない。

「はあ……あいつが帰つてくるまで、暇だなあ」

あたしの言葉に、奈々が素早く反応し、こう言った。

「……それなら、もひとつやります」

「え？ ……もひとつ？」

「うう。どんな、しちゃいましょう」

奈々は美衣子のスクールバッグを逆さにして、上下に激しく振つた。中から、美衣子の持ち物が大量に出てきた。

「IJの中にあるもの、全部再起不能にしてしまえば良いのです」

奈々はバッグを投げ捨てるとい、ハサミを構えて目ぼしい物を探始めた。あたしも奈々と共にしゃがみ込んで、面白そうなものを探す。鼻歌を歌いながら、色んな物を触る。リップ、鏡、ホッカイロ、飴の包み紙、MD、携帯電話、プリ帳らしきノート。色々な物が入つていたが、あたしが1番切り刻みたかったものは、いつも羨ましかつたブランド物の長財布だった。見せびらかすようにその財布からお金を出していた美衣子の姿が、鮮明に脳裏に浮かぶ。あたしは湧き上がる怒りを抑えながら、そつとその財布に手をかけて、何となく中身を確認してみた。

「……あれ？ これ……お金入ってるー。」

あたしの声を聞きつけた瑠夏が、真っ先に両手を差し出してはしゃいだ。

「マジ？ じゃあ、じゃあ、勿体無いから中身は貰ひやけりやおうよー。」

その言葉に大きく頷いて、中に入っていたお札や小銭を出す。

「みんなで分けよー。」

中のお金を探してから、中身の無くなつた財布を掲げたあたしは椅子の上に立ち、大声を出した。

「じゃ、切れますー！ みんな、よく見といてねー。」

京子が田を輝かせて、あたしの手に握られた財布を見つめた。

「うわー……ドキドキするー。」

「ああもう、勿体ないー！」

悲鳴に近い叫び声をあげながら、財布にハサミを入れようとした
……まさに、その瞬間だった。

「やめて……っやめてよー。」

教室に戻ってきた美衣子が、叫びながらあたしに飛び掛ってきた。
あたしは椅子から転げ落ち、尻餅をついてしまつ。

「…いたあ……何すんのよ…」

あたしの手から財布を奪い取った美衣子は、震えながらその場に蹲つて泣き出した。

「…これ…やめて…！　ほんとこ、本当に大事なもの…」

「！」

美衣子は財布を強く抱き締めた。少しだけ苛立つたけど、ふと良い事を思いつき、財布を奪い取るのは止めてやつた。腕組みをして美衣子の傍に仁王立ちになり、笑みを浮かべて片手を差し伸べる。

「それじゃあその財布の代わりに、これからあたしたちに毎日100円ずつ払いなさい。4人全員に……毎日よ、毎日。学校が無い日はちゃんと1人で学校に来てあたしたちの下駄箱に入れておくこと。それが守れるなら財布の事は許してあげる。どう？」

毎日400円の出費は痛いだろう。美衣子が蒼ざめて首を横に振る様を是非とも見てみたくて言つた言葉だった。しかし、美衣子は涙を流しながら頷いたのだ。

「わかった……約束、守るから……だから許して……！」

土下座して懇願する美衣子。予想外の反応は思つていたより面白く無くて、あたしは美衣子を冷たく見下ろした後、瑠夏、京子、奈々に声をかけた。

「みんな、体育、行こ！」

何故か凄く腹が立つた。理由はわからないけれど、やけに素直な

美衣子に腹が立つた。もつと泣き言んでほしかったのに。蒼やかに、
泣きじやくしてほしかったのよ。こんなに、
とんだ期待はずれだ。

第15話 体育

「美衣子!」

るうちさんの声に、私ははっと顔を上げた。みんなが穏やかな目で私を見る。安心して笑みを浮かべ、みんなの元へ駆け寄りういたら、体がやけに重い事に気が付いた。

「……あ、「

喉の奥から小さく声が漏れる。体が重い。何かがのしかかっている。るうちさんたちの表情が急変した。鬼のような形相を浮かべたるうちさんたちは、私に向かって罵声を飛ばしてきた。

「早くしなよ、美衣子!」

「体育始められないじやん!」

「この、グズ!」

次々とあびせられる罵声を聞き、私は現実を思い出した。

「……ああ、そうだ。今日の体育は跳び箱なんだ。その跳び箱の準備を、私はたつた一人でさせられているんだ。

「……」「めんな。今、行くから」

鉛のように重い足を引きずりながら、抱えていた跳び箱をおろした。それを繰り返し、1段1段積み上げていく。跳び箱が重くて苦しくて、私を睨み付けるるうちさんたちが恐ろしくて、私は必死で涙をのみ込みながら作業を続けた。ようやく3段積み上がり、ほつと息を吐くと、るうちさんが突然私の背中を強く叩いた。

「きやつ！ な、何？ るうちゃん……」

「……美衣子、何してんの？ もつと積みなよ」

「え？ な、なんで？ いつも3段つて決まって……」

「いいから、『ごちや』ごちや言わずに早くしゅつーの一！」

「……わ、わかつ……た」

言われるがまま体育館中の跳び箱を寄せ集め、必死で積み上げる。その結果、体育館内にあつた跳び箱は全て無くなってしまった。積みあがつた跳び箱を見上げて、私は両手を見開いた。跳び箱は、私の背丈よりも随分高くなつていた。

こんな高い跳び箱を跳べる人なんて、果たしてこのクラスに存在するのだろうか？ そんな事を考えながら跳び箱を見上げていると、るうちゃんが私の肩を叩いて笑つた。

「わかつてると思つけどさ、あんたが1番先に飛んでよ？」
「……え」

思わず、私はるうちゃんを見た。笑つてはいるけど、るうちゃんの目は本気だった。

「ほら、美衣子」「早く跳んでよー」

色々な人に突き飛ばされて、私はいつの間にか列の1番前に立たされた。みんな私が飛ぶのを待つていてるらしく、1歩後ろに下がつて私を睨み付けている。

嫌な汗がじつとりとジャージに滲んでいく。みんなの顔が般若に見えてきた。助けを求めるようにみんなの顔を見るが、誰一人私と目を合わせてくれなかつた。

「早く飛びなよ、美衣子」

るうちちゃんが列の一番後ろで怒鳴っている。

「そんなの無理だよ、るうちちゃん……！」

瞳に涙を浮かべながら後ずさる私。しかし、るうちたちからの罵声は止まらない。

「いいから跳べよ」

「殺されてえのかよ！」

“殺されてえのかよ”……その一言が、私の胸に深く突き刺さつた。

「……っ」

酷いよ。みんな、酷すぎるよ。

私は目を硬く瞑り、震える足を奮い立たせて、叫び声をあげながら跳び箱へ向かっていった。わけのわからないまま、すごい衝撃が体を襲つて、何かが崩れる音がした。

気がついた時には、私は頭から血を流して倒れていた。

「……っ痛い……痛いよお……っ」

瞳から涙が溢れ、頭から流れる血が白いマットを染めていつても誰も助けてくれなかつた。みんな冷たい目で私を見ている。それどころか数人、笑つてる人さえいた。やつとその時、私は心の底から理解することができた。……私は、一人ぼっちなんだ。

声を押し殺して、頭の痛みと胸の痛みに苦しみながら泣いていると、誰かがこちらに駆け寄つてくる足音が聞こえた。

「春風さん、どうしたの！」

重い頭を動かすと、体育の先生が血相を変えて此方の方へ走つてくるのが見えた。

どうしてだろう。すごく嬉しかったのに、私はその時少し先生を恨んでしまった。先生がもっと早く来てくれていれば、私はこんな事にならなかつたかもしれないのに、って。

「せんせ……い……」

声を絞り出して、泣きながら先生に手を伸ばす。先生は慌てて私の体を抱き起こした。

「どうしたの！ 大丈夫？」

上手く舌が回らなくて、言葉を紡ぐことができなかつた。
お願い、助けて先生。このままじゃ私、殺されちゃうよ……。

「とにかく、何があつたのかは後で聞くわね。急いで保健室に行きましょ。……歩ける？」

先生に支えられてのろのろと立ち上がる。足がふらふらして、眩暈がした。立つていられない。ジャージに血が付いている。血痕が点々と床に落ちている。目の前が霞み、体が痙攣する。

倒れ込みそうになつた時、体育館内に大きな声が響いた。

「先生、あたしたちも手伝います！」

その声に驚いて、思わず振り返る。そう言ったのはなんと、るうちゃんだった。るうちやんたちは心配そうな顔をして、私の方へ駆けてきた。

「美衣子……大丈夫なの？ もう、あんな無茶するから……！」

涙目るうちやんがそう言って私の腕を掴むと、他の皆も同じように私の体を支え始めた。みんなに体を支えられた瞬間、全身に鳥肌が立ち、体が震え出した。脂汗が額に噴き出し、血の気が引いていく。

「いっ……いやあー 離して！」

私は叫び声を上げ、その手を振り払った。るうちやん達は一瞬驚いたような顔をしたあと、悲しそうに頭を伏せた。

やだ、やめてよ。その優しさも、その悲しそうな顔も、全部嘘なんでしょう？ もう、惑わされるのは嫌だよ。また勘違いしてしまう。また、友達になつてもらえるのかもつて期待しちゃう。俯いて震えている私と、悲しげに俯いているるうちやん達。それを交互に見たあと、先生が私に尋ねた。

「どうしたの、春風さん。みんな心配してくれているのに……」

違う。そう言おうとしたけれど、舌がもつれて喉が渴いて声が出なかつた。口だけをぱくぱく動かして、また俯く。るうちやんが、私の腕を掴んでいたと言つた。

「先生。美衣子、ショックで混乱してるんだと思います。だから美衣子を早く保健室に連れていいってあげてください」

握られた手に、強く力がこもった。驚いてるぅちゃんの顔を見たら、るぅちゃんは恐ろしい笑みを浮かべて、唇だけをこう動かした。

「逃がさないわよ、美衣子」

……その直後、私の体からフッと力が抜けた。

田が覚めたら私はベッドの上に寝ていた。かすかな薬品のにおいで、此処が保健室だと分かった。カーテン越しに誰かの声が聞こえる。保健室の先生と、るぅちゃん達の声だ。私はそつと起き上がり、カーテンに耳を押し付けて静かに田を閉じた。

「どうしてあんなことになつたの？ あなたたち、原因を知つていいでしよう？」

先生の声は真剣だった。でも、るぅちゃんたちが正直に白状するはずがない。私はシーツをギュッと握り締めて唇を力一杯噛み締めた。今すぐカーテンを開けて、言つてやりたかった。“先生、私もうちやんたちにいじめられてるの、助けて”……そう言つてやりたかった。だけど、どうしても行動には移せない。私はまだ心の片隅でるぅちゃん達の事を大切な親友だと思つてゐるから……。重苦しい沈黙が続いたかと思うと、突然、るぅちゃんの妙に明るい声が聞こえてきた。

「美衣子、なんか変だつたんですよーー 危ないって言つてゐのこ、飛び箱をどんどん積み上げて……」

るぅちゃんの嘘に、瑠夏ちゃんの嘘が重なつた。

「そりなんです！ 10段超えたときは流石に焦りましたよ～。勿論、あたしたち、止めたんですよ～。」

瑠夏ちゃんの次には京子ちゃんが、眞実味を帯びた嘘を吐く。

「なのに美衣子、『私運動音痴だから、練習しなくちゃやー』とか言って、勢いよく飛び箱に突っ込んでいいで……」

そこで京子ちゃんの言葉は途切れた。それから一息置いて、奈々ちゃんが言った。

「止める暇も、なく……。ああいうことに……なつちやつたんです」

視界が涙でくもった。怒りで体が小刻みに震え出す。危ないなんて言つてない。止めたなんて、嘘ばっかり。みんながそうさせた。みんなが突っ込ませた。みんなが私をいじめた。

「他の子にも聞いてみてください。あたしたちの言つたことは本当ですか？」

るうちちゃんの、自信たっぷりのその言葉。それを聞いた私の口元には、いつの間にか力の無い笑みが浮かんでいた。そりやあそうだよね。だってクラスの女子は全員私の敵だもん。るうちちゃんの命令を聞かない人は居ないもん。

「……っ」

私は枕に顔を押し付けて泣いた。悔しいよ。苦しいよ。辛すぎるよ……。シーツに吸い込まれていく涙と一緒に、この世から消えてしまったかった。

思わず涙と一緒に声が出そうになつて、ふと枕から顔を上げたその時、私は自分の異変に気づいた。

(あれ？……なんで？……どうして？……嘘だよね。こんなの…

…夢、だよね?)

「と口を開いて、これが勘違いではないと気づき、私は目を見開いて首を横に振った。

「美衣子さんは体調が良くなつてから教室に戻るつて事、ちゃんと担任の先生に伝えておこづけね」

カーテンの向こうに居る保健の先生がさう言つと、るいちゃんたちの元気の良い返事が聞こえた。

「はーい! わかつてます!」

失礼しました、という声が聞こえて、ドアが閉まつた。

私は、ベッドの上で天井を見上げていた。虚ろな瞳から涙が流れ落ちて、シーツを濡らしていく。その状態のまま5分ほどして、先生がカーテンを開けて私の顔を覗き込んだ。

「美衣子さん、どう? 落ち着いたかしら?」

私は涙を流しながら、黙つて先生に目を向けた。私の瞳から流れる涙を見て、先生は困ったような顔をした。

「じつしたの、美衣子さん? じうじて泣いているの?」

「じつしたの、美衣子さん? じうじて泣いているの?」
先生……じつじよつ。私、もうダメだよ。お願ひだよ。気づいて、
先生。

「美衣子さん?」

何も答えない私を、心配そうに見つめる先生。

私はベッドから勢い良く起き上がった。先生の机に手を伸ばして、筆立てからシャープペンシルを取る。机上にあつたメモ帳一枚破つて文字を書き込み、それをそのまま先生に手渡した。

『先生、助けて』

その文字を見た先生の表情が、少し曇つたのが分かつた。私は、震える手で更に文字を書き込んだ。

『声が出なくなっちゃった』

メモを読んだ先生が、慌てて立ち上がる。先生の体がぶつかって、消毒薬の入った瓶が床に落ち、音を立てて割れた。

「美衣子さん！ それ、本当なの？」

何故だかたまらなく不安を覚えた私は、先生のその言葉に、何度も何度も頷いた。

これじゃあもう誰にも助けを求められない。叫び声を上げることもできない。もしこれからうちゃんたちにもつと酷いことをされて、誰かに助けを求めてくとも叫び声をあげたくてもそれが出来なかつたら、私はどうなっちゃうんだろう。

（私、殺されちゃうよ……）

先程の体育の時間に言われた、“殺されてえのかよ”という言葉が、再び脳内に蘇る。私は両手で両耳を強く塞ぎ、心の中で必死に叫び声をあげながら泣きじやくつた。

(嫌！ そんなの、絶対に……絶対に嫌！)

第17話 空白

「美衣子、どうなったかな？」

瑠夏が一やつきながらあたしの腕をつついた。あたしはその問い合わせして、肩を竦めて首を傾げて見せた。

「さあ、どうなったかなあ？　いつそのことのまま自殺しちゃえ
ばって感じなんだけどー」

「あはは、それ思った！　死ねば良いのにね。保健室で首吊りとか、
ウケるーー！」

あたしたちはその様子を想像し、大きな笑い声を上げた。

「アイツならやりかねないって！　頭も精神も、めっちゃ弱いから
あ

「だよね。っていうかさあ、死ぬんだつたら自分の部屋とかにして
ほしいかも」

「うんうん、そうだよね！　流石に学校で死なれちゃ大迷惑だもん
ねー」

「死ぬなら一人で死ねって感じ？」

「言えるーー！」

腹がよじれそうになるほど笑い声をあげながら、あたしは窓の外
に田をやつた。

「あ、美衣子だ」

あたしの声に気づいた瑠夏が、ええ？ とわざとらしく大声を上げた。

「ううそー！ どこ？」

「あそこ」

あたしが指差した先には、先生に肩を抱かれるようにして、フランフラと歩く美衣子の姿があった。先生が助手席の扉を開けると、美衣子は車に乗り込んだ。ちらりと見たその瞳には、全くと言つて良いほど生氣が感じられなかつた。車はエンジン音を響かせて学校から走り去つていいく。それを見送つたあと、奈々がぽつりと呟いた。

「相當田が…… イッちゃつてましたね……」

それに反応したように瑠夏が、ふつと噴き出して

「ショックの余り精神病にでもかかっちゃつたんじゃないのー？」

と冗談っぽく言つて、笑つた。

* * *

美衣子はその日から学校を休んだ。もう1週間くらい経つだろうか。だけど、誰も心配なんてしていない。何度も言つようだけれど、あたしたちのクラスはクラスメイトに関心がないから。誰が休んでも、誰がいなくとも、誰も気にしない。誰も気づかない。このクラスはそんな悲しいクラスだ。こんなクラスにいる自分以外の人間なんて別にいらないし、どうでも良い。誰も、自分以外の人間なん

かに特に興味を持つたりしないんだ。あたしは椅子に腰掛けたまま、両手を突き上げて大声を上げた。

「あーあー！　“オモチャ”がいないと暇あ！」

瑠夏、京子、奈々も、頬を膨らませて頷いた。

「落書きするスペースももう無いし……」

「外靴、上履き、体操服、ジャージは全部切り刻んでゴミ箱に入れ
たし……」

「教科書類は……みんな、燃やしちゃいましたし……」

あたしたちは顔を見合させて、どんよりと溜息を吐いた。とにかく、本当に暇で暇で仕方が無い。
早く来ないかなあ……ストレス発散のための道具。おもちゃ

第1-8話 電話

あたしは机を両手で力一杯叩くと、眉を吊り上げて立ち上がった。

「あーもうマジで腹立つ！ 早く来いっつーのー。」 うなつたら嫌でも学校に来させてやる！」

「え？ でも、どうやって？」

その言葉を聞いて、あたしは片方の手でもう一度机を叩き、瑠夏を睨みつけた。

「電話を使つのよ、電話

ぐるりと後ろを振り返つて、時計を確認する。次の授業の始まりまで、あと5分も無い。

「次つて数学だよね。サボる

「別にいいけど……なんで？」

「説明は後にするわ。……京子も、奈々も、いいよね？」

あたしが睨みつけると、京子と奈々は渋々頷いた。この2人は眞面目だからきっと、“高校入試に響くかも”とか余計な心配をしているんだろう。

「じゃ、行こつか

あたしたちは予鈴が鳴る直前に、教室を飛び出した。

* * *

学校を離れ、駅にやつて來た。公衆電話の並ぶ道を無言で歩いて
いると、瑠夏が口を尖らせてあたしに詰め寄ってきた。

「ねえ、るうつてば、いい加減教えてよ！ 何する気なの？」

あたしは胸ポケットからテレホンカードを取り出して微笑んだ。

「まあ、見てなさいよ」

田の前にあつた公衆電話にテレホンカードを差し込み、美衣子の
携帯電話の番号を押す。

「イタズラ電話掛けちゃうわけよ

「ああ……」

「なるほどっ！」

3人も、楽しそうな顔をして他の公衆電話から電話をかける準備
を始めた。

暫く呼び出し音を聞いていると電話が繋がったが、美衣子は出で
こなかつた。機械的な女の人の声で、『留守番電話サービスです』
という言葉が聞こえる。

「ちつ

舌打ちをして、仕方なく発信音を待つ。発信音の後、大きく息を
吸い込んで、電話口に向かつて大声で叫んだ。

「美衣子！ 早く学校来なさいよ。来ないと許さないから。あんたの大好きな雪山先輩にも、危害加えちゃうよお？」

その後も色々な暴言を吹き込み、あたしは乱暴に受話器を置いた。

第19話 危機

「あ」

思いつゝ限り暴言を吐き続けていたら、田の前に表示されていたテレホンカードの使用度数が0になつた。ピー、ピー、とこう無機質な音と共に、カードが出てくる。

「切れちゃつた」

あたしが残念そうに言つと、他の3人も、溜息を吐きながらテレホンカードを抜き出した。

「あたしのも切れちゃつた」

「あたしもー」

「奈々のも……切れちゃいました」

駅の時計に目を向けると、なんと嫌がらせを始めてから2時間が経過していた。どうして楽しい事をしていると、時間が過ぎるのがこんなに早いのだろう?

「しょうがないなー。そろそろ帰るつか

「うん、そうしようかあ」

あたしは、その使用済みテレカを両手でくしゃくしゃに丸めて、近くにあつたゴミ箱に投げ入れた。そして、

「美衣子がこの世から消えますよーにー」

と、まるでお賽銭箱にお賽銭を入れたときのように、自分自身の願いを大声でゴミ箱に告げた。他の3人はそれを聞いて笑いながら、駅の出入り口に向かつて歩き出す。「ゴミ箱を一警してから、あたしもその後を追つた。

突然、目の前を歩いていた瑠夏の足が止まつた。それに気付かなかつたあたしは瑠夏の背中に顔をぶつけてしまう。

「きやつ！ ちょっと瑠夏、突然止まらないで……よ……」

笑いながら瑠夏に抗議しようとしたあたしの視線が、瑠夏たちと同じところを捉えた。見覚えのある人物が、怒り狂つた表情を浮かべてこちらに歩いて来る。

「ね、ねえ、るう。あれって……」

そう呟く京子の声は震えていた。あたしは大きく目を見開いて、深く息を吸い込んだ。そのまま1歩前に歩み出て、すぐ目の前までやってきたその人物を、力強く睨み付ける。

「何か御用ですか？ ……雪山、先輩」

そう、そこに現れたのは雪山先輩だった。あたしの大好きだった人。このいじめのきっかけを作った人。

今現れた人がもし警察官とか学校の先生とかだったら、あたしたちは血相を変えて大慌てで逃げ出していただろう。でも今のあたしは他の3人と違つて、不自然なほどに落ち着き払つていた。……何も言わず、あたしを睨み返してくる雪山先輩。あたしは髪の毛を片手で弄りながら、につこりと笑みを浮かべた。

「用が無いなら、失礼しますね」

そう言つて先輩の横を通り過ぎようとした瞬間、強く腕を掴まれて後ろへ引っ張られた。握られた腕に爪が食い込み、思わず痛みに顔を歪めて悲鳴を上げる。

「いたつ！」

慌てて手を引っ込め、先輩の顔を睨んだその時、雪山先輩が怒鳴り声をあげた。

「美衣子に嫌がらせするんじゃねえよー」

「……はあ？ 何言つてんですかー？ 意味わからんないですけど！」

しりばっくれようとわざとらしい溜息を吐いたら、更に先輩は激怒して、あたしの胸倉を掴んだ。

「美衣子に電話したらあいつのお袋さんが出て……つあいつの声が出なくなつたつて聞いたんだ！ 原因不明だつて言われたつて、お袋さんめっちゃ心配してんだよ……。お前達があいつに変なことするから、美衣子は苦しんでるんだろー！」

「……へえ！ 美衣子、声出なくなつたんですか？ うつわー、悲惨ですねえ」

まあ、しょうがないんじゃないですか？ 天罰つてやつですよ。そう言つて笑い声をあげたら、雪山先輩の右手が強く握り締められ、あたしに向かつて振り上げられた。

「る、るうー！ 危なつ……」

瑠夏がそう叫んで両手で田を覆う。あたしは冷静にその拳を見つめて、その手が振り下ろされようとした瞬間に、ふっと笑みを浮かべた。あたしの笑みを見て驚いた先輩の拳が、一瞬止まる。勿論あたしはその隙を見逃さなかつた。自分の手を素早く胸元に持つていき、制服の襟を引きちぎつた。ボタンが床に飛び散り、下着が露になる。先輩も瑠夏も京子も奈々も、それを見て啞然とする。あたしは一度先輩に向かつて勝ち誇つたような笑みを浮かべてから……大声で叫んだ。

「いやあああ！ 誰か、誰か助けてーっ！」

あまりの大声に、先輩が慌てて一步後ろに下がつた。あたしは泣き真似をしながらその場に座り込む。おろおろする先輩を、駆けつけて来た駅員や成人男性が取り囲み、取り押さえた。

「ここの痴漢！ おとなしくしろ！」

「な……つ、ち、痴漢？ 違えよ！ 僕は……っ」

あたし達はその騒ぎに紛れ、慌てて駅の出入口に向かつて走り出した。“痴漢の犯人”の顔を見ようとする野次馬が多くて、誰もあたし達が逃げていく事に気が付いていないようだ。

「あ！ おい、こり！ 離せよっ！」

逃げていくあたし達に気がついたのか、先輩はこちりに向かつて片手を伸ばし、立ち上がって走り出そうとした。しかし、すぐにまた取り押さえられ、床に組み伏せられる。

「……畜生っ」

先輩は悔しそうな声を上げ、床を思い切り拳で殴りつけて歯軋りした。その様子に大満足したあたしたちは、笑い声をあげながら、そのまま逃走した。

第20話 罪悪感

それから、先輩は暫くの間学校に来ることができなくなつた。後輩に猥褻な行為をした（ということになつた）ため、学校側から1ヶ月の謹慎処分を受けたのだそつだ。聞いた話によると先輩は校長に、あたしたちが美衣子に嫌がらせをしていた、と必死に伝えようとしたらしい。しかし先生に話を聞かれた美衣子は何も言わず、蒼ざめて首を横に振るばかり。駅の電話にも全く証拠は残つていなかつた（念のために指紋を拭き取つておいたからね）。

そしてまた、あたしたちの学校生活はまた平和なものになつた。美衣子もいなければ、雪山先輩もいない。でも、あたしは実を言つてまだ満足していなかつた。もっともつと、あいつらを苦しませなければ……。

「あーあ、また退屈になつちゃつたね」

「え？ 平和になつたから、良かつたじやん

「何言つてるのよ、瑠夏つてば。平和なんてつまんないだけじゃない

い

あたしはイライラしながら、力一杯美衣子の机を蹴り飛ばした。

「こいつが学校に来なきや、嫌がらせもできないしさー！」

天井を睨みながら舌打ちをして、髪の毛を摑んで溜息を吐く。

「ひつなつたら、もう一回イタ電かけてやうつよ。来なきや殺すつて言つてやろ」

椅子から立ち上がり、財布を握り締めて、瑠夏たちの手を引く。

「せひ、行こ」

「……え？ も、まだやるの？」

瑠夏が少し不安げな表情をしてあたしを見上げる。あたしは眉を吊り上げて、物凄い剣幕で怒鳴った。

「当たり前じゃん！ もつともつと苦しませてやんなへりや、あたしの氣は治まらないわ！」

……京子がゆっくりと立ち上がったのは、その時だった。京子は拳を硬く握り締めて俯いている。体が小刻みに震えているのが分かった。

「……ど、どしたの、京子？」

瑠夏が話しかけても反応せず、京子は何かを我慢しているように唇を噛み締めている。

「何よ、京子。あたしの命令が聞けないの？」

乱暴な口調でそう尋ねると、京子は震えながらあたしのほうに顔を向けた。その目には涙が溢れていた。顔が、何故か真っ赤に染まっている。

「わよ、京子？」

瑠夏が心配そうに京子の手を握った。しかし、京子はその手を振り払い、小さく呟いた。

「ぬ、……。もつやめよつよ」

「……はあ？ 何言つてゐのよ、今更」

京子は震えながら、あたしの方に一歩踏み出しあつた。その決意の固まつた瞳に気圧され、あたしは一歩後ろに後ずさる。

「もう十分じやない？ これ以上何かしたら、ほんとこ、……美衣子、死んじやうかも……っ」

「……」

「声が出なくなつたんでしょ、美衣子……。もう、やばいよ……絶対……こんなの……バレたらあたしたち、ビリになるか……」

友達思いの京子のことだからきっと、今までずっと美衣子をいじめていた事に深い罪悪感を感じていたのだろう。でも、あたしはその涙ながらの説得に、全く耳を貸さなかつた。

「ふーん、今更怖気づいたんだ？ ……この臆病者ー！」

あたしは京子の肩を強く押して怒鳴つた。京子は悲鳴を上げて、床に尻餅をつく。床に座り込んだまま俯いている京子に向かつて、あたしは冷たく吐き捨てた。

「メンバーから抜けるんだつたら勝手に抜ければいいわ。でも、美衣子の次に苦しむことになるのは、あんただからね」

スクールバッグを片手に、あたしはスタスタと教室の入り口に向かつて歩き出した。瑠夏が京子の手を引いて立たせながら、慌ててあたしの方に顔を向ける。

「ど、ど行くの？ る、……」

「気分悪いから早退する」

ぶつめいひまうこそづ返して、乱暴に教室の引き戸を閉め、廊下を歩き出す。苛立ちで顔が真っ赤になつていくのがわかつた。
美衣子がこの世から消えちゃえば問題ないのに。そうすればみんな、あたしの仲間でいてくれるのに。今すぐ、美衣子の存在を消失したい。それも、とびきつ苦しませながら……。

「……よし」

あいつら元裏切られるのも面白くないから、次の作戦はあたし1人で実行しよう。ずっとあたしの中で温めてた、この最高の作戦を……。

第21話 違反サイト

家に帰るなり自分の部屋へ直行した。スクールバッグをその辺に放り投げ、パソコンを起動する。聞き慣れた機械音が静かな部屋に響き渡つた。

「要は美衣子を殺してしまえばいいわけよね。たっぷり怖がらせて、たっぷり苦しませて」

あたしは一人笑い声をあげながらインターネットに接続し、慣れた手つきでキー ボードを叩いた。開いたのは、あたしのお気に入りのサイト、『裏掲示板』……略して裏板。ここはインターネットの裏の世界が作り出したサイトだ。

【誰か、　　つていう人の住所教えてください…】

【大麻売却致します。少しでも興味がある方はご連絡下さい…】

【自殺志願者募集中！　詳しくは此方へ <http://>】

こんな風に、明らかに違反だとわかるような情報が飛び交っているのがこの掲示板。たまたまネットサーフィンしていたら、見つけてしまったのだ。あたしは暫くそのサイトを回つて、頭の中にあつた作戦を更にしっかりと練り直した。……これならきっと……いや、絶対に上手く行く。誰にもバレないよう美衣子を死に追いやる事だって可能だ。……とは言つても流石に此処からその作戦を実行するのは、危ないかもしれないから、違う場所から実行しよう。そう、例えば、あそことかね。

あたしはパソコンの電源を切ると、勢い良くベッドに倒れ込んだ。怪しく微笑み、天井に向かつてそつと呟く。

「楽しみにしてなよ、美衣子」

明日から、あんたには今まで以上の恐怖の日々が待ってるわ。

第22話 策略

翌日、あたしはいつもどおり家を出た。

「行つてきまーす

「行つてらっしゃい。気をつけなへ

お母さんに大きく両手を振りながら、いつも通学している道を駆ける。その途中であたしは川原に寄り道をして、ポケットから携帯電話を取り出した。

電話をかけた先は、あたしの通つている中学校。暫く待つていてると、程なくして受話器が上がった。

『はい、中学校です』

「あー、えつと、葉山ですけど」

一度電話に出たのが担任の先生だったので、すぐに自分の名前を名乗つた。

『ああ、葉山か。どうした?』

「今日、体調が悪いので休みます」

『そうか、昨日早退したもんな。わかつたよ

「よろしくお願ひします。……あ、あの、先生」

『ん?』

あたしは携帯電話を両手で握り締めると、心の奥底から心配しているような声を出した。

「美衣子、今日は来ますか？」

『春風か。……いや、今日も来てないよ』

「……そう、ですか」

『葉山は親友だから、辛いよな』

「はい……。心配です。どうかしつけたのかな、美衣子……」

本当はあたしが原因なんだけどね。と 心の中でほくそ笑んでみる。先生はあたしの態度に感激しているのか、少し声を震わせながら言つた。

『「ひたなに心配してくれる友達がいるんだから、春風もきつとすべ学校に来るさ。今日は心配せずに、ゆっくり休め』

「……はい、ありがとうございます。それじゃあ、失礼します」

携帯電話の電源ボタンを長押しして電源をOFFにするといふと、あたしは大声で笑つた。

(そつか、今日も美衣子は家にいるんだ。それなら、この作戦はきっと成功するわ)

あたしはその足で駅に向かい、電車に乗り込んだ。向かう先は、先程欠席すると連絡しておいた中学校。

家のパソコンから実行するのが難しい作戦なら、学校から実行すれば良い。不特定多数の人が使うパソコンなら、仮にバレてもあたしまで辿り着くのには結構時間が掛かるだろ？

学校に着いた。今の時間は1限目らしい。校舎内はしんと静まり返っている。時折、どこかのクラスから笑い声が聞こえてくる。それにつられる様にして、あたしも小さく笑みを浮かべた。

真っ直ぐパソコン室へ向かい、昨日帰りに職員室から借りパクしておいた鍵を使って、室内に侵入する。この時間はどのクラスもパソコンは使わないということも、あらかじめちゃんと調べてきてあった。つまり、この1時間は思う存分作戦を実行することができるってわけ。

室内に入り、内側から鍵を閉める。電気は点けないようにして、入り口から一番離れたPCを起動した。指紋を調べられないようにゴム手袋もしてきたし、この学校はセキュリティが甘いからアクセス制限もかかっていないし、準備は万全だ。裏板のアドレスを打ち込んで、アクセスする。裏板では今日も色々な違反がされまくっていた。マウスを操り、暫くスクロールして、昨日目をつけた記事をクリックする。

『東京都に住む、フリーターで未婚の44歳の男です。よく出没するところは秋葉原です。週に5日は居ます。誰かメールしませんか？ 良ければ若い女の子が理想です。（僕は軽くオタクなので、それでも良い方のみメールお願いします）』

早速その男のメールアドレスに、登録しておいたフリーメールアドレスでメールを送る。……文面はこうだ。

『初めてまして！ 14歳、中2の女の子です！ 同じく東京都に住んでます。美衣子つていいます。気軽にみいこつて呼んで下さい

良かつたらお返事ください』

それを送つて数分。なんと、もう返信がきた。

(うわ、何こいつ。ほんとに仕事ないわけ?)

顔を顰めながら、男からの返信メールを開く。

『初めまして。14歳かあ、若いねえ。こんなおじさんだけど、メル友になつてくれるの? あ、もし良かつたら美衣子ちゃんの顔をみてみたいな。ちょっと自信ないけど、僕も自分の顔写真添付しておくれ』

「……うわっ

添付ファイルを開いたあたしは、画面の前で吐きそうになつた。添付されてきたそいつの写真はかなり気持ち悪かったのだ。脂でテカつた額、出っ歯、ハゲ、牛乳瓶の底のようなレンズの眼鏡、鼻の穴が広く、ニキビが多い。そしてかなり太っている。

「こういう奴も生きてるだけで害よー。ま、お似合いつちやあ、お似合いか

あたしは一人そつ啖きながら、男に返信メールを作成した。

『かつこ良いじやないですか! 超タイプなんですけどー 私の顔ですか? ほんと自信ないんです……。おじさまみたいな素敵の方にこんな顔見せるの嫌なんんですけど、勇気出しちゃいますね』

携帯に、以前美衣子と撮ったプリクラの画像を保存しておいたの

で、それを引き出して、添付して送った。このプリクラは美衣子がすじく可愛く写っていたものだ。忌々しいこのプリクラがこんなかたちで役立つなんて、あの時は思いもしなかった。

あたしは喉の奥から笑い声をあげながら、男とメールのやり取りをした。

『み、美衣子ちゃんすじく可愛いね！ 僕が今まで見た女の子の中でいちばんだよ！』

『ええっ！ そんなあ、本当ですか？ そんなこと言つてくれるの、おじさまだけですよ！ 今日、学校お休みだから暇なんですけどー……良かつたら遊びませんか？』

『い、いいの？ 僕もぜひお願いしたいな！ どこかで待ち合せしようか。どこがいいかな？』

『私に決めさせてくれるんですか？ おじさまってば優しい～っ！ ええっとお、×公園なんてどうですか？ 私の家のすぐ近くなんですね』

『ほ、ほんとかい？ うん、僕も電車ですぐ行けるよ。これからすぐ向かうね』

『はい！ お願ひしますー！ あ、そうだ。今度からメールこっちに送つてもらえますか？ しつちのアドレスは携帯のアドレスなので、返事早いですよー！ haru-mi-ko@boom.como.ne.jp』

最後に記入したのは、本当の美衣子のメルアドだ。いきなりメールが来たら、びっくりするだらうな。

(さて、次は……)

あたしはポケットから携帯電話を取り出して電源をつけると、美衣子の自宅へ電話をかけた。

第24話 怪しい男

電話を切った直後、私はコートを羽織つて玄関を飛び出した。真っ直ぐ、近くの公園に向かつて走り出す。興奮で呼吸が荒くなつていくのが自分でも分かつた。久しぶりの外の空気に、体が身震いする。嬉しさで顔が紅潮した。

(るぅちゃん……)

るぅちゃんに会える……。

また、友達に戻れるかもしれない。そう考えたら、嬉しくてたまらなかつた。るぅちゃん、るぅちゃん、るぅちゃん。やっぱり私にはるぅちゃんが必要だよ。

* * *

私は数分前まで部屋の中で震えながら毛布を被つていた。携帯電話はバッテリーを抜いて部屋の隅のゴミ箱の中に入れているからもう電話が鳴ることは無い。そうわかつても、今にも携帯電話の着信音が聞こえてきそうで怖かつた。

数日前、私の携帯電話の着信履歴は『公衆電話』という4文字で埋め尽くされた。留守番電話サービスに入っていた声はるぅちゃんや瑠夏ちゃんたちのもので、その声はどれも私を酷く罵倒するものばかりだった。これはただの嫌がらせだから大丈夫、心配することなんか無いんだ、いくらそう考へても涙は溢れてきた。

とうとう耐えられなくなつて、私は携帯電話のバッテリーを抜いた。耳を強く押さえて両目をかたく瞑り、頭の奥で未だ鳴り響いている着信音やるぅちゃんたちの罵声を忘れ去ろうと躍起になつた。声が出なくなるんじやなくて耳が聞こえなくなるなら良かつたの

に、そう思った。

また電話が鳴る音が聴こえて、私は更に毛布を深くかぶつて両手を瞑った。ちょうど昼間で、誰も居ない時間だから、恐怖心は更に大きくなつた。

暫くその状態で電話が鳴り止むのを待とつとしたけれど、音は一向に鳴り止まない。どうやらそれは携帯電話からじやなくて、自宅の電話が鳴っているみたいだつた。

私は慌てて毛布を脱ぎ捨てて、受話器を取りに向かつた。声がないという事実は忘れていなかつたけれど、もし学校の先生からの連絡だつたりしたら出ないわけにはいかないと思つたからだ。

受話器を取つて耳に押し当てる。もし事情を知らない近所の人やセールスの電話だつたら直ぐに受話器を置きつと決めて、小さく深呼吸をする。

『もしもし……』

受話器の向こうから聞いた声に、私は両目を見開いた。それは……紛れも無く、るうすけやんの声だつた。

『美衣子?』

恐怖で体が震えた。携帯だけではなく、自宅にまで嫌がらせの電話を掛けてきたんだと思った。慌てて受話器を下ろそうとした瞬間、それを察したのか、電話の向こうからるうすけやんが必死にこう叫んだ。

『美衣子! お願い、話を聞いてー!』

まるで懇願するようなその声に、私は思わず受話器を握り締めたまま固まってしまった。恐る恐る受話器を耳元まで持つていき、次

のぬっちゃんの言葉を待つ。

『…………美衣子…………。聞いて欲しいことがあるの。あ、声出ないんだよね？返事はしなくてもいいから、ここのまま聞いて。…………あのね、』

加速していく鼓動を感じながら、唇を引き結んで受話器を耳に当てる。…………ぬっちゃんは、驚くべき言葉を発した。

『あたし、美衣子にたくさん酷いことしちゃったよね。謝って済むような問題じゃないってわかつてる。…………でも、どうしても謝りたかったの。…………本当にごめんなさい』

暫しの間を置いて、ぬっちゃんは続けた。心なしか、少しだけ声が震えているように聞こえる。

『また美衣子と仲良くしたいんだ……。すいへわがままなこと言つてるよね、あたし。嫌だったら来なくてもいいけど、もし少しでもまたあたしと仲良くしてくれる気があるなら、×公園に来て。あたし、ずっと待ってるから…………。それじゃあ、ね』

電話が、切れた。受話器を静かにおろし、私は顔をあげた。嬉しく涙で顔がぐしゃぐしゃになつていて。

(るっちゃん つ “ も少しでもまたあたしと仲良くしてくれる氣があるなら ” なんて……そんなの……そんなこと……)

私の答えは決まっていた。

……次の瞬間私は、コートをつかんで玄関へ向かっていた。

* * *

あと数mで公園に着く。きっと優しい微笑みを浮かべて、るうち
やんが立っているだろ？。そうしたら、そうしたら……まず最初に、
なんて言おう？ 声が出せないから、その両手を握つて微笑めば、
るうちやんは私の気持ちを全て解つてくれるかな？
るうちやんの姿を探しながら、公園の入り口で立ち止まる。……
るうちやんは、いない。

(……中にいるのかな？)

公園内に入り、更に辺りを見回してみる。ブランコ、すべり台、
ジヤングルジム、鉄棒、砂場……。やっぱり、ビニールも見当たらな
い。

ついわざとまで嬉しさで熱くなっていた頬の熱が、少しづつ冷め
ていく。私は足を止めて、眉を下げ、その場に立ち尽くした。

……もしかして、騙された？

そんな絶望的な自分の考えを、首を左右に振つて慌てて否定する。
ううん、そんなはずは無い。だつて今日、私どもは仲直
りするんだもん。また一緒に 笑いあうんだもん。

ポンと置かれた小さなベンチを見てみても、そこに座つていた
のは中年の男性だけだった。その男性は、手に持つたフィギュアの
よつなものになにやら話しかけている。

「ミシルちゃん、ミーこちゃん遅いねえ……」

その男性の言葉に、私は思わず振り返る。ミシルとこのはあの
フィギュアの名前のことだろ？。でも、その後の言葉……、美衣子

つて、一体誰のこと？

(……、私のことなわけ、ないよね)

次の瞬間顔を上げた中年男性と目が合い、私は思わず勢い良く目を逸らしてしまった。その男性は……こういう事言っちゃダメだとわかっているんだけど……所謂オタクみたいな感じの顔や格好をしていて、正直あんまりお近づきになりたくないタイプの人だつた。

(あんな人つて、現実に居るんだあ……)

そんな失礼なことを思いながら、そつと視線を元に戻し、私は心中で小さく悲鳴を上げた。その男性が、こちらに向かつてニタニタと笑い、あわてことか小走りで近寄ってきたのだ。

「…………！」

私は慌てて公園の出入口に向かつて走り出した。

「待つてよ、美衣子ちゃん！」

(……！ 気のせいじゃない！ あの人、今私の名前を呼んだ……！)

何度も何度も転びそうになりながら、必死に自宅の方向へ走った。怖い、怖い、怖い。るうちやんたちにいじめられていた時の恐怖とはまた違つた恐ろしさで、全身の神経が麻痺していく。

せつかく愛しい友達と再会できそうだったのに、こんなことに邪魔されてしまった悔しさが涙となつて、頬を伝つていった。

必死に走りながら振り返つてみる。……まだ追つてくる。手を伸

ばして、追つてくる。

とても長い間走り続けた気がした。ようやく自宅に辿り着いて、震える手で玄関の鍵を開ける。太っているせいでの追いつけなかつたのか、途中で諦めたのか、男の姿はもう見えなくなっていた。

第25話 恐怖

転がるように玄関内に入つてしつかりと鍵を掛け、玄関の扉にもたれ掛かり、呼吸を整えた。

(「、怖かつたあ……助かつて良かつた……）

大きく息を吐き出したその時だつた。……背中に、大きな衝撃がはしつた。

ドンッドンドンドンドン！

私は体を強張らせ、慌てて扉から離れた。すごい勢いで何度も何度も扉が叩かれ、ドアノブが回される。扉が壊れてしまいそうなその凄まじい力に、私は更なる恐怖心を搔き立てられた。鍵を再び確認し直してから、チエーンをしつかりかける。額ににじむ脂汗を手の甲でぬぐいながら、小さな覗き穴に右目を押し当てて外を見た。

「…」

私は瞬時にその場から飛び退いた。……自分の荒い息遣いと扉を叩く強い音だけが耳に届く。もし今声が出せたなら、私はこのとき聞いた事も無いような大声で悲鳴をあげただろう。言つまでも無く、今扉を叩いている人物は先程の中年男性だつた。

(ビリして……？ ビリしてこんな目に遭わなくちゃいけないの？)

泣きながら、私は玄関から離れた。とにかく、警察を呼んでもらおう。今は声が出せないから、誰かにメールで助けを求めて

……。

玄関のドアノブから携帯電話とバッテリーを取り出し、電源を入れる。玄関の扉を叩く音は未だに聞こえている。恐怖で頭がおかしくなりそうだった。

両親にメールをしようと思つたその時、電話が振動した。驚きで、小さく肩が跳ねる。

【新着メール受信 1件】

(誰だらう……？…………うん。もう、誰でもいいから……助けて！)

それは見た事の無いメールアドだつたが、私は無我夢中でそれをクリックした。その瞬間田の前に表示された文章に、私は口元を押さえた。

『どうして逃げたりしたの？ 僕は君に何もしないよ。早く出てきてよ。君の顔が見たいんだ。君の声を聞きたいんだ。……』

私はそこまで読んで、そのメールを削除した。体の震えが止まらない。歯が力チカチと音を立てる。このメールは、もしかしなくてもあの男が送ってきたものだろう。

(でも、どうして私のアドレスを知ってるの……？ 嫌だ、怖い……怖い……)

また、同じアドレスからメールが来た。削除したい気持ちでいっぱいだったけれど、仕方なく、そのメールも開いてみる。

《早く返事しろ早く返事しろ早く返事しろ早く返事しろ早く返事し

携帯電話を力一杯床に叩きつけた私は、泣きながら首を横に振つた。心中が、“恐怖”という感情のみで埋め尽くされていく。

(誰か)

床の上に、涙が零れ落ちた。

(誰か……、助けて)

更にメールを受信し、鳴り続けている携帯電話を見て、私は首を横に振った。

(逃げたら一生このままだ。逃げたら、ずっと苦しいままだ。るうちゃんたちにいじめられた時だってそう。そして今、この瞬間だってそう。こつまでも逃げてちゃ、ダメなんだ)

意を決して、携帯電話に手を伸ばす。震える両手で電話を固く握り締めて、私は男のアドレス宛てにメールを作成した。

『ごめんなさい、私はあなたのことで、全く知りません。誘つたというのも、遊ぼうというのも、何かの間違いです。もうやめてください。いい加減にしないと、本当に警察を呼びます。私には彼氏がいるんです。だから、こういふことされると迷惑なんですね』

……送信ボタンを、押した。

ずっと携帯電話を握り締めて覚悟していたけれど、着信音は鳴らなかつた。私は大きく安堵の息を吐いて携帯電話をベッドの上に置き、両手で自分自身を抱きすくめた。ずっと鳴り響いていた扉を叩く音も、いつの間にか鳴り止んでいた。

（ やつたよ。るうちゅん、雪ちゃん。すごく怖かったけど、私、自分で危機を乗り切つたよ。これでちよつとは強くなれたのかな？ 明日からはちゃんと学校に行くよ。もう絶対に何からも逃げないよ。るうちゅんみたいな友達と、雪ちゃんみたいな彼氏がいれば何だって怖くないから…… ）

第26話 炎

私は、激しい息苦しさを感じて薄日を開けた。どうやら、いつの間にか眠つてしまつていたらしい。目を擦りながら、はつと顔をあげる。

何か、物音が聞こえたのだ。

(なんだろう……)

振り返った私は、はつと息をのんだ。部屋の入り口付近にある本棚が、音を立てて燃えていたのだ。

(一体、どうなつてゐの?)

パニックに陥り、慌ててベッドから立ちあがる。良く見ると、燃えているのは本棚だけではなかつた。大事にしていたぬいぐるみも、お気に入りのカーテンも、みんな燃えている。

(……何……これ? ……火事?)

やつと思考がはつきりしてきて、よつやく私は「ここから逃げなければ」、と思った。足に火傷を負いながら、窓に駆け寄つて、網戸を開け放つ。悲鳴をあげて助けを呼ぼうとした瞬間、気付いた。

(そうだ 声が出ないんだつた)

自力で脱出するしかない。窓のそばに置いてあつた花瓶に入つて、いた水を頭からかぶり、私は必死に扉をあけて、炎の道になつて、階段を駆け下りた。

リビングは既に火の海だつた。すぐに玄関に向かおうとした私の目に飛び込んできたのは、私の思い出が沢山詰まつたアルバムだつた。るうちゃんたちと撮つた思い出の写真、雪ちゃんと撮つた幸せいっぱいのプリクラ……。そんな素敵な思い出がたくさん詰まつたアルバムを、こんなことで失うわけにはいかない。手がもう熱くて熱くて仕方が無かつたけれど、私は歯を食いしばりながらアルバムを手に取つた。

表紙が燃えて、火がついている。それを自分の服のすそで押さえて消しながら、玄関に向かつて全力疾走した。

煙と火傷で、頭がくらくらする。目が痛い、喉が痛い、腕が、足が、ぜんぶ痛い……。

鍵をあけて、扉を強く押す。チエーンががしゃりと音を立てて、私の邪魔をした。泣きそうになりながら、熱で少し溶けている熱いチエーンをつかんで外し、今度こそ外に出ることに成功した。

裸足で外に飛び出したけれど、足の裏の火傷の痛みで立つていられなくなり、私はその場に倒れこんだ。咳き込みながら、燃えて行く自分の家を見上げる。

今まで、生まれてからずっと私を支えて、見守つてくれた大好きな家が、炭に変わつていく。

煙に巻かれて、私の意識はゆるゆると途切れていつた。次目が覚めたら、私はどうなつているんだろう。それを考える余裕も無く、完全に、何もかもわからなくなつた……。

第27話 病室

目が覚めたら、私はベッドの上に横たわっていた。白い天井に、きつい薬品のにおい。……保健室の時と、良く似ている状況だった。

ただ、大きく違うのは、足も手も包帯だらけなところだ。少し動かしただけで、物凄く痛い。

痛みに顔を歪めながら寝返りを打つたとき、誰かが室内に入ってきた。薄いピンク色の看護服を着たその人を見たとき、私はここが病院なのだと「う」と理解した。

「春風さん、まだ体は痛みますか？」

優しくそつ尋ねてくる看護婦さん。私はゆっくりと首を縦に振った。

「それじゃあ、痛み止めと点滴、増やしたほうがいいかもしないわね」

看護婦さんが、手に持ったカルテに何かを書き込んでいく。私は虚ろな瞳で自分の腕に突き刺さった点滴の針を見つめた。

「怖かったわね。お家は残念だったけど、あなたが無事で良かったわ。命より大切なものは、ありませんからね。今、お母さんに連絡入れたところ。そろそろ来て下さると思つわ。だからもう少ししゃっくり休んで……」

その時、看護婦さんの言葉を遮るような大声が病室内に響いた。

「美衣子ー！」

「一。」

慌てて視線を動かすと、そこには顔面蒼白で息を切らしている雪ちゃんがいた。雪ちゃんは、泣きながら私のそばに駆け寄つて、包帯の巻かれた私の片手にそつと自分の手を乗せた。

「良かつた……つ美衣子が、無事で……！　俺、心配で、……心配で……つ」

(雪ちゃん……)

嬉しさで胸がいっぱいになり、私はいつの間にか涙を流していた。心の中があたたかい気持ちでいっぱいになる。私は片手をそつと雪ちゃんの頬に当てる、喉を震わせた。

「雪ちゃん、あり……が、とい……」

その瞬間、雪ちゃんが目を大きく見開いて私を見た。雪ちゃんの瞳に移る私の目も、大きくなつていた。今の声は……、耳に届いた、酷く懐かしく感じた今の声は……紛れも無く、私自身のものだ。私は笑みを浮かべて雪ちゃんに抱きつき、嬉しさに悲鳴をあげながら叫んだ。

「雪ちゃん！　雪ちゃん、ありがとうー…　声が、声が出たよー。」

「美衣子……つ良かつたなー！」

「うん、…………うんつ…………」

抱き合つて大声で泣く私たちに気を遣つてか、看護婦さんはっこりと微笑んで、病室から出て行つた。

暫くして、落ち着いてから、雪ちゃんが急に真面目な顔つきになり、少し辛そうに私の両手を包み込んだ。

「そりいえば、美衣子。お前の家、……の」となんだけど

「……うん。どうしたの？」

「警察が調べたら、灯油の臭いがしたらしいんだけど」

「……えつ？」

灯油？……私の家は、ストーブを使つたことは一度も無い。それなのに、灯油の臭いがした。……それは、つまり。

「……あれ、放火だつたって、こと、なの？」

怒りと悲しみで、声が震えた。自分自身で自分の体を抱きすくめて、恐怖に身を縮ませる。

「じゅやひ、じゅじい」

雪ちゃんは静かにそり言つて頷いた。

「そんなの、……許せない、よー だつて、私、……大好きだつたのにー 思い出がいっぱい詰まつた、大好きな、家だつたのに……」

泣き崩れる私の肩を抱き、雪ちゃんは真剣なまなざしで私を見つめて、言った。

「美衣子。絶対、犯人捕まえてやるから。俺が、美衣子の笑顔を取り戻すから

「え、でも、雪ちゃん……」

「だから泣くな。……な？」

雪ちゃんは私の頭を撫でて優しく微笑み、小走りで病室から出て

行つた。私は激しい痛みを堪えながら体を起こし、必死に手を伸ばして、声を搾り出した。

「雪ちゃん、待つて……」

待つて。今はただ、雪ちゃんに傍にいてほしいのに……。お願い、行かないで。なんだかわからないけど、すごく嫌な予感がする。

許せない。許さない。美衣子にあんな思いをさせた奴を、俺は絶対に許さない。

大体、見当はついている。あんなことをする奴は、今まで美衣子をずっと苦しめしてきた…… アイツしかいない。

久しぶりに見た美衣子は、少しだけ以前より痩せたような気がした。目の下にできたうつすらとした隈が、美衣子がどれだけ不安な夜を過ごしていたのかを俺に教えてくれた。

道行く人にぶつかって、それでも誰にも謝らず、俺は必死に走り続けた。アイツはきっと……いや絶対に、あそこにいる。

信号を渡り、交差点を走り抜けて、路地を曲がり、走る。曲がり角を曲がったところで、ようやく俺は一度足を止めた。

「……」

俺の目の前には、ここ暫く通うことのできなかつた、中学校があつた。本当はまだ謹慎中だから、ここに来てはいけない。だけど、俺には会つて話をつけなければいけない奴がいるんだ。

俺は迷う事無く校舎内に入り、階段を駆け上がつた。下校時刻はとっくに過ぎている。誰の姿も見えなかつた。それでも、階段を上がるペースは落とさない。

2年の教室から、微かに笑い声が聞こえてくる。俺は呼吸を整えながら、その扉に手をかけて、勢い良く扉を開いた。その瞬間、教室の隅っこで固まつて話をしている女子の集団が目に入った。机の隣で雑誌を読んでいる女子、椅子に腰掛けて此方を見ている女子、先生が来たかと思ったらしく手に持つたお菓子を隠そと教科書で壁を作つている女子、そして……机の上に乗つて此方を振り向き、にやりと笑つた女子。

(やつぱり、いた)

……葉山涙と、その友達である3人組だ。葉山涙は机から降りると、すたすたと俺の方に向かつて歩いて歩ってきた。俺の目の前で立ち止まり、怪しく微笑む。

「あれ、雪山先輩。お久しぶりですね。どうかしたんですか？　まだ謹慎期間じゃなかつたですしけえ」

俺は黙つたまま、葉山涙の腕を強く掴んで、鋭く睨みつけた。葉山涙は一瞬驚いたように俺の顔を見上げ、え？　と声をもらして眉を顰めた。

「ちょっと来いよ」

「は？　……なんなんですか、離してくださいよ。また痴漢して捕まりたいんですねかあ？」

「黙れ！　いいから来い！」

第29話 疑惑

(はーあ……何なのよこいつ。今のこいつは、目障り以外の何者でもないのよね)

あたしはこいつそり溜息を吐いてから、くるりと振り返ってにっこり笑つた。雪山に連れて来られたのは、あたしたちの教室から大分離れた廊下。少し昔のあたしだったなら、こいつにこんな風に呼び出しがれたら、きっと嬉しすぎて倒れてただらうな。

「どうかしたんですか？ 雪山先輩。あ、もしかして美衣子からあたしに乗り換えるとか？」

からかうようにそう言つて笑い声をあげたが、雪山は何も言わずに俯いている。あたしの顔からも笑みが消えた。

(え？ ……まさか、本当に？)

でも、それは勿論あたしの勘違いだった。雪山は何故か憎しみのこもった瞳であたしを睨みつけると、静かに口を開いた。

「美衣子の家が火事になつた」

……それを聞いた瞬間、思わずあたしは言葉を失い両手を見開いて、両手で口元を押さえた。

「えつ？」

流石にあたしも驚いた。美衣子の家が、……火事？

「……そ、それで、美衣子は？　まさか、死……」

「いや。運よく助かつて、今病院で治療を受けてる」

「嘘……でしょ？　火事だなんて。どうして、そんな……」

まさか、あのヲタク男の仕業？　美衣子に拒絶されて、逆上したのかもしれない……。もしそうだとしたら、もしかしてこれ、あたしの責任？

(…………っそんな。あたしは、ちょっと美衣子を懲らしめてやると思つただけなのに……)

蒼ざめて両手で顔を包み込んだその時。強い力で雪山に肩を掴まれ、壁に押し付けられた。頭を壁に打ち、「うん」という音が自分の耳に届く。

「いつたあ！　何すんの？」

「…………お前、しらばつくれんなよ！」

「は……つ何言つてんの？　意味わかんないんだけど…………」

「お前だろ？　美衣子の家に火をつけたの！」

「…………はあ？」

その言葉に、あたしの頭の中の何かが切れた。怒りと憎しみと、それから強い殺意が、あたしの中に芽生えてきた。

「ふざけんじやないわよー」

あたしは雪山の腕を振り解き、彼の胸を思いきりどついた。勝手に犯人扱いされて、物凄く腹が立っていた。鈍い感覚と共に苦しげな雪山の声が聞こえ、雪山は反対側の壁に頭を叩きつけて……する

ずると、倒れた。

「えつ？」

頭を叩きつけたときの音が酷く大きな音だったので心配になり、恐る恐る雪山の肩を掴んで揺さぶる。

「ちょ、ちょっと。大丈夫？」

まさか死んでしまった？ そう思って唇を引き結び、脈をはかる。

（……ああ、なんだ。生きてるわ）

安心してほつと息を吐き出し、気絶している雪山の横顔を見ていたら、突然、先程と同じ怒りの感情が込み上ってきた。

「……」

何の根拠も無いくせに、あたしを疑つてたんだよね。少しだけ、ほんの少しだけ美衣子の事を心配してやつたのに……。犯人扱いは無いんじゃない？

力一杯殴つておいてやろうか。握り拳を作つてそう考えたとき、ふと、頭の中にいい考えが浮かんだ。

（そうだ……、こいつ、受験生なのよね）

そういうえばこのあいだの痴漢騒ぎで、受験がちょっとだけ危くなつたらしいと聞いた。それじゃあ、もつと受験を危なくする事件を起こさせてやるひ。

あたしは雪山の体を、すぐ近くの写真部の部屋へと運び込んだ。

現像室の扉を開け、更にその中に雪山を押し込む。そしてテーブルの上に放置されていたカメラを片手に持つて、雪山に向かって笑みを浮かべた。

第30話 隠謀

「ん……」

雪山が田を覚ますと、そこにはもう誰の姿も無かった。田に付いたのは埃の被つたカメラや印刷紙、古ぼけたプリンターにインク類。

(「…………ビームだ?」)

立ち上がり、辺りを見回してみると、雪山がビームなのか理解した。

(ああ、分かった。写真部の部室か)

部員が少なくインク等の出費が多くかかるため、今年の4月に廃部になつた部、それが写真部だ。

(それにしても俺、なんでこんなことしているんだ?)

頭を人差し指で搔いたそのとき、後頭部がズキリと痛み、思わず顔をしかめる。

(「…………何があつたんだ?」)

……いくら考えてみても、ほんやつとしたことしか思い出せなかつた。

(葉山と話して……それで……?)

涙と話し、彼女の肩を掴んで怒鳴つたところまでは憶えている。しかし、その後の記憶がどうもはつきりしない。

考へている間も痛みが増してゆく。雪山は小さく溜息を吐いて思い出すのを諦めると、後頭部を抑えながら部屋を出た。

(とりあえず、保健室に行くか)

廊下を歩きながら、雪山は、あの写真部で自分がずっと寝ていたことに気が付いた。涙と話したのは下校時刻が過ぎた夕方だったのに、今は沢山の生徒がはしゃいでいる昼過ぎだったからだ。

保健室に辿り着いた雪山は、軽く扉をノックしてドアノブに手を掛けた。

「失礼しま……、あれ？」

扉には、鍵がかかっていた。

(保健の先生、休みか？……仕方無い、鍵を借りに行こう)

そう考へて、職員室の方に歩き始める。

それにしても何故か先生の姿が見当たらない。いつもだったら必ず1人は、廊下を歩いている先生に会つのが……。

職員室は廊下の突き当たりにある。雪山は普段どおりに礼儀正しく頭を下げながら、職員室の扉を開けた。

「失礼します。保健室の鍵を借りにきました」

顔を上げ、ふと、その場の空気が気になつた。みんな怪訝な顔をして雪山を見ている。

(……な、なんだ?)

空気が重い。

「あの、保健室の鍵を……」

もう一度言いかけた雪山のところに、担任の先生が近寄ってきた。その隣には、葉山涙が俯き加減で立っている。眉を顰めて担任と涙を交互に見ている雪山の田の前に、担任が、一枚の写真を突き出した。

「これは、間違いなくお前だな？ 雪山

「は……？」

その写真に写っていたのは、紛れも無く雪山本人だった。机の上で眠りこけている雪山の手には、ビールの缶が握られている。その隣には灰皿。まだ火のついた煙草が煙を上げていた。そしてビールの缶を持っていないほうの手には、明らかに女物だと思われるピンク色の下着が握り締められていた。

「な、なんだこれ!」

悲鳴に近い大声を上げる雪山に対し、担任は冷たい声で淡々と説明する。

「2年生の葉山が、教えてくれたんだ」

涙は涙田で雪山を一瞬だけ見て、それからすぐに田を伏せた。雪山はハツと両目を見開く。

(まさか、こいつが……)

拳を握り締める雪山をもう一度見て、涙は泣きそうになりながら、話した。

「あの、あたし……1年生の時、写真部だつたんです。ちょっと写真の整理がしたくて、無断で部室に入っちゃつたんです。そしたら中に誰か居て……。びっくりして、それと同時に煙草の匂いとお酒の匂いがして、よく見たら、寝ていたのが生徒会長の雪山先輩だから……。あ、あたし、気が動転しちゃって、部室のカメラ勝手に借りて写真撮っちゃって……」

涙の瞳から、大粒の涙が零れ落ちた。

「『めんなさい！』ほ、本当に、見るつもりは無かつたんですね！だけど、受験のある大事な時期にこんな事しちや、やっぱりいけないと思つたから……。勝手に写真撮っちゃって、本当に『めんなさい！』

大声を上げて泣き出した涙。

……雪山だけは感づいていた。彼女の涙が『偽の涙』だということに。その綺麗な涙の裏に、薄汚れた『悪意』が隠れていることに。

「『めんなさい、じゃねえだろ』

「え……？」

再び涙田で雪山を見つめる涙。苛立ちを隠せず、雪山は力一杯、拳で涙の頬を殴った。

「さやあああ！」

「な、何をやつてるんだ！ 雪山、止めなさい！」

担任の先生と体育の先生が、雪山を羽交い絞めにした。

「こら、暴れるな雪山！ 落ち着きなさい！」

「くそつ……！ なんだよ、これじやあ……っ」

(これじやあ、痴漢に仕立て上げられた時と同じじやねえか………)

先生が慌てて涙に駆け寄り、赤くなつた頬に氷袋をあてた。涙は泣きじゃくりながらそれを受け取り、必死にその部分を冷やす。

「大丈夫か、葉山」

「は、はいっ……なんとか、大丈夫……です」

「今の雪山の行動で、お前の言つてることが真実だと分かつたよ。

大丈夫、あとは先生に任せて。葉山は教室へ帰りなさい」

「はい……し、失礼します……」

涙は先生に頭を下げ、雪山を怯えた目で一瞥すると、逃げるように職員室を出て行つた。

……その間際、口の端を吊り上げて涙が笑つたのを、ただ一人雪山だけが目にして、大きく舌打ちをした。

「それじゃあ、雪山。お前はこっちに来い」

第30話 陰謀（後書き）

* * * 読者の方が50人を突破しましたへへ

本当に有難う御座います。

これからも精一杯頑張ります * * *

第31話 校長室

雪山が担任に連れてこられた場所は校長室だった。

「なんで校長室になんて連れて來たんですか、先生！」

「……いいから入りなさい。話はそれからだ」

渋々校長室に入り、校長の目の前の椅子に腰掛ける。田の前には校長、左隣には担任、右隣には体育教師。

(一体、何だつてんだよ)

雪山が小さく溜息を吐くと同時に、校長が口を開いた。

「雪山くん。2年生の葉山涙にストーカー行為をしていたというのは本当かい？」

「はあ？」

思わず両手を見開いて、立ち上がりかける雪山。慌てて担任の先生と体育の先生がそれを止めた。雪山は歯軋りをして、再び椅子に座った。

「私たちも、信じたくは無かつた。君を信用していたからね。生徒会長、成績優秀、そして後輩にも慕われる優しい先輩。このままならばきっと、受験も滞りなく済むだろう。そう思っていた矢先に……葉山涙に痴漢行為をしたという連絡が入った」

「違つ……、あれは誤解なんです！ 僕がやつたんじゃない、あいつが自分で……」

「しかし、葉山以外の女子達も証言者だ。それに今回の事もある。

…… 真実だと認めざるを得ない

「違います！ 僕は本当にやつてません。あいつらもグルで……」

「君の証言を裏付ける証拠は、どこにあるんだね？」

雪山は首を垂れ、今度は大きく溜息をついた。

「これ以上話していくとも埒があきません。話の続きをお願ひします
…… ああ」

校長は両手を机の上で組んで、じっと雪山を見た後、口を開いた。

「本当は、『また何をされるか分からぬので言わないでほしい』
と葉山は言っていたんだが、こつなつた以上、伝えさせてもらひつよ。
先程、葉山が写真を持ってきて泣きながら私に言つたんだ。『実は
私、雪山先輩にストーカーされてるんです』……とね。震える手で
差し出してきたあの写真に写っている君を見て驚いた。いつもの君
からは想像もつかないよつた非行の数々……」

「だから、俺はやつてないって言つてんじゃねえか！」

「……落ち着きなさい」

諭すようなその一言に、雪山は舌打ちをした。仕方が無いので、
一回口を開ざす。

「それで？ …… 続けてください」

「この写真で君が握つている下着は、彼女の物だそつだね」

「なつ……」

「昨日の夜、部屋の外に干していたものを盗まれていたのだそう
だ。今まで何度も何度も葉山の下着は盗まれていたらしい。まさかと思
つたが、君のロッカーの中を調べさせてもらひつたよ」

校長はゆっくりと、机の下から大きな段ボール箱を出してきた。田の前にダンボールが置かれる。中を覗き込んだ雪山は凍りついた。その中こま、女物の下着がいくつも詰め込まれていたのだ。

「これが君のロッカーの中に入っていた。葉山の証言の、決定的な証拠になる」

「違つ……違つ……」俺じゃない！　あいつがやつたんだ。自作自演

「そんなことをして、葉山に何かメリットがあるのかね？」

- 1 -

雪山は血が吐けたなるほど顔を噛み締め、顔を伏せた。なんだ、証拠が無い。こんなことになるなり……会話を録音しておけばよかつた。

「それに、まだ証拠があるんだよ」「え？」

その言葉に、雪山の瞳が見開かれた。

「君は葉山に嫌がらせの電話やメールを送つていたそうだね」

「そんな事、やめておせん！」

「それじゃあ、これは何だい？」

校長は机の中から、キラキラのライнстーンで彩られた、派手な赤い携帯電話を取り出した。

「これは、葉山の持ち物でね。先程、預からせてもらつたんだ。メールボックスを開く許可も貰つてゐる。もつ解つてゐるとは思つが……問題のメールを見せよ!」

そう言いながら校長はメールの受信ボックスを開いた。いちばん上にあつたメールを開いて、それをそのまま雪山に見せ付けてくる。目線を動かし本文を読んだ雪山は、思わず校長の手から携帯電話を奪い取つていた。

ゾッとするような、気味の悪い単語が並べられているメール。雪山はその画面を見つめて思わず呟いた。

「なんだこれ……。気持ち悪い」

なんた
ニテ お前が送<う>たんだニ? 雪山

卷之三

雪山は慌ててメールアドレスを確認し、嘘だろ？と小さく洩ら

jp……何度も何度も確認する。間違いない。

「……一体、どうこういふんだよ。」

声が震えた。

(これは間違いなく俺のメールアドだ。おかしい。一体どうなつてゐんだ？)

雪山はポケットから携帯電話を取り出した。取り乱しているため、

中々ボタンを押すことが出来ない。やつとの思いで送信ボックスを開いて、いちばん上のメールを確認する。

「嘘、だろ?」

間違いだと思ったかつた。……しかし、確かに自分の携帯電話から、見知らぬアドレスにメールを送っている。そして本文はもちらん、先程見たあの氣味の悪い文章だ。雪山は驚きめて椅子から立ち上がつた。頭を抱えて、呻き声を上げる。

校長はそんな雪山を冷たく見上げたあとに、小さな声で、言った。

「雪山くん。君の処分はこれから職員会議で決める。今日は取り敢えず、家に帰りなさい」

その言葉に頷きもせず、雪山はその場を後にした。校長室の扉を閉めて、自分の教室へ歩き出す。

次の授業は移動教室だったので、教室には誰一人居なかつた。鞄に荷物を詰めながら、雪山は握り拳で力一杯、自分の机を叩いた。

……大きな、鈍い音。手に伝わる痛み。

(くそつ……！　くそつ！　また……また葉山涙にハメられた。ごめんな、美衣子。俺、役に立てなかつた。ごめん……ごめんな)

第32話 うわせ

いくら次の日が来て欲しくなくても、必ず日は昇る。今日も朝がやってきた。雪山は、朝日に照らされながら、重い鞄を引き摺つて登校した。

校舎に入つてから廊下を歩いている間、周りの目が自分に突き刺さつてこることに気がつくのにはそう時間はかからなかつた。

「なんだよ、何見てんだよ」

凄みのある声でそひ詰つと、後輩達は首を横に振りながらにたにたと笑つた。

「なんでもないですよ」

「雪山先輩、せっかく停学あけたのに残念つすね」

「あ？」

「ははつ、俺たち、全部知つてるんすよ？ つてか、多分先輩の事件知らない人、もうこの校舎内にはいないと思います」

昨日の出来事は、全校の生徒達に知れ渡つてしまつてゐるようだ。雪山はあからさまに不機嫌な顔をして、後輩達を睨みつけた。

「うつせえな。どけよ」

後輩を突き飛ばし、教室に辿り着いて、扉を開く。……一瞬静まり返つた教室内。雪山が席に着いた途端、辺りから冷やかしの声が上がつた。

「よお。ストーカー雪山」

「今日も2年の葉山、ちゃんと登校してるぜ? 会いに行かなくていいのかよ」

「なんか、こんな真面目な雪山があんないとするなんて意外だよな」

笑い声をあげるクラスメイトたちを殴りつけた雪山は、クラス内にいる全員を睨みつけた。

「黙れ! あんなのテーマに決まつてんだ!」

雪山が叫んだ瞬間、スピーカーから放送が流れた。

『3年A組、雪山拓正くん。至急校長室まで来てください。繰り返します。3年A組雪山拓正くん。至急校長室まで……』

……最悪のタイミングだ。雪山は鞄を乱暴に机に置いて、その場から逃げ出すように教室を出た。クラスメイトの笑い声が雪山の背中を追いかけてくる。歯を食いしばりながら、雪山は校長室へと向かつた。

第33話 信じられない言葉

「……失礼します」

校長室に入った雪山を待ち受けていたのは、この中学校の全職員たちだった。沢山の大人の視線が、揃って雪山を見る。その威圧感に、少し怖くなつた。

「雪山くん、そこに座りなさい」

校長に指示を出され、雪山は俯き加減で頷き、校長の机の前にある椅子に移動した。

「……」

椅子に腰掛ける。……先生たちの視線は、変わらず雪山に突き刺さつている。とにかく居心地が悪い。この部屋から、早く出たい。校長一人だけならまだしも、こんなに沢山の大人たちに見つめられると、自分は悪くないはずなのに、何故か不安になつてくる。

「……で、なんなんスか？」

思わず、反抗的な声が出た。雪山は校長を強く睨みつける。……沢山の人たちの視線に抗うかのように。

校長は小さく頷いて、雪山の目を真っ直ぐ見つめた。

「雪山くん。非常に残念なんだがね……君の処分が、今朝決定した。
…………君は、」

校長先生は暫く口を閉ざし、言い難そうに首を振った。その態度に不安と焦りの感情を抱いた雪山は、思わず椅子から立ち上がった。

「校長先生！……はつきり、言つてください」

更にその後、沈黙が続き……。校長は顔を伏せて、静かにこう告げた。

「君をこの学校に通わせ続けるわけには行かない。君には、他校に転校してもららう事になった」

「……転校？」

雪山の皿に[写]る景色が、一瞬で色を失つた。体が震え出し、足元がふらつく。ざわつく先生達の声も、外から聞こえる生徒達の声もチヤイムの音も、全ての音がその瞬間、一瞬だけ聞こえなくなつた。

「……校長先生」

雪山は、強く両手を握り締めて、小さく笑みを浮かべた。しかし、その顔色は酷く悪い。

「なんだね？」

「それ、何の冗談ですか？ 笑えませんけど」

そうだ、これは冗談だ。悪い夢だ。俺は美衣子を護るつて決めたんだ。あいつの為に、卒業までこの中学で頑張るつて決めたんだ。それなのに……こんなことがあってたまるか。

「嘘だと云つて下さい！」

叫び声をあげ、すぐるように校長の顔を見る雪山。しかし、校長は静かに首を横に振り、言つた。

「いいや、嘘や冗談ではなく、本當だ。君のような優秀な生徒を失うことは、本当に残念なんだけれどね……」

その言葉を聞いた雪山の頭の中が、真っ赤に染まつていった。何も考えられなくなり、いつの間にか怒鳴り声をあげていた。

「嘘だ！」

椅子から乱暴に立ち上がり、校長の胸倉を掴む。校長の顔に唾を飛ばしながら、必死に雪山は怒鳴り続けた。

「嘘だつて言えよー ふざけんじやねえぞー！」

すぐさま周りの先生に押さえつけられ校長から引き剥がされたが、それでも尚、雪山は校長の方に両手を伸ばす。校長は乱れたネクタイを結び直しながらハンカチで額に浮かんだ汗を拭い、雪山に背を向けた。

「教室から荷物を取つてきなさい。保護者の方には連絡を入れてあるから、すぐ来て下さるだらつ」「つおい、待てよ、ふざけんなよ、なんだよ、それ、勝手に……そんなん……嘘だろ？ なあ、嘘だろー。」

辺りの景色が涙で歪んでいく。まさかこんな事になるなんて……。

「俺は、俺は……っ……ただ、あこつを……あこつを譲りつつ、思つただけなのに……」

これから先は、すぐ傍で美衣子を譲つてやることが出来ない。その事実が何よりも辛くて苦しくて、雪山は大声をあげて泣いた。

そ

ぱりん、とう乾いた音が廊下中に響き渡った。雪山はたつた今叩かれてじんじんする頬を押さえようともせず、じっと俯く。雪山を殴った涙目の女性は、雪山の母親だった。雪山の母は、大声で息子を怒鳴りつけた。

「拓正！ あなたがそんな子だとは思って無かつたわ！ どうしてこんなことをしたりしたの…！」

「雪山わん、落ち着いてください」

校長が必死で雪山の母を宥める。それでも、雪山の母は息子に非難の言葉を浴びせ続けた。

「拓正、今まで私がどれだけ頑張って貴方を育てたと思ってるの？ こんなことをするような子にだけは育つて欲しくなかつた……。それなのに、どうして…！」

母親はハンカチ涙を拭いながら泣き喫いている。雪山は何も答えず、ただ床に視線を落としていた。

「どうして…」「どうして…」

校長は泣きじゃくる雪山の母に、まるで小さな子を宥めるかのように優しくいづらつた。

「受験勉強でストレスが溜まつてしまつていたんでしょう。本人にもきちんと言い聞かせてありますので……」

「はい……、本当にすみませんでした。」迷惑をおかけ致しました

何度も何度も校長に頭を下げ、それから、雪山の母は、椅子に腰掛けている少女……葉山涙の傍へ歩み寄った。涙は“被害者”なので、きちんとした説明を受けるため校長室へ連れて来られていたのだ。

「葉山さん、本当に『めんなさ』。うちの息子がとんでもない事をして……」

泣きながら深々と涙に頭を下げる母親の姿を見て、雪山は鋭く涙を睨みつけた。涙はそれに気づきながらも、しつこく“被害者”的フリを続ける。

「あ。いえ……大丈夫です。あたし、全然……気にしてません、から

「『めんなさ』……つあなたはなんて優しい子なのかしら。きっと良い教育を受けてきたのね」

雪山の母は、自分の息子を涙の目の前に立たせて、頭を強く押し、涙に向かって頭を下げさせみつとした。しかし、雪山は全力でそれを拒否しようとする。

「やめろよー……なんで俺が『めんなさ』いけないんだよ

「まあ、なんてことを！……あなた、まだ自分がやったことの重大さに気付いていないの？……葉山さんは、本当なら逮捕されても良いくらいの罪を犯したあなたを、転校だけで許して下さるとおっしゃってるのよ？」

「あ、あのー……あたし平氣ですか？……だから、その……」

辛そうに頭を伏せる涙。それを見た雪山の母が、慌ててもう一度、

深々と涙に頭を下げる。

「『』めんなさご。もう一度とあなたの傍に近寄らせないから……。
これは、ほんのお詫び。受け取つてね」

そう言つて、雪山の母は涙に茶封筒を差し出した。明らかに、大金が入つてゐるような封筒だ。驚いたよつて雪山の母を見上げる涙。雪山は、慌てて母の腕を掴んで声を荒げた。

「おー、やめろよー。何考えてんだよー。」

「拓正、あなたは黙つていなさいー！」

ヒステリックな大声を上げて息子の手を振り払い、涙の手に、半ば強引に茶封筒を握りせらる雪山の母。

「それじゃあ…… やよひなひ。お元氣で……」

雪山の母は涙に向かつて丁寧に頭を下げ、それから周りの職員たちにも、同様にしつかりと頭を下げた。

* * *

職員室を出て、母は雪山の方を振り返りもせず出入口に向かつて歩き出した。雪山は母の後姿を必死に追いかける。
…………
…………
さつと分かつてくれる。仮にも自分の親なのだから。しつかりと話しかねば、さつと……。

「お袋、待てよ」

やつと追いつき、母親の肩を強く掴む。…………すると雪山の母は勢

い良く振り返り、強く息子を睨んだ。

「通わせて頂けるかどうかはわからないけど、新しく通う予定の中学校を見つけておいたわ。もし通わせて頂けるようであれば、来月からその中学校に通うのよ。いいわね？」

「は？ 何言って……そんな勝手に、」

「勝手に、ですって？ いい加減にしなさい、拓正！ あなたが不祥事を起こさなければこんな事にはならなかつたのよ！」

「だから……っ俺は何もやつてねえ！」

「いいこと、拓正？ 普通犯罪者はね、何をやつたって、自分から『やりました』なんて言わないものよ

呆れたように眩いた母は再びゆつくりと歩き出し、途中で振り返つて、雪山に自分の鞄を投げつけた。

「地図と小銭入れ、それからメモが入ってるから、今からその中学校を見てきなさい。場所をちゃんと覚えておかなくちゃいけないからね。隣の県だから、引越しもすることになるわ。それもきちんと頭に入れておきなさいね」

雪山に向むかって立った母は、ハイヒールをカツカツと鳴らしながら、雪山から遠ざかっていく。母の背中を恨めしそうに見つめ、小さく舌打ちをする雪山。

どうして、話すら聞いてくれないのでだろう。大人は卑怯で意地汚い生き物だ。自分の言葉や考えだけを押し付けて、子供の言葉はひとつも聞いちゃくれない。

雪山は全てを諦めて、しぶしぶ鞄の中から地図を取り出し、下足場へ向かつた。一応親の言うとおりに、駅に向かわなければ。

(……大丈夫。大丈夫だ。最後まで諦めなければきっと誤解も解け

る。そうしたらまた、きっとこの学校に戻つて来れる…… 美衣子のことを守つてやれる……）

雪山はそう信じていた。これから自分を待ち受ける過酷な運命の事など知らず……。

第35話 裏工作

雪山親子が学校を出て行ったのを確認したあたしはすぐさま学校のPCルームに足を運んだ。

PCを起動する。……勿論、許可はとつていない。この時間はPCルームを使う授業もないししつかりと鍵を掛けておいたから、恐らく誰も入つてこないだろう。

あの男と連絡をしたときに使つていたアドレスには、どこからか知らないが、迷惑メールが沢山届いていた。それを削除しつつ、あの男からのメールを探す。

（やつぱり、無いかな。本当のアドレスの方教えちゃつたし……）

半分諦めかけたその時だ。見覚えのあるアドレスを見て、あたしは手を止めた。

「……」

暫く件名のないそのメールを見つめた後、思い切つて開いてみた。……思つたとおりそれは、あの男からのメールだつた。

『美衣子ちゃんから連絡が来なくなつて寂しいよ……。美衣子ちゃんの家、燃えちゃつたよね。ねえ、僕の家にいでよ。一緒に遊ぼう。可愛がつてあげるよ……』

その文章を読んだ瞬間、背筋が凍りついた。この文章を見れば分かる。……間違いない、あいつが美衣子の家に火をつけたんだ。あたしは、じくりと生唾を飲み込んだ。

「あいっ……」

口の端を歪めて、くくく、と細く笑い声をあげる。

「……ただのオタクかと思つてたのに、結構やるじゃない。いいわねえ、こうじう馬鹿は遠慮なく使えるわ」

返信ボタンを押し、キーボードを叩く。この男に協力してもうらえば、もっと楽しいことが出来るかも知れない。

『やつぱりおじさまが私の家に火をつけたんですね』

そこまで打つたところで、一回手を止めて画面を見つめた。これを書いたら流石にやばいかな、と少し躊躇つたが、あたしは首を横に振り、頭に浮かんだ文章を打ち込んだ。

『……本当に嬉しかったです。実は公園でおじさまを待っていたとき、彼氏から呼び出しのメールが来たんです。いつも私に暴力を奮つてくる彼氏だから、おじさまに迷惑をかけるわけにはいかないと思い、すぐに家に戻りました。家に帰ると彼氏が私を待ち構えていて、何度も殴られて殺されかけたんです。そうしたらおじさまが助けに来てくれて、泣きそうなくらい嬉しかった……。だけど、彼氏に脅されて、おじさまにあんなメールを送ってしまいました。……ごめんなさい。でも、本当はすごく感謝しています。おじさまが私の家を燃やしてくれなかつたら、私は今頃どうなつていたか……考えるのも恐ろしいです。あの火事の騒ぎに紛れて、彼氏から逃げる事が出来ました。でも彼氏はきっと、今も私を捜しているでしょう。もう怖くて外を歩けません。おじさまに会いにいくこともできなくて辛いです。……もし良かつたら私のお願ひを聞いてほしいんです。彼氏を捜し出してガツンと言つてやってくれませんか？』“私はも

うおじさまのものだ”って……“私はあなたなんて嫌いだ”って。
そつすれば、おじさまとずっと一緒にいられます。彼の写真を添付
しておきますから、宜しくお願ひします。おじさまが大好きな美衣
子よつ』

文章を打ち終わり、前に雪山を好きだったときに隠し撮りしたも
のを携帯電話から送信して、メールに添付した。顔はバツチリ映っ
ているし、これなら分かり易いだろう。震える手で送信ボタンをク
リックする。

(……そして、あいつはどんな行動を起こしてくれるかな?)

第36話 悪寒

雪山は、駅のアナウンスを聞きながらぼんやりと佇んでいた。自分の乗る電車が来るまで、まだ少し時間がある。

「……はあ

白線の傍で溜息を吐き、小さく舌打ちをする。

「びひじひいろんな事になつちまつたんだよ……」

俺は、ただ美衣子を護つてやりたかっただけなのに。自分の正しいと思つことをした……それだけなのに。転校だなんて、あまりにも酷すぎる仕打ちだと思った。

もう一度重々しく溜息を吐いた、その時だった。背後で誰かの息遣いのよつなものが聞こえた気がしたのだ。

「はあー……はあー……はあー……」

「？」

不審に思つた雪山が咄嗟に振り向くと、雪山の後ろには、フードをかぶり、更にその上から帽子をかぶつた怪しい男が居た。……大きなりュックサックを背負つてゐる。リュックの中からは美少女フィギュアのよつなものが突き出していた。

男は息遣いを荒くしたまま、携帯電話を弄つてゐた。……メールだろうか？ 男はボタンを押して携帯を閉じ、辺りをきょろきょろと見回した。ふと、その男と田が会つたような気がした。しかし男は雪山から田を逸らすと、ゆつくりと売店の方へと歩いていった。

(……氣のせいか。それにしても変なおつさんだな)

雪山は腕時計と時刻表を交互に見ながら、一步白線の外に出た。そろそろ汽車が来るはずだ。携帯電話を開き、美衣子にメールでも送りうとボタンを押す。……悲劇が起つたのは、その直後だった。

「やあああああ！ 危ない！ 逃げてー！」

大きな悲鳴が、後ろから聞こえた。何事かと振り返ると、先程見た息遣いの荒い男が、自分の方へ猛然と突進してくるのが見えた。

「うわー！」

男の手には長く刃を出したカッターナイフが握られている。そこ の売店で売られているものだつた。雪山は間一髪男の突進を避け、悲鳴をあげながら逃げた。しかし、男は雪山の後を追つて走つてくる。息遣いを、更に荒げながら。

「な、なにすんだよおっさん！」

怒鳴り声を上げる雪山。……男の瞳が、ギラリと光つた。

「お……お前だろ？ 僕の美衣子ちゃんの、か、彼氏面……してるのはつって」

「な、……何でお前があいつの事知つてんだよ？ 彼氏面つて一体何の事だ？ 僕はあいつの彼氏だぞ？」

「か、か、彼女がどれだけ、い、嫌がつてゐるか知りもせずに、そ……そんな言葉を吐くな！ 美衣子ちゃんは僕のものだ！ お、お、お前みたいなやつには、絶対に渡さない！」

男が物凄い勢いで突進してくる。その見た目や体格からはとても考えられないようなスピードだった。

「お、おー！ やめろ、危ねえって！」

男が突き出したカッターナイフが、雪山の腕に深く突き刺さった。赤い血が溢れ出し、腕を伝つて地面へ落ちて行く。

「うああああ！」

雪山は叫び声をあげ、腕を押さえて男から遠ざかろうとする。周りの人たちもそれを見て悲鳴をあげ、逃げ惑つた。

「美衣子は僕のものだあああああー！」

「おい、待て、やめつ……やめろおおおおー！」

男が雪山の体を線路側に押し出すのを、誰も止められなかつた。

『白線の内側に下がつてお待ちください。まもなく電車がまいります。白線の内側に下がつて……』

雪山の耳に、自分が乗るはずだつた電車の到着を知らせるアナウンスが聞こえた。必死に手足をばたつかせながら宙を舞う雪山と、何が起こつたか理解できず、呆然とそれを見つめている人たち。

「ぎゃあああああああー！」

雪山の叫び声を搔き消すように、電車が大きな音を立てながらホームに到着した。沢山の人々の目の前で、雪山の体は勢いよく電車に吊りつけられたのだった。

第37話 予感

その頃、美衣子は病院のベッドの上でテレビを観ていた。この時間帯のテレビ番組はどれも退屈だ。

なんとなく、気分でニュースに変えてみた。普段はニュースなど滅多に見ることは無いが、見たい番組が無いので仕方なく、暇潰しのつもりだった。淡々とした口調で喋り続けるアナウンサー。画面の端から誰かの手が伸びてきて、アナウンサーに書類を手渡した。それを受け取ったアナウンサーは、尚も淡々と書類を読み上げていく。

『臨時ニュースです。本日昼過ぎ、東京都の駅で、男性と男子高校生の間で何らかのトラブルがあり、もみあっている内に男子高校生が線路内に転落し、電車と接触したようです。男子高校生は重態で、先程近くの病院に搬送されました。詳しい情報が入り次第、お伝えします。』

そのニュースに目が釘付けになり、美衣子は慌ててベッドから起き上がった。

「あれ？ ……」の駄つて、すぐ近くの……

……理由はわからないが、何故か少しだけ背筋が寒くなつた。つい先程大きな救急車のサイレンが聞こえていたが、もしかして、その電車に撥ねられた人はこの病院に運ばれてきたのだろうか？

その時、勢いよく病室の扉が開いて、看護婦さんが室内に飛び込んできた。驚いて、弾かれたようにそちらを見る美衣子。看護婦さんとぱっちり目が合つた。看護婦さんは慌てたように美衣子の傍へ小走りで駆け寄り、息を切らしながら美衣子の手を握つて、蒼ざめ

てひらひつた。

「…………美衣子ちゃん、この間、お見舞いに来てくれた子は雪山君って子よね？」

「え？ あ、はい。そうですか……？」

「下の名前は？」

「…………拓正です。雪山拓正」

看護婦さんがじくじくと涙を飲み込んだ。美衣子は首を傾げて、看護婦さんの次の言葉を待つ。

「美衣子ちゃん、ちよつとい、一緒に来てつけつだい」

看護婦さんはそつと、足早に病室を出て行つた。美衣子は言い知れぬ不安を覚えながら、慌てて看護婦さんの後を追いかけた。

第38話 手術

看護婦さんの足が、ある扉の前で止まった。美衣子もその場で足を止め、看護婦さんの隣へ移動して、目の前にある扉を見上げる。そこは手術室だった。赤いランプが点いている。今まさに誰かがこの部屋の中で、生死の境を彷徨つてているといつ証拠だつた。

「あ……あの、どうして、こんなところに……？」

不安になり小さな声でそう尋ねると、看護婦さんはそつと美衣子の肩に手を置いて、じつにいた。

「雪山君ね……、やつき、ニュースで報じられたばかりなんだけど、すぐその駅で、電車と接触してしまったらしいの。即死してもおかしくないくらいの事故でね、すごく重症で意識も無くて……手術も極めて難しい手術だから……成功の確率も決して高くないの。本当は患者さんをこんな風に連れてきてはいけないんだけど、美衣子ちゃんと雪山君は恋人同士だったみたいだから、美衣子ちゃんが居てくれたら、雪山君も頑張れるんじゃないかと思つて……」

「……事……故？」

「ええ……雪山君の『両親にはなかなか連絡がつかなくて、雪山君を応援してあげられるのは美衣子ちゃんだけなの。だから

……』

……美衣子の耳には、もう看護婦さんの言葉はほとんど聞こえていなかつた。両足ががくがくと震え出し、口の中の水分が急速に失われていく。美衣子はふらふらとおぼつかない足取りで目の前の扉へ近寄つた。

「雪ちゃん…… 雪ちゃん……」

手術室の扉に張り付くようにして大声で雪山の名前を叫んだ。廊下中に美衣子の叫び声がこだまする。

「雪ちゃん、お願い、頑張って……これからもずっと私の傍に居て。お願い……こくならないで……！ 雪ちゃんがいなきや……私には……雪ちゃんしかいないの……！」

第39話 祈り

それから、時間は流れていった。美衣子がここに来てから既に数時間が経過している。相当難しい手術なのだろう。先程から美衣子は何度も何度も時計を確認して、進んでいく時計の針を凝視していた。

「雪ちゃん……」

時折、ぽつりと美衣子は雪山の名前を口にした。その度に看護婦さんは気の毒そうな顔をして、

「美衣子ちゃん、手術、長引くから病室に戻る？」

と気遣ってくれた。しかし、美衣子は首を横に振った。

「いえ……。私、雪ちゃんの傍で雪ちゃんを応援したいんです。今まで何度も、数え切れないくらい雪ちゃんは私を助けてくれた。私を大切してくれた……。だから私も雪ちゃんの事を少しだけでも助けてあげたいんです。せめてここで力になれるように祈らせてください……お願いします」

「……そうね。美衣子ちゃんが祈つてくれたら、きっと雪山君は元気になるわ。美衣子ちゃんの祈りを、神様が聞いてくれないわけないものね」

「……はい」

包帯を巻かれた美衣子の両手。美衣子はその手を力一杯合わせて、ぎゅっと握り締めていた。そのせいで包帯がとけじり捲れ、血が滲んでくる。

「美衣子ちゃん、包帯、取り替える?」

看護婦さんが心配そうにそう話してきただが、痛みに顔を歪めながらも美衣子はそれをあっさりと断つた。

「いこんです。雪ちゃんはこれよいつもと辛こ思いをしてる。一緒に苦しみで一緒に乗り越えられるように頑張りたいんですけど」

「やつ……」

そこでは会話は途切れ、そのまま時計の針は時を刻み続けていった。病室内は消灯時間を過ぎ、ほとんど真っ暗になる。それでも美衣子はまだ両手を硬く握り締めるだけで、眠そうな顔を見せることもあぐびをする」とも無くじっと【手術中】の3文字を見つめ続けていた。

第40話 終了

手術開始から丁度12時間が経ち、再び看護婦さんが様子を見に来た、まさにその瞬間。睨むように見つめていた【手術中】のワンプが、フッと消えた。ハツとして、看護婦さんと美衣子は顔を見合わせた。

「美衣子ちゃん、ちょっと待つてね。先生に様子を聞いて……」

看護婦さんが言い終わるよりも早く、手術室のドアが開いた。手術を担当していた先生が、2人に気づいて一瞬驚いた顔をした。

「あ……院長先生。」この子は雪山君の恋人の、春風美衣子さんです
「……ああ……こんばんは、春風さん。雪山さんのご両親は？」
「まだ連絡がつかなくて……」
「……そうか……」

院長先生はそう言つて、美衣子に軽く頭を下げた。美衣子も小さく頭を下げるから、慌てて先生に駆け寄る。

「先生、雪ちゃんは……雪ひやんはー。」

先生は哀しげに俯き、美衣子に向かつて、深く、深く頭を下げた。

「手は、全て尽くしたのですが……、残念ながら……」

美衣子の目が、大きく見開かれる。今日の前にある世界と、自分の脳内に思い描いていた世界が大きく音を立てて切り離された気がした。

「ひ、嘘……で、しょ？」

そう呟いた美衣子は、院長を押し退け、手術室へと飛び込んだ。部屋の中には血の臭いが充満している。

「雪ちゃん、雪ちゃん！ 雪ちゃん！」

沢山の看護師達が、雪山を寝かせているベッドの周りに立つていた。だらつと垂れた雪山の両手が見える。青白い手だった。雪山の体には大きな布が被せられていた。

「い、い、君！ 手術室には立ち入り禁止だ！」
「早く出て行きなさい！」

美衣子は看護婦や看護師の傍をすり抜けて、雪山の体にかけられた大きな布を引き剥がした。その瞬間に飛び込んできたのは、変わり果ててしまつた雪山の姿だった……。

それを見た美衣子は腰が抜け、その場に蹲つてしまつた。

「ゆ、あ……ちゃん……、」

ただ一言呟いて、美衣子はその場に倒れ込んだ。

第41話 死

美衣子が田を覚ますと、病室の天井が見えた。

(……夢だつたんだ、良かつた。変な夢だつたなあ。やけにリアルな夢だつた)

ベッドから起き上がりつたその瞬間、美衣子の瞳から止め処なく涙が零れ落ちた。夢だつたのに、夢だつたはずなのに、涙が止まらない。背中を丸めて泣きじやぐる美衣子の背後から、遠慮がちな声がした。

「美衣子ちゃん」

振り返ると、そこには笑顔の雪山が……、

「雪山……」

けれど、雪山との笑顔は一瞬で消え去ってしまった。その代わりに田の前には、哀しそうな顔をした看護婦さんが立っている。

「看護婦さん……」

「田が覚めたのね、美衣子ちゃん……辛いと思つたけど、雪山病院にお別れを言いにこきましょひ」

美衣子は少し赤くなつた田を擦りながら、不思議そつな顔をして看護婦さんを見上げた。

(……最後のお別れ？ 何言つてゐんだかい。看護婦さん、疲れの

セコでおかしくなっちゃったのかな?)

「雪ちゃんはどこのいるんですか? お見舞いに来るつて言つてしま
した。今日も来てるんでしょ? 」

美衣子は段々声を荒げながら看護婦さんの服を掴んだ。その必死
な瞳は焦点が合つていない。

「……」

看護婦さんは何も答えてくれない。寂しげな田をして美衣子を見
つめるだけだった。美衣子の傷口に注意しながら、看護婦さんはそ
の細い腕を優しく掴んだ。

「行きましょう、美衣子ちゃん
『や……つ待つて! どこの行くつて言つんですか……つー』

強い力で引っ張られながら美衣子は涙声をあげた。心の奥底から
恐怖心が湧き上がつてくる。

(雪ちゃんは死んでない。生きてる。それなのにどうして不安にな
るんだか? どうしてこんなにも怖いんだろう?)

暫く廊下を歩き続け、途中で看護婦さんが足を止めた。田の前に
ある部屋……それは遺体安置室だった。

命を失くした人間が暫くの間休ませられる場所、それがこの部屋。
美衣子は震えながら首を大きく横に振り続ける。唇が真っ青だつた。
その部屋の前に立っていた院長先生と田が合つた美衣子は、大声
で泣き喚いた。

「嘘つかないで、院長先生… 雪ちゃんは生きてる… 今も元気なの…。だって、だって、雪ちゃんは私を護るつて言つてくれたんだよ?」

看護婦さんが美衣子と院長先生を交互に見て、そつと院長先生の耳元で囁いた。

「あの、先生……どうしましよう?」

「仕方が無いや、恋人が亡くなつたんだから…」

院長先生は、ゆつくつと美衣子の傍へと歩み寄つた。美衣子は院長先生を睨みつけるよりして歯を食いしばつている。

「美衣子ちゃん」

先生はゆつくつと、でもしつかつと、小さな手で言い聞かせるようになり、話し始めた。

「命あるものは、必ず土に還る時が来るんだよ。それは分かるね?」
「……」

美衣子は何も答えない。しかし、美衣子の瞳には涙が溜まつていた。

「この世に生まれてくる者がいるなら勿論、土に還る者もいるんだ。それがこの世界での掟なんだよ。今日はたまたま雪山君が土に還ることになった。この世界から消えることになった。いくら生きたいとしても、変えられない運命っていうものはどうしても存在する。僕は医師だからそういう人を沢山見てきた。それでも、運命っていう歯車は決して止まらない。今この瞬間に、命は燃え続けている

んだよ。君の命も僕の命もね」

「そんなの……違つ……一 雪ちやんぱすつと私を護るひじゅつ
くれた。……私をずっと護つてくれるんだよ……」

「うん、やうだね。雪山君は約束を破つていなこよ。彼は、美衣子
ちゃんの心の中に生き続けていくんだ。そしてこれからもすつと、
君の事を護つてってくれる」

院長先生の言葉に美衣子の中の、どこかの糸がプツリと切れ
た。雪山が本当にこの世から居なくなり、自分の傍から消えてしま
つたという事実を、突然心が認めてしまつた。美衣子は泣きながら
院長先生に抱きつき、大声を上げて泣きじやくつた。

「雪ちやん、雪ちやん、雪ちやん! つわああああん!」

第42話 有り得ない」となの、

遺体安置室。冷たい響きのあるその部屋に、美衣子は足を踏み入れた。

薄暗い室内に、ぽつりと小さなベッドが置いてある。ベッドの上には、顔に白い布を被せられた雪山が横たわっていた。

ベッドの横で啜り泣きが聞こえる。美衣子はベッドの傍に近寄つてみて、言葉を失くした。その啜り泣きは、雪山の母のものだつた。

「拓正……拓正、拓正……！」

雪山の遺体に覆い被さる様にして、彼の母はまるで赤ん坊のよつに泣いている。そして、開く筈の無い息子の瞼に涙を落としながら必死で謝つているのだった。

「「めんね、「めんね……、あなた一人を駅に行かせたりしなければ、こんな事には……」」

……幾ら悔やんでも、もう雪山は戻つてこない。冷たくなつてしまつた人間が蘇る事は、もう一度と無いのだ。

「雪山ちゃん……」

美衣子はそつと雪山の母の傍に屈み込んで、涙を流しながら雪山の髪の毛を撫でた。

「雪山ちゃん……、こんな私の事を護るためにいつも頑張ってくれたよね……つ、す、じ、く、す、じ、く、嬉しかった。本当に有難う……」

美衣子と雪山の母は、その場でいつまでも泣き続けた。

美衣子は彼の手を握り締める。一度と温まるはずの無い手を。美衣子は彼の名前を呼ぶ。一度と答えてくれるはずも無いのに。

それでもまだ期待してしまったのだ。もしかしたら今にも雪山が起き上がつて、「お前、なに泣いてるんだよ」と笑いながら抱きしめてくれるのではないか、と。もしかしたら美衣子の頭を撫でながら、いつもどおりの優しい笑顔を見てくれるのではないか、と。

……それはあまりにも哀しすぎる期待だつたけれど。

雪山の母はその場から勢い良く立ち上がり、傍に立っていた刑事の胸倉を掴んで喚き散らした。

「一体誰なんですか？ 拓正をこんな姿にしたのは……！」

刑事は驚いたような顔をして、落ち着いてください、と言ひながら慌ててこう答えた。

「それが、あまりにも突然の事だったので、駅の者も目撃者も犯人の顔はハッキリと見ていないようでした……。我々が駆けつけた時には、既に犯人は逃走していました。カッターナイフを売つたという売店の売り子の方にお話を伺つたのですが、『フードを深く被つていたので顔までは良く分からない』と仰いました

「……一刻も早く探し出して、犯人を捕まえてください！ お金ならいくらでも出します。全力で探し出して、死刑台に立たせてください……！」

最愛の息子を一瞬で失つてしまつた悲しみが、彼女の中で爆発したのだらつ。雪山の母は狂つたように叫び声をあげて刑事の胸倉を掴んでも、力一杯揺さぶり続けた。

「たつた1人の……大事な息子だつたんです……つ。今になつて色

々と問題を起こしたりしたようだけど、だけど、たった1人の大切な子だつた……。とても物分りの良い子で、成績も良くて……っ」「……、お気持ちは良く分かります。私共も全力で犯人を逮捕するよつ手配しますので、どうか今はお気持ちを強く持つて下さい。お子さんもきっと、それを望んでいるはずです」

美衣子はその傍らで静かに泣き続け、冷たくなってしまった雪山の手を固く握り締めていた。大好きだった彼の顔を、幸せだったあの時を、全て覚えておけるように、心の中にしまつておけるように、美衣子は力一杯雪山の手を握り締めた。

第43話 葬儀

3日後、雪山拓正の葬儀が行われた。葬儀の会場には沢山の人、人、人。どれほど雪山が沢山の人に愛されていたか、すぐに理解できる大人数だった。

彼の遺影を胸の前に抱えて泣きじゃくっているのは、2日前に病院から退院してきた美衣子。美衣子は泣きながら『何度も何度も雪山の名前を呟いていた』

「雪ちゃん、雪ちゃん……」

幾ら泣いても美衣子の涙は枯れなかつた。3年生のクラスメイトたちが1人1人、彼に最後のお別れを言い、そして彼女である美衣子は、花に包まれた彼の、硬く閉じられた瞼を見て更に悲痛な泣き声をあげた。

「雪、ちゃ……ん……」

（雪ちゃんは死んじやつたんだ。本当にもういないんだ。世界中どこを捜したって、もう一度と会えないんだ）

美衣子の涙が、綺麗に死に化粧された雪山の頬に、ポツポツと落ちていく。熱い涙が零れても、雪山の頬に赤みがさすことは、もう二度と無い。

ふと思い出したよ、美衣子は喪服のポケットを探った。そこから取り出したのは、涙たちに切られそうになつたあの財布だった。

「1ヶ月記念日に雪ちゃんが私にくれたお財布、ちゃんと大事にしてたよ。でもね、これを見ると辛くなるから、一緒に持つて

いつて？ 私がいつかそつちに行く時のために、大事に預かって
ね……」

美衣子は棺桶に眠るその安らかな顔をしつかりと田に焼き付けて、涙を拭い、そつとその蓋を閉じた。しかし未練は消え去ることは無く、美衣子の瞳には再び涙が溢れ出した。美衣子は棺桶を抱き締めるよつにして、大声を上げて泣き崩れた。

「雪ちゃん……！ 大好きだよ、今もこれからもずっと大好きだよ。私がいつかそつちに行く時まで、私のことを忘れないで……。私も、絶対、雪ちゃんのこと、忘れないよ……」

雪山の母が、そんな美衣子を後ろから優しく抱き締めた。彼女の田もまた、美衣子のように赤く腫れ上がっている。

「美衣子ちゃん、拓正の事を想ってくれてありがとう。こんなにい彼女がいるなんて、あの子は本当に幸せ者ね。……一緒に、拓正にお別れを言いましょう」

美衣子は小さく頷いて、泣きながら棺桶から離れた。それを見計らつたかのように、手際よく棺桶は靈柩車に積み込まれていった。靈柩車が長い長いクラクションを鳴らす。美衣子はそれを黙つて聞いていた。

そして泣き腫らした田でにっこりと微笑んで、遠ざかっていく靈柩車に向かつて手を振つた。

「ばいばい、雪ちゃん！ また、きっと、元にかかる……念える、よ
ね……？」

やつとの事でやつ叫んだ美衣子は嗚咽を洟らし、顔を両手で覆つ

た。雪山の母の隣に、いつの間にか美衣子の母が立っていた。美衣子の母は、美衣子の手を握つて、赤くなつた目を擦つた。

「美衣子、雪山さん、……、送り出してあげましょウ……拓正くんを」

「うん……分かつてるよ、お母さん」

「ありがとうございます……、春風さん」

会場に集まつていたほとんどの人が、車で火葬場へ移動する準備を始めた。雪山のクラスメイトたちも次々と自分の家の車に乗り込んでいく。美衣子も母に手を引かれ、車に乗り込んで火葬場へと向かつた。

その時、遙か後ろで美衣子の家の車を見送り、嬉しそうに微笑んでいた1人の女が居ることを 美衣子は知らなかつた。

第44話 龜裂

(美衣子の泣き顔。美衣子の叫び声。美衣子の涙。……ああ、最高だわ!)

妖しく笑っているのは、言うまでも無く葉山涙だった。その隣に立っているのは、瑠夏、京子、奈々の3人。いつもどおりの“美衣子イジメ”の主犯メンバーだ。

「ねえ、るう。火葬場行こ? もうみんな移動しちゃったよ」

瑠夏がそう言って涙の服の袖を、少し強く引っ張った。その時、袖が持ち上がりつて手首の傷跡が一瞬見えてしまい、瑠夏は慌てて涙の袖から手を離した。

「う、ごめん…」

が、しかし、涙はにたにたと笑みを浮かべたまま、瑠夏の方を向いた。

「別にいいわよ。あ、そうだ。あたし、もう帰るね

「え? 帰る、つて……」

「涙さんは火葬場に行かないんですか?」

涙は奈々の質問に対して、ケタケタと笑い声をあげた。

「あはは、何言ってるの、行くわけないでしょ? 雪山は死んだし、美衣子の苦しむ姿を見たかつただけだから、もう今日の目的は果た

したわ

笑い転げている涙の姿を見た3人は、信じられない、と言いたげな顔をした。そして、なにかおぞましいものでも見るような目を涙に向けた。その視線に気づいた涙が、ピタリと笑いを止めて3人を睨みつける。冷たい目だった。

「……何よ？」

瑠夏は慌てて目を伏せて、涙と目が合わないようになした。それから、小さく首を振り、ぽつりと呟く。

「何でもない」

おずおずと、京子が軽く首を傾げて、涙に尋ねる。

「えっと、それじゃあ、涙は帰るんだよね？」

涙はその問いには答えず、小さく頷いた。京子が“もう美衣子をいじめるのはやめよ”、“と言い出した頃から、涙は京子にだけ微妙に冷たい。

「奈々たちは一応火葬場に行くので、ここでさよならですね」

「うん、そうね。それじゃ、また学校でね～」

学校の先輩が……、しかも以前好きだった人が亡くなったというのに、涙はいつもどおり、いやいつもよりも明るく笑って手を振っている。なんだかその笑顔がとても恐ろしくて、思わず瑠夏たち3人は顔を見合せた。

「ちよつと待つて、るうー。」

瑠夏が涙を引き止める。

「ん、なに？」

涙はすぐさま振り返って明るい笑顔を見せた。瑠夏は静かに深呼吸をしてから、今までずっと気になっていたことを涙に尋ねた。

「あのね、るう。美衣子の家が火事になつたり雪山先輩が転校することになつたり……、あと、雪山先輩が亡くなつたこの3つの事件つてさ、実はるうが裏で何かを手回ししたとか、つていうことは無いよね？」

京子と奈々も、顔を強張らせて涙の顔をじつと見た。涙はその問い合わせに対して少し考えるような素振りを見せたが、直後、瑠夏に向かつて満面の笑みを浮かべた。

「さあね。まあ、『想像にお任せするわ。……あ、でも、』

涙は再び歩き出しながら、3人の方は振り返らず、明るい声を出した。

「……次は美衣子がいなくなつたら、面白いと思わない？」

涙は高らかな笑い声を上げながら、3人から遠ざかっていく。3人はただ呆然と立ちつくしていた。涙の姿が夕焼けに呑み込まれてしまつまで……。

涙の姿が視界から消えたその瞬間、奈々が声を震わせながら小さく呟いた。

「……い、今のつて、どういって、意味ですか……？」

京子は首を大きく横に振って、頭を抱えてその場に蹲つた。体が小刻みに震えている。あまりの恐怖で体が動かなくなってしまったのだ。

「るー、おかしいよ……！　一体どうしたかったの……？」

瑠夏は震えながら両手で自分の髪の毛を驚撃みにして、怒鳴り声をあげた。

「もういいじゃん……！　雪山先輩は居なくなつた。それでもう十分すぎるんじゃないの？　それなのに、今度は美衣子をこの世から消してやるつていうの？」

3人は小さく集まり、周囲に聞こえないくらいの小さな声で囁きあつた。

「るーさんは異常ですー！　奈々たちはもう、ついていけませんよー。『ねえ、瑠夏。私たち、このまるで一緒にいて大丈夫なの……？』」

「そんなこと訊かれたって、あたしにだつてわかんないよー。大体、ちょっと美衣子をいじめれば、るーの気も済んでまたすぐにみんなで仲良くなれると思つてたんだもん！　こんなにすぎたことまでするなんて思つてなかつたからあたし、……協力、したのに」

今まで美衣子にしてきたことが、突然後悔と罪悪感に変わり、3人に重くのしかかってきた。京子は泣きじゃくり、奈々は口を閉ざしたまま蒼ざめている。瑠夏は堅く閉ざしていた口を、静かに開い

た。

「……あたしたちが、今、するべきこと、って……なんだと思う?」

京子と奈々は顔を上げて、2人で顔を見合わせた。

「……するべき、こと?」

「……美衣子に對して……あたしたちが今からでも、出来ることひつて……なんだと思う?」

「……」

3人はあることを決意し、火葬場へ続く道を走り出した。

第45話 単独行動

3人と別れた後、涙は商店街を歩いていた。左手で髪の毛、そして右手で携帯電話を弄りながら。

ふと前方を見ると、深く帽子を被つた太めの男が辺りを見回しながら此方へ歩いてくるのが見えた。その男は涙の真横をそそくさと通り過ぎていく。

涙は横目でその顔を確認し、ふふつ、と小さく笑った。

携帯電話を閉じて、その男の後ろへと駆けていく。そして、男の背中を、何度も優しく叩いた。

「ねえ、おじさん」

男は酷く慌てた様子で振り返った。それは、嫌というほど見覚えのある、あの太った男の顔だった。

「初めまして。あたし、美衣子の親友なんだけどさ、……突然だけど、聞くね。……おじさん、美衣子の家に火をつけた犯人でしょ？」

男は慌てて逃げようと身構えた。が、しかし涙はにつこつと笑つて首を横に振つてみせた。

「あ、大丈夫よ。あたし、おじさんを警察に連れて行こうなんて思つてないから。ねえねえ、そういうえば、雪山先輩を線路に突き落としたのもおじさんだよね？ あたし実はあの駅にいたんだあ。だからおじさんの顔も記憶しちやつてるんだよね」

「うん……ほ、僕が落としたんだ……。でも、実はそのせいで警察に追われて困つてるんだ」

「ふうん……。じゃあ警察に捕まる前に、美衣子から預かつた伝言

伝えなくつひやね

涙のその言葉に、男の瞳が輝いた。本当は美衣子に伝言など預けられてはいながら、涙はこれから綿密に練つた“ある作戦”を実行しようとしているのだ。

(その作戦にはこいつの協力が必要不可欠だもんね……。この辺りをつらうらしてゐるつて“裏板”で情報があつたから来てみたけど、こんなに早く接触できるとは思つて無かつたわ)

「……ね、おじさん。教えて欲しい?」

「うん、是非お願ひするよ」

「んつと……教えてあげても別に良いんだけどさ、今こへら持つてる? 財布の中身次第で教えてあげる」

その言葉を真に受けたらしい男は、慌てて汚いポケットから財布を取り出した。そして、その財布を丸ごと涙に手渡した。財布は大きく膨れている。小銭の擦れあつ音もした。……大分大金が入っているらしい。

「え、これ全部貰つて良いの?」

「うん。全部いいから、早く教えて!」

さやあ嬉しー! とワザとらしく黄色い声を上げた涙は、すぐさま、傍の公園のベンチを指差した。

「じゃ、あや! やつお話をよつか

* * *

公園のベンチに腰掛けた涙は、男に“嘘で固めた伝言”を伝え始めた。

「おじさん、こないだ雪山先輩を線路に落としたでしょ？ それで先輩死んじゃってさ、美衣子、かなり嬉し泣きてた。あのおじさんに、本当にありがとうって言いたい、ってさ。でも一度携帯が壊れちゃってて、伝えられなくて困つてたよ」

男は鼻息を荒くしながら田を輝かせていろ。あまりにも単純すぎて、涙は小さく鼻で笑つてしまつた。

「……と、まあここまでが伝言なんだけどね。財布ごとくれたお礼に、秘密の事を教えてあげる。でもこの事を言つたつて事は、美衣子には内緒だよ？」

「え？ ……う、うん。何だい？」

疑つ事すらしてしないオヤジに向かつて、涙は更に口から出任せを言い続ける。

「お葬式が済んだ後、『美衣子はおおじさんと付き合つんでしょ？』って聞いてみたの。だけど美衣子はね、『ううん、できる限り利用したら捨てるつもり』……って言つてたの。いくら親友でもあの発言は酷いと思ったから、一応、報告しておぐね」

「……み、……美衣子ちゃんが、本当にそんなことを言つていたのかい？」

「うん。これは事実よ。だって、ちゃんとあたし田の前で聞いたし」「い、いくら美衣子ちゃんとしてもその発言は許せないよ。僕の事を散々利用して、警察に追われるようになつたら捨てるつて事？」「うへん……まあ、そういう事なんじゃない？」

表では深刻そうに話してはいるが、内心で涙は笑いを堪えるのに必死だった。すっかり涙の言葉を信じてしまっている男は、悔しそうに唇を噛み締める。それを見た涙は心中で飛び跳ねて喜んだ。

……計画は順調に進みつつある。

「……美衣子ね、家が全焼して今まで入院してたんだけど、今日からアパート暮らしなんだって。しかも学校があるからアパートには一人暮らしらしいのよ。両親はちょっとだけ離れた祖母の家に泊まるんだってさ。ねえ、おじさん。……これってチャンスじゃない？」

涙はそっと男の手を握つて、男の顔をじっと見つめた。男は涙の言つている言葉の意味が分からないらしく、首を傾げている。涙は男の耳に唇を寄せ、小さな声で、妖しくこう囁いた。

「美衣子を自分のものにしたいって思わない？ 今ならあたしも協力してあげるよ？」

よつやく涙の言葉の意味を理解したらしい男は、眉を顰めた。

「でも……そ、それは流石にまずいんじゃないかな……。犯罪になっちゃうし……」

「何を今更！ あいつのせいでおじさんは殺人犯なんだよ？ このくらいの報復、当然でしょ！」

男は涙の言葉を聞き、暫く躊躇つたが、小さく頷いた。

涙はそっとほくそ笑み、心の中で美衣子の傷ついた表情を思い浮かべた。ずっと頭に描いてきた美衣子の絶望の表情が、だんだんリアルになっていく。この計画が成功すれば、夢にまで見た美衣子のあの表情を現実で拝むことが出来るのだ。

「それじゃあね、あたし、ちゃんと計画考えてきてあげたの！ 今から教えてあげるから、ちゃんと最後まで聞いてね？ ……」「

涙は、男に自分の考えた作戦を全て話した。男は必死に涙の計画に耳を傾けている。作戦を話し終わり、涙はにつこりと微笑んで、ちゃんとこの計画を実行するように釘を刺した。

「じゃあ今夜、あたしの言つたとおりに行動してね？ そうすれば絶対に失敗しないから。……だから今夜は頑張ってね！ あたしも応援してるから」

メールアドレスと携帯電話の番号を交換した2人は、“計画”を隅々まで頭の中に叩き込んで 別れた。

計画の実行日は今夜。もしも涙の目論見が成功すれば、美衣子の心はきっとこの上なく傷つくだろう

火葬場で、美衣子は再び涙を流していた。煙突から白い煙が上へ、上へと昇つていくのが見える。それを見て涙を流さないはずが無かつた。我慢できるはずが無かつた。大切だつた人が、たつた1人の、支えになつてくれた人が、本当に姿形もなく消えてしまつたのだ。あの力強い腕も、整つた顔も、大きな背中も、全部消えてしまつたのだ。もう一度と見ることはできない。記憶の中でしか思い出すことが出来ない。ほんの1週間前まではすぐ隣にいたのに、今はどこにもいない。まだ若い美衣子にとつて、それは心の中に抱え切れないので悲しみだつた。

涙で濡れた砂。雪山の為に流した涙。……でもその涙を拭ってくれる愛しい人は、もう居ない。

その濡れた砂に、誰かの影が映つた。目線を上に上げた美衣子は、驚いて両手を見開いた。

「美衣子」

そこに立つっていたのは、瑠夏、京子、奈々の3人だつた。いつも涙と共に美衣子をいじめていた、あの3人だつたのだ。あまりの驚きで、涙が止まつてしまつた。言葉を発することの出来ない美衣子の手を、突然瑠夏が握り締めて、泣き始めた。

「ごめんね。美衣子……」

「え、え？」

「るうの事、ちゃんと止められなくて……、雪山先輩が、こんなことになるなんて、思わなくて……」

「……え……一体、どうこう……こと？」

「「「めん……つ「めん、美衣子……！」」

美衣子は口をあんぐりと開けたまま、皿を白黒させた。今まで敵だつた人達が突然、涙を流しながら自分に謝っているその光景が信じられなかつた。

「み、美衣子、どうしたの？　この子たちは？」

美衣子の母がやつてきて、首を傾げながらそつと云つた。怪訝そうな顔をして3人を見つめている。美衣子は慌てて笑みを浮かべ、母に駆け寄つた。

「あ、えっと、私のお友達だよー。あのね、お母さんはお婆ちゃんちに帰つていよいよ？　私はこの子たちと一緒にアパートに帰るから」「……そう？　わかつたわ。それじゃあ……。お母さん帰るわね。今日は、ゆっくり休むのよ？」

「うん！　わかってる。ばいばい！」

美衣子の母は心配そうに、何度も後ろを振り返りながら去つていった。母が視界から居なくなつたのを確認した美衣子は、急いで3人のもとに駆け戻る。

「ええと、3人とも、どうしたの？」

「本当にじめん……。ずっと苦しめたよね、傷つけたよね」

瑠夏の後に続いて、京子と奈々も泣きながら美衣子に深々と頭を下げた。

「あたし、友達の事絶対に傷つけないよつてひつて心の中で決めてたのに……。それなのに、るうの為つて言い訳作つて美衣子を苦しめた。あたし最低だよね……『じめんね……』」

「ヴァーチャルの世界でだつて、いじめはいけない事だつて、決まつてるのに……。奈々、知つてたのに、……ちゃんと、知つてたのに……奈々は美衣子さんをいじめました。沢山傷つけました……。許してもらえないもしようがないです。でも、言わせてください。ごめんなさい……」

大声を上げて、ひたすら美衣子に謝罪を続ける3人。3人の気持ちは真っ直ぐで、とても嘘をついているように見えなかつた。美衣子は黙つて頷き、そつと顔を上げて小さく微笑んだ。

「……ねえ、3人とも。こんなところじゃなんだから、家に来ない？ お茶も出すから」

第47話 アパートにて

「はい、お茶入ったよー。」

美衣子はお盆に乗せたお茶を、（自分の分も含させて）4つテーブルに置いた。ずっと黙り込んでいた3人は、そのお茶にそっと手を伸ばした。

「ありがと」

「ありがとう」

「……頂きます」

3人は美衣子に向かって深く頭を下げ、ゆっくりとそのお茶を飲んだ。湯飲みを元の場所に戻した瑠夏が、再び大粒の涙をこぼした。それを見た美衣子は酷く慌てて瑠夏の顔を覗き込み、首を傾げる。

「大丈夫？」、「ごめん、ちょっと熱かったかな。タオル取つて来るね」

「……ううん、大丈夫。平氣……」

お茶の温度が熱かつたせいなんかじゃない。美衣子の淹れてくれたお茶はまるで美衣子そのもののようにすくなく温かくて安心して、何故か涙が零れ落ちてしまつただけ。

泣き腫らした目を美衣子に向けた京子は、深々と頭を下げた。

「本当にごめんね。謝つて許されることじやないけど、今までイジメなんてしてごめん」

「そ、そんな、別に、大丈夫だよ。……気にしないから」

美衣子は明るい笑顔を取り繕つて微笑んだ。……本当はたくさん傷ついた。何度も挫けそうになつた。でも、こんなに必死になつて謝る3人を見ていたらそんな事どうでも良くなつてしまつた。奈々が美衣子の傍にちょこちょこと近寄ってきて、泣きそうな顔をして深く頭を下げた。

「あの……、雪山先輩の事、『愁傷』までした。先輩にも……きちんと謝りたかったです」

雪山、という言葉を聞いた美衣子が押し黙り、しんみりとした空気が流れる。すると、瑠夏は突然何かを思い出したような顔をして、ぽんと膝を叩いた。

「ねえ美衣子、これからさ、一緒にるうをいじめようよ。るうが美衣子にしてきたこと、全部やり返してやるわよ。あたしたちも協力するから、ね？ 少し懲らしめてやらなくちゃ」

しかし、美衣子は悲しげな顔をして、ふるふると首を横に振つた。瑠夏たちが顔を見合させて首を傾げる。美衣子はそつと顔を上げて、静かに口を開いた。

「確かに、私、るうちちゃんとに虐められて沢山傷ついたよ。怖かつたよ。でもね、元はといえば私が悪いんだよ。雪ちゃんに付き合つてること言えなかつた、私の責任。私が弱かつたせいで、るうちんを傷つけちゃつたことが原因だから。……それに、虐められていても、あの頃の私には、雪ちゃんがいた」

涙を溜めた瞳を瑠夏たちに向け、美衣子は涙声で叫んだ。

「だけど、るうちんには誰が居てくれるの？ 親友の瑠夏ちゃん

が傍に居なきや、るうちゃん一人ぼっちになっちゃうよ。そしたら
物凄く辛いよ？ 悲しいよ？ 苦しいよ？ 私と同じ気持ちを、る
うちゅんに味わって欲しくない。それに、もう私は瑠夏ちゃんたち
に人を傷つけて欲しくないの。だから、お願ひ。もう一度とそんな
こと、言わないで……」

美衣子の澄んだ瞳から、涙が零れ落ちた。それを見た3人はもう
何も言葉を発することが出来なかつた。

第48話 一度と訪れぬ日々

「お邪魔しました」

瑠夏、奈々、京子の3人が声を合させて、美衣子に向かって深々と頭を下げる。美衣子はその態度に驚き、慌てて両手を激しく横に振った。

「や、そんな気を遣わないでいいんだよ？　えっと、今日はありがとう。良かつたらまた遊びに来てね」

「うん。此方こそありがとうございました。あ、お茶ご馳走様でした！」

「またるうが何かしそうになつたらあたし達が全力で止めるから。これからはあたし達もこつそり味方についてあげるから安心して！」それじゃあ、あたし達帰るね……、って、あれ？　奈々、何してんの？」

奈々は玄関の靴箱の前で、なにやら携帯電話を弄つてゐるようだ。右手に自分の携帯電話、そして左手には、美衣子の携帯電話。奈々は少し俯き加減のまま、小さな声で自分が今やつていることの意味を説明し始めた。

「奈々は、るうさんがこのまま黙つてると思えないんです。だから、もしもの事があつた時のために、奈々たちの電話番号を美衣子さんのアドレスに送つておこうと思いまして……」

「あ。それ良い考え方かも。じゅ、あたしも送るね～」

瑠夏の電話番号は登録済みだが、奈々と京子の番号は無い。少しずつ仲間が増え、美衣子は少しだけ心強さを感じた。

「よし、それじゃあ、送信……つと」

京子と奈々がほぼ同時に送信ボタンをクリックした。何秒かして、メール受信の音楽が軽快に流れ出した。その受信音を聞いた美衣子は、一瞬体を強張らせた。以前あの男からメールが来た時の事を思い出してしまったのだ。

（やだな、気持ち悪い。早くメールの着信音変えなくちゃ）

美衣子は一人で深呼吸をして気持ちを落ち着かせた。

（……大丈夫、これはあの男からのメールじゃない。大切な仲間からのメッセージ。……だから、大丈夫）

そう自分に言い聞かせて、やはり怖くてメールBOXを開くことが出来ない。

「どうです？ 届きましたか？」

いつまでも携帯電話のボタンを押そとしない美衣子を見て不安に思ったのか、少し躊躇いがちに、奈々がそう訊いてきた。美衣子はそれを聞いて我に返つてボタンを押し、笑顔で首を縦に振った。

「う、うん。届いた！ ありがとう、奈々ちゃん。これでいつでもみんなと電話できるんだよね！ 本当にありがとうございます。私ね、明日からは学校にもちゃんと行くし、るうちちゃんときちんと話する。また5人仲良く過ごせる日が来るといいね……」

瑠夏たちは笑みを浮かべて、大きく頷いた。そして玄関の扉を開け、美衣子に向かって手を振った。

「それじゃあ、ばいばい！」

「また明日、学校でね」

「さよなら。……あ、もし何かあれば電話くださいね。待つてます、から」

3人の笑顔が扉の向こうに消えてしまっても、まだ美衣子は手を振っていた。微笑んだ美衣子の頬を、一筋の涙が伝う。……それは嬉し涙だった。初めてあの3人と心を通わせることが出来たことに、美衣子は堪らなく感激したのだ。

(ねえ雪ちゃん、大丈夫だよ。雪ちゃんがいなくなっちゃっても私、一人じゃなかつた。いつかるっちゃんも一緒に、5人で仲良く出来る日が、きっと来るよ。だから……ねえ、雪ちゃんも応援していくね？ ずっと見守つっていてね？)

美衣子は瞼を擦りながら窓の外を見上げた。空には沢山の星がきらめいている。

「雪ちゃん、……おやすみなさい」

窓を閉め、布団の方へと向かつ。そしていつもどおり布団に包まつて幸せな気分に浸つた。

美衣子はまだこの時気づいていなかった。この後、自分の身に何が起こるのか。そして、5人で仲良く過ごす日なんてものは、もう一度と来るはずの無い未来だということを。

第49話 忍び寄る影

月が高く昇った真夜中、マンションの階段をのぼる一つの影。無論、誰一人として異変に気づく者は居ない。辺りにはただ青黒い闇が広がっているだけだ。

階段を一段上るにつれて、その人物の口元が緩んだ。鼻息を荒げて、にやにやと笑う。どうやら男性らしい。その男は、あの男だった。そう、美衣子の家を燃やし雪山を殺害した、あのストーカー男だったのだ。

美衣子の部屋の前で立ち止まつた男は何の躊躇いも無くドアノブを捻つた。先程からずつとアパートの前で張り込みし、しつかりと見ていたのだ。美衣子があの3人を見送つた後、鍵を掛け忘れて部屋へと戻つた所を……。

「本当は鍵、壊すつもりだつたけど……手間が省けちゃつたな……。美衣子ちゃん、今夜……君と僕は結ばれるんだよ……ふふ、ふふふ……」

怪しい言葉を呴きながら、男は美衣子の部屋へ進入した。ドアを慎重に閉め、鍵を掛ける。そして、部屋の真ん中で眠るお姫様に、怪しく微笑みかけた。

「…………ちゃん…………」

美衣子は夢と現実の狭間で、妙な声を聞いた気がした。

「…………ちゃん…………」

そしてその声は、だんだんはっきりと聞き取れるようになつてい
く。

「…………子ちゃん」

その辺りでハツとした美衣子は、勢い良く布団から跳ね起きた。

「つー」

美衣子は喉の奥から小さく悲鳴を上げ、震える瞳を暗闇の向こうへ向けた。……きらりと光る物体。よくよく目を凝らしてみれば、それは鋭利なナイフだった。美衣子の方へナイフを向けたまま、ゆっくり近寄つてくる人物。

暗闇に目が慣れその顔を確認した時、美衣子は大声で悲鳴を上げそうになつた。公園で待ち伏せしていた男。家が火事になつた時居た男。あの恐ろしいストーカーの男。その男が今、美衣子の目の前に居たのだ。男は美衣子の肩に手を回し、ナイフを首元に突きつけた。

「う、…………声をあげたら、刺すよ？」

耳元で発せられた低い声に、美衣子は震え上がつた。少しづつ身を捩り、何とか男から逃れようとする。

しかし、男の力は強く、振り解く事が出来なかつた。

「や、やめ…………離してください…………つー、な、なんのつもり、です
か…………？」

美衣子は震える声で、なるべく男を刺激しないように、小さな声

で拒否した。が、しかし、狂気に満ちた男の瞳は更に輝きを増していく。

「今夜、僕と君は結ばれるんだ。……つ、嬉しい、でしょ？　君が嫌つてたあいつも、僕が消してあげたよ。だから、ね？　僕と……」

美衣子は激しく首を横に振った。一体、この人は何を言つているんだろう。この男の言つている言葉の意味が全く分からない。もしかして本格的に頭がおかしくなってしまったのではないだろうか？

「いや！　離して！」

美衣子は裏返つた声でそう叫び、傍に置いてあつた鞄を男に投げつけた。男が一瞬怯んだ隙にその手から逃れ、大急ぎで玄関へと向かう。鍵を開けようと必死になつて弄るが、暗闇のせいでどこに鍵があるか分からぬ。

「…………っはあ、はあ、やだ……鍵…………っ」

涙声で扉を弄り、そこで、美衣子はハツとした。ここはアパートだ。大声を上げればきっと誰かが来てくれる。

……しかし、思いついたのが遅すぎた。男が飛びかかり、美衣子の口の中に布きれを押し込んで、その上からガムテープで蓋をしてしまつた。これでは声が出ない。

美衣子は渾身の力を振り絞つて必死でもがき暴れるが、男の力に敵うはずも無かつた。組み伏せられてしまつた美衣子はテーブルの下に携帯電話があるので気づき、それに手を伸ばして、慌てて瑠夏の電話番号をプッシュした。しかしそれに気づいた男が携帯電話を遠い玄関先へと飛ばしてしまう。

必死に狭い室内で逃げ惑つたが、やはり無駄だった。壁際に追い

詰められ、美衣子は涙目のまま首を横に振る。

„...הַיְלָדִים הַמִּתְּנִיחָה...!“

ぐぐもつた声で叫び声をあげて身を捩る。男の手が美衣子に伸びてきた。震える美衣子は両目を硬く閉じて首を横に振り続けた。抵抗しながらも、少しづつ力が抜けていくのを感じた。

第50話 織れ

遠くから聞こえてくる鳥の声を聞いて、氣を失っていた美衣子は目を覚ました。

美衣子は口ボツトのように機械的な動きをしながら起き上がる。そしてゆっくりと口に貼つてあるガムテープを剥がし口の中に入っていた布を取り出すと、口から息ができるようになった。

吸つて、吐いて、そしてまた大きく息を吸い込んで、吐く。少しの間それを繰り返した時、ふいに大粒の涙が込み上ってきた。

昨日の出来事が悪夢のように、美衣子の脳裏に鮮明に浮かび上がる。……いや、むしろ夢だつたらどんなに良かつただろう？

しかし、あれは夢ではなく現実だつたと認識させられる証拠が、部屋の中に大量に残されていた。

美衣子が抵抗した時に倒してしまった花瓶が布団の上で粉々に割れてしまっている。部屋中を逃げ回ったときに躓いてしまったゴミ箱が倒れて、中から大量の紙屑が零れている。

言葉に出来ない程に屈辱的な気分だった。……死にたいとさえ思つた。どうして殺してくれなかつたのだろう？　こんな気持ちになるくらいなら殺された方がよっぽどマシだつた。

美衣子は両手を交差させて自分の肩を抱きすくめた。肩を震わせ、声をあげず静かに涙を流した。

今大声をあげて泣き叫んでも、誰も助けに来てはくれない。……

昨日の夜中にどれだけ暴れても、誰も助けてくれなかつたからだ。こんな時、美衣子の脳裏に映るのは雪山の顔だつた。もういらないのに、助けてくれるはずが無いのに、そう考へると凄く悲しかつた。こんな時こそ、彼に傍に居て欲しいのに……、もう彼は、この世にいない。

全ての悲しみが積み重なつて、美衣子の心の中に大きな音立て流れ込んでいく。美衣子の心はもう限界に達していた。正直、こ

れ以上耐えられる自身が無かつた。

昨夜、あの男が話していた言葉の内容を思い出した美衣子はようやく全てを悟った。自分の家に火をつけたのはあいつだ。そして雪山は、あいつに殺されたのだ。あいつの勝手な憎しみと妬みによつて、雪山は殺されてしまった。あいつにとつてそれは、いつも呆気ない仕事だつただろう。美衣子を手に入れるためならば、どんな非道な事だつて簡単にしてしまつあいつなのだから。

「身勝手すぎるよ。酷すぎる。どうして私たちなの？　どうして、どうして私たちばかりこんな目に遭わなくちゃいけないの？」

誰に問いかけるわけでもなく、美衣子は繰り返しそう呟いた。そのたびに、美衣子の瞼の端から涙の粒が零れ落ちていつた。

どれくらいその状態で泣き続けただろう。

朝日が昇ったのか、突如陽の光が美衣子の体を優しく包み込んだ。泣き腫らした目を、昨日閉め切られたままのカーテンに向ける。やけに明るい光だつた。今日はきっと雲ひとつ無い青空なのだろう。自分の気持ちと全く正反対の天候。神様からの、皮肉のプレゼントだと思った。

美衣子はのろのろと行動を開始した。昨晚の騒ぎで散らかってしまった部屋を元通りに片付けることにしたのだ。少しの時間でも、何かしていないと気が狂いそうだった。

なんとか部屋を元通りに片付け直した美衣子はすぐさま服を脱いだ。着替えを済ませた後、昨日着ていた服を迷わずゴミ箱へ入れる。……嫌な思い出を消し去るための手段が、それしか思いつかなかつたからだ。

壁にかかっている時計を確認すると、気づかぬうちに10時を回っていた。部屋を片付けた後、暫くボーッとしている間に時間が過ぎてしまつたのもshireない。

今日は学校に行きたくない。いや、行けない。

もし今学校に行って涙に嫌がらせを受けたら、もう耐えられない気がする。すぐに女子トイレへ駆け込んで首を吊つてしまいそうな予感がする。

美衣子はテレビの電源を点け、座布団に腰を下ろした。……画面に映し出された番組は毎朝観ているニュースだった。リモコンを持った美衣子の手が止まる。

病院で見たあの日のニュースを思い出してしまったのだ。あの時のアナウンサーの淡々とした喋り方が、耳にこびりついて離れない。流石に地上波で彼の死の瞬間を報道するような真似はしていなかつたが、それでも何故か美衣子の脳裏には雪山が電車に撥ねられるシーンが、まるでビデオか何かを再生している時のように鮮明に映し出された。

走つてくる電車。そこへ押し出される雪山。彼はこちらに手を伸ばす。助けてくれと大声で叫ぶ。しかし美衣子は動けない。足が動かない。立ち竦む美衣子の目の前を電車が通り過ぎていく。濃い赤が、美衣子の頬に跳ねた。

脳内のビデオ再生が終了した瞬間、美衣子は大声を上げて泣き叫んでいた。もうこの世にいない彼に向かつて、何度も謝り続けた。せめてあの時自分があの場にいれば。彼の手を掴んで引っ張つてあげる勇気があれば。少しは何かが変わっていたかも知れない。

あの時雪山を引き止めてさえいれば。どうしても傍に居て欲しいと懇願さえすれば。雪山はまだ美衣子の隣に居たかもしれない。でも、いくら悔やんでももう彼はいない。どこを捜しても、どこへ行つても、もういない。

第5-1話 繋がり

その時、机の下で携帯電話が鳴り響いた。戸惑いながらも携帯電話を拾つて、誰からの電話か確認する。画面には、【井上 瑞夏】と表示されていた。電話に出るのを躊躇つた美衣子だったが、意を決して通話ボタンを押した。

「……もしもし」

『あ、もしもし！ 瑞夏だよ。……美衣子、元気？ 今日学校來るつて言つてたのに来てないから、ちょっと心配になつちやつて』
「あ……えつと、」

一瞬、美衣子は考えた。昨夜の事を話すべきだらうか？ 話せば少しは楽になれるだらうか？

しかし、やはり言えない。あんな屈辱的な思いを、思い出したくない。だけど……迷つた末、美衣子の口から出た言葉は、

「ちょっとだけ、調子が悪いんだ。風邪かな？ だから今日は学校行けなくなつちゃつた。ごめんね」

ところ、口からでまかせだつた。すらすらと自分の口から嘘が飛び出した事に驚き、美衣子は僅かに両手を見開く。それと共に、自分の心の弱さにつくづく腹が立つた。

その言葉を信じたらしい瑞夏は、いつもどおりの明るい声で会話を続けた。

『そうなの？ 残念だけど、しかたないね。……お大事にね』
「うん。……あり、がと」

何故だか分からぬけど、急に涙が溢ってきた。止めようと思つても止まらない。結局美衣子は電話を持ったまま嗚咽を洩らしていだ。それに気づいたらしい瑠夏が、電話の向こうで慌てた声を上げる。

『美衣子！ 大丈夫？ 泣いてるの？』

美衣子は慌てて電話を持ったまま首を横に振り、更に嘘を重ねた。

「え、ち、違うよー。泣いてなんて、ないよ？ で、電波……悪いのかもしないね。とり、あえず、切るね。……ば、ばいばい」

瑠夏の返事も聞かず美衣子は一方的に電話を切り、もう電話がかってこないよう、携帯電話の電源もオフにした。

その直ぐ後、美衣子はその場に膝から崩れ落ちた。今の美衣子には、声にならない叫び声を上げながら泣き続けることしか出来なかつた。

第52話 喪失感

それから20分ほど経過したが、涙は止まる気配が無かった。泣き過ぎて胸が苦しい。息が出来ない。

しかし泣き続けて良かつた事もあつた。……何故突然涙が出てきたのか、その理由が分かつたのだ。

美衣子は雪山に逢いたくなつたのだった。しかしそれが叶わぬ願いだと知つてはいるから悲しくなつた。今まで彼が死んでから何度もそんな感情に蝕まれそうになつたが何とか耐え抜いてきた。しかし、昨夜の辛い出来事と先程の瑠夏の優しさが絡み合つて、美衣子の気持ちを繋ぎとめていた“何か”が剥がれ落ちてしまった。

どうしても彼に逢いたい。何としても逢いたい。今じゃないとダメなのだ。今逢わないと意味が無いのだ。

その思いが美衣子の体を動かした。美衣子は台所の引き戸を開けて包丁を取り出す。きらりと光る包丁の刃に、美衣子の疲れきった顔が浮かんだ。

それを見た美衣子は軽く微笑む。包丁の刃に映る美衣子も同じようく微笑む。美衣子は声を出さず、口だけをこう動かした。

「雪ちゃん、今すぐ逢いに行くからね……」

そのまま包丁を自分の心臓目掛けて突き刺そうとしたが、あと少しのところで手が止まってしまった。どうしてなのか理解できなかつた。自分の体なのに、言う事を聞いてくれない。

死にたいはずなのに、心の奥ではそれを否定しているとでも言つただろうか？ 死に対する恐怖？ それとももつと別の理由があるのだろうか？

いくら考えても答えは浮かんでこなかつた。ただ、美衣子の手は止まつたままだ。

* * *

そのまま、時間が流れていった。何秒、何分、……いや、何時間
かもしれない。とても長い時間が過ぎたような、そんな気がしてい
た。

突然部屋の扉が勢い良く叩かれたのは、その時だった。

「…」

恐る恐る扉に近づき、片耳を扉に押し付ける。すると、

「美衣子！ 開けて美衣子！」

瑠夏と京子の声だった。美衣子は暫く躊躇つた後、ゆっくりと扉
の鍵を開けた。その瞬間、扉が開いて、3人が慌てた様子で駆け込
んできた。

「3人ともどうしたの……？ が、学校は？」

「電話の時、様子がおかしかったから……」

「つていうか……それどころじゃないでしょー 何やつてんの！」

京子の驚いたような声を聞いて、美衣子はハツとした。

(そうだ、今私は死のうとしていたんだ)

「美衣子、早くそれ離して。危ないから……」

京子が諭すようにそう言いながら美衣子の方へと近寄って来た。
が、しかし美衣子は強く首を横に振つて京子を強く拒む。

「い、嫌だよ！ もう、……もう耐えられない。」そのまま生きてたつて、親友にいじめられて、嫌な思いをするだけ……。もうダメなの！ 耐えられない。雪ちゃんに逢いに行かせて！」

「そんなの……」

「私には雪ちゃんしかいないの！ それを奪ったのは……私の幸せを奪ったのは……他の誰でも無い、あなたたちとるうちゅちゃんでしょう！」

もう瑠夏たちの事は大切な友達だと思つていいはずなのに、上手く感情をコントロールできない。美衣子は自分への苛立ちとぶつけあてのない悲しみで大粒の涙を流した。

「私が生きていて誰が喜ぶつて言つの！ るうちゅんは私が死んだら喜ぶよ？ あなたたちだつてそりでしょ？ 私が死んだら、……つ私が死んだら嬉しいでしょ！」

暫く美衣子の言葉を黙つて聞いていた奈々が、突然、美衣子の頬を強く打つた。乾いた音が部屋中に響き渡り、美衣子は一瞬両目を瞑つて悲鳴を上げる。

「な……何するの……？」

涙声で呟く美衣子に、奈々はいつものように小さな声で、淡々といひつ囁つた。

「私たちは美衣子さんをいじめていました。ずっと、酷い事ばかりしてきました。でも、美衣子さんが居なくなつて喜んだりしません。人の命を奪うなんて……そんな事は、してはいけないことです。あなたが死ねば、あなたは自分自身を殺した事になるんですよ？」

…殺人犯になるんですよー。」

両目を見開いたままの美衣子の瞳から、涙が零れ落ちていく。その零はフローリングにぱたぱたと落ちていった。殺人犯、という奈々の台詞が強く耳に残り、頭の中をぐるぐる渦巻いている。

（私が私を殺せば……私はあの男と同類……雪ちゃんを殺した……あいつと同じ……。だけど私は……私……は……）

次の瞬間、美衣子は包丁を大きく振り上げた。

第53話 決断

美衣子の脇腹に包丁が突き刺さり、血が滴り落ちた。それを見た瞬間、京子は大きな悲鳴をあげ、両手で顔を覆つた。

「み、美衣子！ 大丈夫？」

瑠夏が慌てて駆け寄り、美衣子の傷口を診る。……出血は大分酷い。だが、深く刺してはいないようだ。それを見て少し安心した瑠夏はすぐさま美衣子の傷口を止血することにした。部屋の隅に置いてあつた救急箱を取ってきて、中から消毒薬とガーゼ、包帯を取り出す。

美衣子は泣いていた。脇腹を押さえ、血まみれになつた自分の手を見つめて。

「痛い……痛い、痛いよお……」

「美衣子、落ち着いて。大丈夫よ、大丈夫だから」

瑠夏は優しくそう呼びかけながら手当を続けた。涙目になつた京子は、その場に座り込んで大声で泣き叫んだ。

「「めんね……」「めんね美衣子……」あたしたちのせい……
つこんな事になつて……！」ほんとに……本当に……ごめんね……、
でも……でもあたし嫌だよ！ 美衣子が居なくなっちゃうなんて……
絶対に嫌……。……つお願いだから……お願いだからもつ……自
分を傷つけたりしないで！」

「京子……ちゃん……」

息もするのも苦しそうに、美衣子は京子の方を見た。

「……あたしたち、美衣子をいじめてた。だけど、もう美衣子にこんな事して欲しくないの……。美衣子がいなくなつたら寂しいよ。それに、凄く辛い……。雪山先輩がいなくなつて美衣子が悲しんでいるみたいに、私たちも凄く悲しい思いをするの」

美衣子の手当てをしながら、瑠夏が涙声でそう言つた。美衣子は視線だけを瑠夏の方へ動かして、ゆっくりと瞼を閉じた。

(私は……生きてて……いいの？　ねえ雪ちゃん……)

* * *

美衣子の手当てが済むと、京子は美衣子の片手を握りながら首を傾げた。

「ねえ、美衣子？　……あのさ、ビ�って……急に……自殺なんてしようとしたの？」

言葉を選びながら話しているのか、京子の視線は宙を泳いでいる。美衣子は暗い顔をして唇を噛んだ。……昨夜の出来事が鮮明に脳裏に浮かび上がる。

(話すべきなの……?)

……そんな疑問が、ふと頭の中に湧いた。

数分後、美衣子は顔を上げ、決意を固めたかのように3人の顔を見つめた。そして……震えながら、昨日の出来事を包み隠さず話し始めた。

あの男が、初めて見る人物ではないことも話した。3人は真剣な眼差しで美衣子を見つめ、黙つたまま話を聞いていた。

全て話を聞き終わった時、京子がテーブルを強く叩いた。大きな音。テーブルは衝撃を受けて大きく揺らいだ。京子の瞳には涙が溜まっている。ぶるぶると体を震わせながら、美衣子の両手を強く握り締めた。

「……あたしだって、そんな事があつたら、絶対死にたくない。きっとその男を恨んだよね。でも、大丈夫。ちゃんと解決できる。その男は放火犯であり、思い込みの激しいストーカーでもあり、殺人者もある……法的にも裁かなければならぬ男だよ。だから、警察に相談しに行こう」

「……」

「こまま野放しにしておくわけにはいかないよ。ね、美衣子？」

「…………うん」

美衣子が頷くのを確認した京子は、すぐさま立ち上がり美衣子の手を引いた。

「行こう、美衣子！　このマンションの直ぐ傍に、確か交番があるよね。そこではまずは相談してみよう。一緒に行つてあげるから、頑張つて全部話そう！」

第54話 交番

京子は先程からずっと椅子の上で何度も足をブリカセていた。これは京子が苛立つているときの癖である。京子が苛立つている理由は、この交番に居合わせた1人の警察官の態度にあった。

交番に駆け込んだ2人は、そこにいた警官にまず椅子をすすめられ、おとなしく椅子に腰掛けた。その警官は若い男性だった。……20代前半くらいだろうか。警官は嬉しそうに2人の目の前に座り、陽気に話し始めた。

「今ちよづ暇してたんだよ。ま、良かつたらお茶でも飲んでいきなよ」

「いえ、結構です。あの、それより話を……」

京子がそう断つたにも拘らず、警官はしつこかつた。強引に2人の言葉を遮り、お茶の用意を始めたのだ。

「遠慮せず飲んでいきなつて！」

コップが3つあるという事は、自分も飲むつもりなのだろう。その警官はお茶を淹れながら、聞きたくも無い身の上話を始めた。自分は最近入ったばかりの新米だ、とか、まだあまり事件を解決していない、とか、拳句の果てには上司に対する不満や愚痴も聞かされるハメとなつた。

そんな話を最初は適当な相槌を入れながら大人しく聞いていたが、とうとう痺れを切らした京子は机を力一杯叩いて立ち上がった。

「あの、この子が……色々あつて凄く困つてるんです！ 話を聞いてください！」

そう言いながら美衣子を警官の田の前に突き出すと、警官せまいりと横田で美衣子を見て、軽く頷き2杯田のお茶の用意を始めた。

「ああ、うそ。もうだつたね。じゃ、話して」

もう言しながらも警官はお茶の用意を続けていた。眞面目に話を聞こうとしない警官に、京子は苛立ちを隠し切れなかつた。

「あの、眞面目に聞いてくださいー。ほんとに困つてゐるんです」

必死にそう怒鳴るが、尙も警官は呑氣にお茶を淹れる手を休めようとしている。

「うそうそ。何かあつた？ 痴漢？ 引つたぐり？ 誘拐？」

あまりの軽さに、京子は呆れ果てた。

警官に向かって、怒りのこもつた溜息をワザとらしく吐く。しかし、警官はその怒りにすらも気づいていないようだつた。

「じゃあ、これから話してもらいますから、ちゃんと眞面目に聞いてくださいね！」

京子はそう言つて乱暴に椅子に腰掛け、美衣子に、全てを話すよう促した。美衣子は小さく頷き、大きく息を吸い込むと、小さな声で話し始めた。今までの惨劇を……恐ろしかつた自分の気持ちを、包み隠さず。

しかし、話の途中で警官の携帯電話が鳴り始めた。顔を見合わせる美衣子と京子の田の前で、警官はなんの躊躇いも無く電話に出て会話を始めた。

「はいもしまし、城嶋です。あ、木下先輩！　　あ、はい。はい……今ですか？　はい、……ええ、了解しました！　はい、すぐに伺いますので！」

電話を切った警官は、当然のように椅子から立ち上がった。そして、あるいは」とか出かける準備をし始めたのだ。これには流石の美衣子も、信じられないというような顔をして彼を見つめた。

「「めん、急用ができてや、ほんと「めん。あ、お茶は飲んだら流しおいといってくれれば良いから。そういうことだから、話の続きはまた今度聞くよ。それじゃあな」

警官が早いが、警官は交番を飛び出していった。

「な、なんなのあれ……？」

あつといつ間に消えてしまった警官。警官が走っていった方向を見つめて、京子は呆然と呟いた。

「…………」

美衣子は首を横に振り、小さく声をあげて泣きはじめた。

「み、美衣子、泣かないで……」「だつて……酷すぎるよ、「んなの……」「うん……そうね……、そうよね……」

京子は美衣子の背中を優しく擦りながら、唇を強く、強く噛んだ。

「……帰ろつ、美衣子」

2人は体を寄せ合いながら、重い足取りでマンションへ向かった。

第55話 着信

アパートに帰ってきた美衣子と京子から話を聞いた瑠夏と奈々は、あまりの驚きに硬直した。

「ちょ……つそれ本当?」

「……許せません。なんで警察官になれたんでしょう、その人」

2人の驚きと憎しみの入り混じった言葉に、美衣子は哀しげに微笑む。

「うん、でも、もういいんだ。誰も味方になってくれないもん。大人なんてそんなものだよね。子供の話なんて聞いちゃくれない。……良く分かったよ」

瑠夏と京子と奈々は困り果てて顔を見合させた。部屋の中は静まり返った。重苦しい空気。

その時、美衣子のポケットから流行の曲が流れ出した。それは美衣子の携帯電話の着うただつた。美衣子は首を傾げながら携帯電話を取り出した。

「……あれ、誰だらう? ちょっと待ってね、みんな。……はい、もしもし?」

耳に携帯電話を押し当てる瞬間、美衣子はハッと両手を見開いて蒼ざめ、涙目になった。異常に気づいた瑠夏が眉を顰めて美衣子に近寄る。

「ど、どうしたの、美衣子

「……っ」

美衣子は、瑠夏たちにすがりつくな顔を向けて、声を小さくして、答えた。

「い、今の声……、あの男の、声……っ」

それを聞いた3人も、顔を蒼ざめて、うそーと掠れた声で悲鳴をあげる。3人は声のボリュームを絞って、向こうに聞こえないよう話し合いを始めた。

「そ、それってまさか、夜部屋に侵入してきたっていつ……？」

「う、うん。……間違えるわけ、無いよ。……。絶対、あいつの声ー。」

「……美衣子、早く切って。それで、着信拒否ー。」

京子のその言葉に美衣子は一瞬頷きかけたが、すぐさま何かに気がついたように顔をあげ、首を横に振った。

「だ、だめ。ここで逃げたらまた同じことの繰り返しだもん」

「え……っじや、じやあ、どうするの……？」

美衣子はその問いかには答えず、再び携帯電話を耳に押し付けた。

「も、もしもし」

呆気にとらわれる3人をよそに、美衣子はそのまま会話を始めた。

「はい。……ええ、……。そなんですか、……わかりました、はい、……はい、それじゃ、ええと……今日の9時にお願いします。はい……それじゃあ、失礼します」

暫くして電話を切った美衣子は、3人に薄く微笑みかけた。

「けじめをつけるために、今夜、会う約束したの」

それを聞いた3人は大きく目を見開いて叫び声をあげる。

「……何言ってるの？ 美衣子、正気？」

「うん。今日の夜9時に、近くの坂道まで迎えに来るって」

「そ、そんなの、大丈夫なの？」

美衣子は微かに頷き、真っ直ぐ3人を見つめて頷いた。

「大丈夫だよ。私、頑張るから。危なくなったら連絡するね

同じ頃、あのストーカー男は携帯電話を握り締めたまま、歓喜溢れる表情を浮かべてだらしなく突つ立っていた。

「やつた……やつたぞ、美衣子ちゃんと、約束した……。しかも今夜……今夜だ……！」

ガツンポーズをして雄叫びのような声を上げたあと、男は再び携帯電話を持ち直した。ゆっくり電話番号を打ち、耳に当てる。呼び出し音が鳴っている間も男は妙にそわそわしていた。
5回目のコールで、相手が出た。

『もしもし?』

氣だるい女性の声。酷く不機嫌そうな声だった。その人物は喫茶店にでも居るらしく、電話の向こうは騒がしい。

「もしもし……、あ、あの、今時間いいかな、雲ちゃん

雲と呼ばれた人物は、うん。と答えて高い笑い声をあげた。

『計画成功したの？ それじゃ、これからあの駐車場に行くから。多分5分くらいで着くわ。そつちは？』
「10分もあれば行けると思うよ」

『分かった。じゃあね』

その人物はそう言って電話を切った。男はフィギュアでパンパンに膨れたりュックに携帯電話を押し込み、額に滲んだ汗を掌で拭き

ながら歩き始めた。

* * *

まだ昼間だとこいつのに猫の子一匹通らない、寂れた団地にその駐車場はあつた。

一台も車が停まつていない駐車場の隅に、地面に直に座り込んで大きく欠伸をしている少女がいる。そつ、その人物こそが“雲ちゃん”なのだ。

「雲ちゃん、」めん。少し遅れちゃつた
「あ、おじさん。やつと来たあ」

妖しく笑う彼女の本当の名前は、葉山涙。

涙は男に名前を聞かれた際、美衣子に自分が首謀者だとバレるのを防ぐ為、そして、何らかのトラブルに巻き込まれた時の為に偽名を名乗っていた。その偽名が「雲」だ。

涙は肩に掛かつた髪の毛を片手で払い除けながら、唇を浮かせた。

「ねえ、おじさん。上手くいったんでしょ、この間の夜

尋ねると、男は興奮して息を荒げながら大きく首を上下に振った。

「うん。雲ちゃんの立てた計画のとおりにやつたらバッヂリだつたよ！ あれで僕の魅力が分かつたらしい。わざわざライブの誘いをしたOKをくれたんだ！」

「…………え。ほんとに？」

涙は大きく目を見開いて絶句した。まさか美衣子が男の誘いを承諾するとは思つていなかつたのだ。あまりの恐怖で再び言葉を発せ

なくなるか、それとも血ちり命を絶つかと色々な妄想を膨らませて楽しみにしていたのに……。

思い描いていたどの予想にも当て嵌まらない反応だったが、こうなってしまった以上は仕方が無い。と涙は小さく舌打ちをした。

「そつか、良かつたね」

それだけ言つた涙は無表情になり、枝毛を探し始めた。男はそんな事を気にも留めず、満面の笑みを浮かべて笑う。その瞬間男の鼻の穴が開き、涙は顔を齧めた。

「うん、本当に嬉しいよ。これも雪ちゃんのお陰だよー。すげく感謝してるんだ。少ないけど、これ、お礼だよ」

そう言つて、男は茶封筒を涙に手渡した。

「……ああ、ありがと」

涙は不機嫌丸出しの声を上げてその袋を受け取り、親指と人差し指で中身を確認した。

「3万5千円？ 今回は少なめね」

「この間に夜に計画が成功したのが嬉しくて、ほとんどのお金を君に支払っちゃったから今回はちょっと少なくなっちゃったんだ」「あつや。じゃあ次もちゃんとお金、用意しておいてね。そうしたらまた美衣子の情報売つてあげるから」

「分かってるよ。次はきっと沢山支払うから、楽しみにしてて」

「はいはい。それじゃあ貰うものも貰つたし、あたし帰るから。おじさん、今晚はたっぷり楽しんできてね」

涙は男に手を振り、寂れた街の中に姿を消した。

第57話 恐怖のドライブ

あとも「うじきで春と呼ばれる季節が来る。それは言つても、まだ夜風は冷たい。美衣子は震える体を抱きすくめながら腕時計を確認した。あと少しで約束の時間になる。

時計の針が9時を指した瞬間、前方から黒い乗用車がやってきた。運転席の窓が開きそこから顔を覗かせたのは、

「お、お待たせ……み、美衣子ちゃん」

言つまでも無く、あの男だった。男は気持ちの悪い笑みを浮かべ、肉に埋もれた小さな瞳で美衣子を見た。その笑顔を見た瞬間足が震え始める。それは寒さのせいではない。今すぐここから逃げ出したいという衝動に駆られたが、必死に笑顔を取り繕つた。

「い、いんばんは
「いんばんは。……や、ああ、乗つて……」

乗れと言われても、すぐには勇気が出ない。美衣子は少しでも気持ちを落ち着かせようと会話を続けた。

「あ、あの、……す、素敵な車ですね」「そ、そ、うか、な、……み、美衣子ちゃんに、そ、う、言つて貰えて、……嬉しいよ」「えつと、今夜は、その、……ええと、月が綺麗ですね」「うん。でも、……ち、ちょっと、だけ、寒いね」「は、はい……そ、う、ですね」

話が途切れた。車のエンジン音が鈍く響くのを聞きながら美衣子

はとつとつ觀念し、助手席の扉を静かに開けた。

「それじゃあ、失礼します……」

「うん、どこぞどりや」

男の隣に座った美衣子は目だけを動かして車の中を見回し、美少女フィギュアが所々から顔を覗かせていくことに気づいてこつそり顔を顰めた。

「美衣子ちゃん、どこか行きたい場所はある?」

「いえ、ありません。お任せします」

「そう? わかつた。それじゃあオススメの場所を紹介するよ。」
「ふ、ふふ。ぼ、僕……こ、今夜は美衣子ちゃんと沢山話したいな」

その言葉に美衣子は身震いしたが、唇を強く噛んで顔を上げ、しつかりと頷いた。

「はい。私も貴方に話があります」

車はそのまま狭い道路に出て、暗闇の中を突き進んだ。

「み、美衣子ちゃんの話したい」とつて、な、何……かな?」

男の問いに、美衣子は「くくりと唾を飲み込んだ。今言つべきか些か迷つたが、意を決して口を開く。

「えつと、あの、その、」
「う、うん、何かな?」

美衣子は男の横顔を見詰めた後、少し強めに「いつ言った。

「私、貴方とお付き合いすることは出来ません」

「……。……え、……え？」

車内に緊迫した空気が流れた。呼吸さえも苦しくなりそうなその空気の重さに耐え切れず男の顔を覗き込んでみる。が、男が何も言葉を発さないので美衣子は心配になつた。

「あの、」

口を開きかけた時、男が突然車のアクセルを踏み込んだ。車は急激にスピードをあげ、急な山道を登つていぐ。美衣子は大きく両目を見開いて、窓の外と男の顔を交互に見た。何かとんでもない過ちを犯してしまつた氣分だった。

「な、な、なんで？　なんで、どうして僕と付き合えないの？」

ハンドルを持つ男の両手は震えている。美衣子は泣きそうになつた。

車はアクセル全開で坂道を登り続ける。美衣子は焦りながら窓の外を見詰めた。額に嫌な汗が滲む。

今、どこに向かっているのだろう。坂道を登つている事だけは確かだが、全く明かりが無い。

「あの、すみません、やつぱり……」

「」で降ろして下さ」と美衣子が言つよりも早く、車が急停車した。慌てて車から飛び出ると、そこには闇が広がっていた。後ろも前も、完全な暗闇。すぐ目の前に何があるのかすら解らない。

男が運転席の扉を開くと、ルームランプの明かりが洩れて明るく

なつた。男は車の扉を開けたまま運転席から降りて、口の端を歪め

「…………僕の好きな場所なんだ」

「……………」

「ど、隣町の……や、山奥、だよ」

山奥という言葉が得体の知れない恐怖を孕む。美衣子は少しづつ後ずさりをして男から離れた。男も美衣子の方へ少しづつ近寄ってくる。距離は縮みもせず離れもしなかった。

「ほ、ほら、見て……」の真つ暗闇。この山には、が、街灯が無いんだ。だ、だから、夜は滅多に誰も近寄らない」「

男は緩やかに速度を上げながら美衣子に近寄つてくる。距離が少しづつ縮まつていいく。美衣子は叫び声をあげて後ずさつた。距離が少しづつ離れていく。

「……来ないでください、私に近寄らないで！」

「ふ、ふふ、ふふふ……。こには誰も近寄らない……そ、その言葉が何を意味するか、……わ、分かるよね？」

男は突如、美衣子の腕を強い力で掴んだ。

「…」で何をしても、誰にも見つからないうて事だよ。」

「い……ついやあああー。」

美衣子は慌ててその手を振り払い、生い茂った森の中へと走り出した。

第58話 追いかげっこ

「無駄だよ……どんなに悲鳴を上げたって誰も来ない……！」

男の声が背後から追いかけてくる。美衣子はただひたすら走った。足元は枯葉か何かのだろう、足を下ろすたびにカサカサと不気味な音を立てる。その音が更に美衣子の恐怖心を煽つた。

「誰か……誰か助けて！」

今までに上げた事の無いような大声で叫ぶが、その大声は闇の中へ吸い込まれるだけで、誰の耳にも届かない。

背後に自分を追つてくる足音が確かに聞こえてくる。その足音は少しずつ近づいているような気がした。

「助けて、助けて、嫌、誰か……お願い、誰か……」

美衣子は半狂乱になりながら全神経を足に集中させた。
逃げなければ。

捕まれば何をされるか分からぬ。

美衣子はお世辞にも運動神経がいいとは言えなかつた。道無き道を前進する両脚はとつくに悲鳴を上げてゐる。しかし、募つていく恐怖心が美衣子の体を突き動かした。

側頭部を伸びた木の枝に叩かれ、美衣子はハツとした。

取り乱していくはいけない。落ち着くのだ。まずはとにかく山を降りて、それから民家に助けを求めよう。

拳を強く握り締めて闇の中へしつかりと目を向けた瞬間、美衣子は何かに足をとられて転んだ。

思わず大きな声で悲鳴を上げてしまい、慌てて口許を押さえる。

(だ、大丈夫、大丈夫、落ち着いて……。この暗闇だもん、あの人もきっと私の事、見えてないよ)

何とか気を落ち着かせようとするが、なかなか上手くいかない。じりじりと痛む膝を片手で払うと、微かに砂の感触を感じた。そうかここは山の中だったと脳が納得したその瞬間だった。震える美衣子の肩を、何かが掴んだ。

「つかまえた」

地の底から湧き出るよつなくぐもつた声に、鳥肌が全身を覆った。やけに生暖かいその手は、美衣子の細い肩をがっちり掴んで離さない。男はゆっくりと美衣子に囁いた。

「に、逃げても無駄だよ、美衣子ちゃん」

生暖かい鼻息が首筋にかかる。美衣子は発狂し、大声を上げて喚いた。

「離して、離して、離して！」

男は力一杯美衣子の腕を掴んでいて、どうしても逃れる事が出来ない。

「逃がさない……だ、大好きだよ……美衣子ちゃん……」

男の発した一言で、美衣子の頭の中は真っ白になつた。同時に、あの夜アパートで起こった出来事が脳内に蘇つた。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。もう一度とあんな思いはしたくない。

美衣子は咄嗟に、掴まれていない方の手を地面に這わせた。何か少しでも男に反撃できるようなものを探す為だつた。

不意に硬い感触を感じ、躊躇うことなくそれを掴む。それは石だつた。触感からして野球ボールくらいの大きさのものだらう。美衣子はこの世のものとは思えない叫び声を上げながら、その石を高く振り上げた。

鈍い音がした。何かが割れたような、ひび割れた音。美衣子の肩を掴んでいた、汗ばんだ手が緩む。男は呻き声を上げながら地面にずり落ち、逃げようとした美衣子の足首を掴んだ。

「ま、待て、……！」、このや、ひい……よ、くも……、「離して！」

美衣子は涙声で叫び、再び握った石を真っ直ぐに男の頭蓋骨へ振り下ろした。一度目で足首を掴む手が緩んだ。2度目で男が叫び声をあげた。そこで美衣子は地面に手を這わせ、今まで持っていたものより2倍近い大きさのある石を拾い上げた。そしてその石を、迷う事無く男の顔面がある辺りへ振り下ろした。

何かが潰れる音と悲鳴、ぐしゃりといつ感触と、頬に飛び散る生暖かい液体。

早鐘のように脈打つ心臓。田の前の男の心臓は、恐らく、止まつた。

震えながらその場にくずおれて、美衣子は両手を田の前で広げた。暗くて良く見えないが、何か黒ずんだ液体が付着している。

「…………嫌だ……、嘘だよね…………」んなこと……。……嘘、でしょ？ わ、私……つ」

両手で顔を覆い、美衣子は繰り返し同じ言葉を呟いた。

「…ひなんつもり……なかつたのに………」

よろめきながら立ち上がる。両足がもつれて転び、地面に顔を打ちつける。目の前がぼやけ、一瞬意識が遠のいた。しかし気絶している場合ではない。自分は最低な過ちを犯したのだ。男が犯した罪と全く変わらない、殺人という過ちを。

美衣子は自分の衣服で両手を拭つた。ねつとりとした不快な感覚が若干、軽減される。

美衣子は木に寄り掛かりながら立ち上がり、込み上げる吐き気を押さえ込んで歩き出した。

足を引き摺つて歩くうちに、いつの間にか美衣子は山を降りていった。

数メートル先に街頭があり、その先にもいくつか街頭が設置されている。頃垂れながらその街頭の下まで歩いた美衣子は、明るくなつた視界で自分の両手と衣服を目の当たりにした。

湿つた赤が所々に飛び散つているスカート。先ほど両手を拭つたせいか、衣服には更に赤い手形がべつたりと付いていた。

美衣子は両手を握り締めて大声で何か叫んだ。何度も、何度も、繰り返し叫んだ。そして大声を上げながら街頭に照らされた歩道をがむしゃらに走った。

* * *

やがて美衣子は自分のアパートへと辿り着いていた。ぼんやりと部屋の扉を見上げ、自分の格好を見て嘲笑する。住居者がいる部屋の殆どには電気が付いていた。今ここで大声を上げれば、誰かが窓を開けて警察に通報してくれるだろうか。

結局小さく乾いた笑い声を零して、叫び声を上げることは止めた。一段一段踏みしめるようにして錆び付いた階段を上り、自分の部屋の前に立つ。血なまぐさい臭いを放つてている服を強く握り締めて、美衣子はドアノブを掴んだ。

室内に入つて扉を閉め、虚ろな瞳を部屋の中に向ける。薄暗い室内に、瑠夏、京子、奈々が寄り添うようにして眠つていた。この3人は、美衣子が危ない目に遭いそうになつた時すぐに助けに来られるようにと、自分たちの両親を説得してまでここで待機してくれていたのだ。

無表情な美衣子の瞳から、涙が零れ落ちる。どうして自分はあんなことをしてしまったんだろ？。いくら悔やんでも、もう取り返しがつかない。

奈々が小さく寝返りを打つた。その瞬間、美衣子の肩がびくんと跳ねる。

暫く呼吸を止めて奈々の方を見詰めたが、どうやら奈々は目を覚ましたわけではないらしい。

胸を撫で下ろし、それから唇を引き結んで再び扉の方を向く。3人が目を覚まして自分の姿を見た時、きっと3人は自分に對して恐れや軽蔑の感情を抱くだろう。

（もう友達に嫌われるのは、嫌だよ……）

美衣子は音を立てないように、片手をドアノブに向かって伸ばした。扉を開いて、外の冷たい空気を胸いっぱいに吸い込む。3人の姿をもう一度目に焼き付けておこうと振り返った美衣子は、ハッとして両目を見開いた。

「…………み、…………美衣子さん？」

奈々が目を覚ましたのだ。じつと美衣子の姿を凝視する奈々の瞳は小刻みに震えている。豆電球の点いた蛍光灯の下に血だらけの衣服を身に纏つた人間が立っているのだ。当たり前の反応だろう。

美衣子は両手を強く握り締めてから、ぎこちない笑みを浮かべて奈々の方に片手を伸ばした。

「な、奈々…………ちゃん」

しかし奈々は美衣子を見つめたまま、怯えた表情で後ずさつた。その行動で、美衣子は気づいた。奈々は自分を拒んでいるのだ。わたし

美衣子は奈々に伸ばしかけていた手を引っ込める、寂しげに微笑んだ。

「『めんね、奈々ちゃん。私最低な事しちゃったんだ。人間として一番やつちやいけないこと、しちやつたんだ。だからもうみんなには会えない。もう、一緒にいられない。だから……さよなら』

美衣子は早口でそう告げると、外へ飛び出そうとした。その瞬間、強い力で片手を掴まれ、後ろへ引き戻される。

振り返った美衣子は驚いた。奈々が、血に塗れた美衣子の手を自分で掴んでいたのだ。奈々は何かを決意したような強い光を目に宿らせたまま、美衣子の手を再び強く引いた。

「美衣子さん、とりあえず手を洗って、それから服も着替えて洗濯しましょ?」

「……奈々ちゃん、でも、でも、私……」

「いいから、まずは手を洗いましょ?」

奈々が少し強い調子でそう言つと、京子と瑠夏も目を覚ました。2人は目を擦りながら起き上がり、美衣子と奈々の方へ視線を振つた。

「……どうしたの、奈々?」

「ん、あれ……? 美衣子、帰つ……、……え?」

瑠夏と京子は、血塗れの美衣子の姿に驚きを隠せない様子だった。しかし、奈々はそんな2人には構わず、美衣子を洗面所へと引っ張つて行つた。

蛇口を捻ると、瞬時に無色透明の水が蛇口から流れてくる。美衣子は流れ出る水に向かつて両手を突き出し、両手を必死に擦つた。

美衣子の手に付着してゐる赤が水に混ざつて溶けていく。

「…………」

美衣子は突然泣き始めた。苦しそうに、辛そうに。
奈々は何も言わずに美衣子の背中を擦りながら、手洗い用の石鹼
で美衣子の手を洗つのを手伝つた。

第60話 疑惑

手を洗い終えると、美衣子は突然3人が寝ていた布団に倒れ込み、そのまま寝息を立て始めてしまった。

その美衣子を取り囮むようにして座り、3人は顔を見合させる。瑠夏は美衣子の血まみれの服に一瞬だけ視線を振つて、見てはいけないものを見てしまつたかのように慌てて目をそらした。そして、震えている自分の手をもう片方の手で押さえながら、掠れた声で呟いた。

「IJの血、誰のなんだろ……」

奈々は頭を伏せて黙っていたが沈黙に耐え切れなくなり、瑠夏の問いに小さな声でこう答えた。

「…………わからないです。帰つてきたら血塗れで、美衣子さんは放心状態で……聞ける状態ではありませんでした」

京子はそれを聞きながら、泣きそうな声で呟いた。

「でも普通に考へるなら、あのストーカー男の血なんじゃないの？ だって、美衣子はあいつに会つために出かけたんだし……」

その考へに瑠夏も頷いて、そつと美衣子の髪の毛を梳いた。

「うん、あたしもあいつの血だと思つ。だけどこれ、すごい量だよ。これじゃあまるで、人を殺した時、みたいな……」

京子と奈々は、瑠夏の言葉で黙り込んでしまつた。実は2人もそ

う考えていたのだ。

もしかすると、美衣子はあの男を殺してしまったのではないだろうか、と。

3人は美衣子から少し離れ、顔を近づけて声を落とした。

「でもや、もしそうだつたとして、どうして殺しちゃつたんだろう。美衣子、けじめをつけるつて言つてたけど、もしかして最初から殺すつもりで……？」

「違うんじゃないかな。計画的犯行だつたら多分着替えとか用意していいくと思うよ？ こんな血まみれで帰つてきたら不自然じゃない」「そうですね。もしあの人に殺したんだとしたら……」

そこで一皿言葉を切り、奈々は美衣子をちらりと見て続けた。

「美衣子さんにとって耐えられないくらい恐ろしいことがあつたのかも……」「……」

暫しの沈黙の後、瑠夏が潰れたような声で呟つた。

「耐えられないような恐ろしいこと……」

奈々は慌てて両手を横に振ると、唇を噛んで膝の腕に両手を並べた。

「奈々には何もわかんないです。だから、話は美衣子さんが田を覚ましてから聞きましょう」

その言葉に残りの2人も賛同し、美衣子の田が覚めるのを待つことにした。

第61話 傷跡

皿を覚ますと、3人は何事も無かつたかのように雑談していた。美衣子が皿を覚ましたことに気がついた3人は、美衣子にこっこりと笑いかけた。

「おはよう！」

3人は血だらけの衣服を身に纏つた美衣子の姿を皿の前で見ている。しかし、恐怖の感情など全く無いかのように、美衣子に対しての3人の態度はいつもと変わらなかつた。

「あ 美衣子さん、ちょっと台所借りちゃつたんですけど、良かつたですか？」

「え？ う、うん」

「奈々ね、料理得意なんだよ！ ほら、美衣子の分も！」

京子が、美味しそうなシチューを皿の前に差し出した。

「これ……奈々ちゃんが作つたの？」

「はい。冷めないうちに召し上がってください」

急かされるままそつとスプーンを取り、スプーンで皿の液体を掬つて口に運んだ。……その瞬間、シチューは舌の上でとろけた。

「うわあ、すい〜くおいしいね、これ！」

「ありがとうございます、美衣子さん」

明るい笑顔を浮かべてシチューを口に運ぶ美衣子を見詰めて、奈

々は嬉しそうに微笑んだ。

皿が空になり、スプーンをテーブルの上に乗せた美衣子は、3人の顔を見上げて恐る恐る尋ねた。

「ねえ、みんな氣づいてるんだよね？ 私が……どんな最低なこと、したのか」

3人は気まずそうに顔を見合わせあつた後、美衣子の方を向いて小さく頷いた。

「うん……多分、わかってる。でもあたし達、美衣子を責めるつもりも、警察に突き出す氣も無いよ。例え隠すことなどが罪になるとしても、あたし達は美衣子の味方でいるよ……」

美衣子は俯いたまま、微かに頷いた。嬉しいような気もしたが、殺人を犯しておいて平気な振りをして生きていのいかという気持ちもあって、複雑な気分だった。

すると突然京子が明るい笑みを浮かべ、両手を叩いて美衣子に向き直った。

「ね、美衣子、これから学校はどうするの？」

「……えっとね、暫く行かないと思つ。今、人と会つの、ちょっと怖いから」

「そうですか……わかりました。奈々たちが、涙さんにちゃんと言つておきますからね。美衣子さんに危害を加えたりしたら承知しないって」

「うん……ありがと」

美衣子は軽く微笑み、ふと自分の服に目を落とした。血しづきと赤い手形の付いた服が視界に入り、泣きたい気持ちになる。

(早く着替えなきゃ……)

しかし、服を着替えても自分自身の罪が消え去るわけではない。それを痛い程理解している美衣子は両手で自分の服を掴んで、苦し
そうに両目を瞑った。

第62話 あたしは悪くないもん

それから2ヶ月ほどの月日が流れた。

「瑠夏さん、美衣子さんがあと2週間くらいで学校に来るって連絡、もう聞きましたか？」

「うん、聞いた聞いたー！ 昨日メールが来て……、あ、京子も知つてる？」

「知つてる！ あたしにも昨日メール来たよー」

3人は嬉しそうにはしゃいだが、しかし、1つだけ不安な事があった。それは勿論……涙の存在。

瑠夏達は美衣子の不安と自分たちの不安を消す為、涙と直接対話をすることを決めた。教室で1人携帯をいじっている涙の傍に駆け寄り、笑顔を取り繕つて話し掛ける。

「ね、ねえ、るう。ちょっとといいかな？」

「……何？」

涙はゆつくり顔を上げ、首を傾げた。その瞬間涙が浮かべた悪魔のような笑みを見て、瑠夏の背筋が凍り付く。瑠夏の背後に京子、奈々が待機しているのを見た涙は、何かを理解したように口の端を吊り上げた。

「……話したいことでもあんの？」

3人が頷くよりも先に、涙は自分から席を立つた。

「どこで話す？ ……校舎裏でいいよね。行こ」

涙は1人で喋ると、すたすたと歩き出した。瑠夏たち3人も、戸惑いながらその後を着いて行つた。

* * *

涙は、瑠夏や美衣子と親友だった時とは全くの別人になっていた。今はただ美衣子を苦しめるだけを考えている、悲しい人間になってしまっているようだった。

「……で、何？　あ、もしかして美衣子いじめにまた入れて欲しいとか？」

悪戯っぽく笑う涙。3人は怒りのこもった瞳で涙を睨んだ。涙はその目を見て、[冗談]冗談。と高く笑い声を上げる。

「ま、そんなわけないわよね。もうとっくにあたしの事、裏切ってんだし」

「裏切ってるなんて言わないでよ、るう。あたしたち親友だったでしょ？　また昔みたいに仲良くしようよ……」

「……ねえ、るう。もうやめよう？　美衣子は、変な男からストーカーみたいなことされて精神的に辛くなつてるの。お願ひだから、もうこれ以上美衣子を傷つけないで」

「涙さん。もう雪山先輩はこの世にいないんですから、美衣子さんをいじめる理由はもう無いんじゃないですか？　それなのに美衣子さんをいじめようとする精神が、奈々には理解不能です」

涙は自分に向けられる数々の非難を、うざったそうに何度も溜息を吐きながら聞いていた。しかし、突然大きく口を歪めて笑い、こう言ったのだ。

「まあ、確かにあのヲタクはキモかつたよね。勘違いばかりの馬鹿デブ男」

「……えつ？」

その言葉に、瑠夏が困惑の表情を浮かべた。奈々と京子も顔を見合わせて眉を顰めている。

「何よ？」

「ちょ、ちょっと待って。るうは……あの男のこと、知ってるの？」

涙は、ええ、と頷くと事も無げにこいつ言った。

「だつてあのオヤジに美衣子を紹介したの、あたしだもん。そりや知つてるに決まってるでしょ？　何度も会つた事あるし」

「う、うそ……信じられない……。るう、そんなことまでしてたの？」

「ふふ、驚いた？　あの男、働いてないくせに結構いい金ヅルだつたしね。美衣子の情報ならいくら出してでも買つていつたわ」

瑠夏はその一言に怒り狂い、涙の頬を平手で打つた。涙は一瞬だけ両目を瞑つたがすぐに目を開き、まるで3人を挑発するかのように笑い声をあげた。

「そういうえばあいつ死んだのよね。美衣子と会うつて言つてた夜から携帯繋がらなかつたし……美衣子が殺したんでしょ？」

あたしには関係ないことだけど。と呟き、涙はにやにやと不快な笑みを浮かべた。京子は拳を握り締め、顔を真っ赤に染めて俯いていた。今にも涙に殴りかかってしまいそうで、抑えるのに必死だつ

た。奈々は瞳に涙を溜めて、涙のほうへ少し身を乗り出した。

「許せないです……。涙さん、最低ですよ！」

「は？ 何言つてんのよ。あんた達だって虚めてたでしょ？ ……
美衣子のこと」

それを言われると、返す言葉はない。しかし、3人はなんとして
でも涙の暴走を止めたかった。

「涙！ あんたがやつた事、全部警察に……っ！」

「あはは、言つてみれば？ 証拠なんてないけど」

涙は高らかに笑い声をあげ、更に続けた。

「大体さ、今の大人なんて大概役に立たないわよ？ 大人に相談し
たところでどうにもならないわ。だつてこれはあたしたち子供が引
き起こしたことなんだもん、まじめに取り合ってくれるはず無いで
しょ？ 子供の気持ちなんて、大人にはわからないんだから」

それを聞いた京子の脳裏に、あの時相談しようとした警察官の顔
が浮かんだ。京子は首を激しく横に振り、大声で叫んだ。

「そんなこと無い！ 真剣に話せば、真剣に聞いてくれる人もいる
はずよ！」

「じゃあ聞くけど、あたしが美衣子をいじめるつて証拠はどこに
あるの？ 動機はどうやって説明する？ もう雪山はいないし、証
人なんていない。あたしがあの男とコンタクトを取つてたつていう
証拠はあるの？」

「そ、それは、……あの男の携帯電話か涙の携帯電話を調べれば、
2人がメールしていたことは明らかだわ。そうすればそれが動かぬ

証拠になる。涙、あなたは逮捕されるのよ！」

それを聞いた涙は、やれやれと首を横に振つて見せた。

「あんたねえ、そんな事このあたしが対策練つてないとでも思つてゐるの？あのストーカー男と連絡が取れなくなつてから2ヶ月も経つし、警察に見つからないうちにあたしがあいつの死体を捜してきたわ。そしたらあいつ、案の定隣町の山奥で腐りきつてた。……ああ、思い出すだけで吐き氣がするわ……気持ち悪い」

涙はそこで微笑み、ポケットから赤く染まつた携帯電話を取り出した。

「！ それ、まさか……」

「そう。あいつの携帯電話よ」

涙は笑いながらその携帯電話の電源ボタンを押した。

「最初は電池切れなのかと思つたんだけど、完全に壊れてるみたいね。どうやら美衣子があいつを殺した時にこれも一緒に殴っちゃつたみたい。あ、凶器は石らしいわ。死体の傍に黒い血がべつたり付いた石が転がつてたから」

涙はその携帯を地面に落とすと、大きく片足を振り上げた。

「これで完全に証拠隠滅よ」

携帯電話を力一杯、何度も何度も踵で踏みつける涙。ガラスのようなものが砕け散る音がして、携帯電話はバラバラになつた。無残な姿になつてしまつた携帯電話を、3人は呆然と見つめた。

「ほら、これで携帯は使い物にならないわよ。……まあ、携帯会社とかに問い合わせたらどうにかなるかもしないけどね」

涙のその言葉でハッとした瑠夏が、慌てて奈々に指示を出す。

「それだわ！ 奈々、今すぐ携帯会社に問い合わせて…」

奈々は大きく頷いて自分の携帯電話で携帯会社に電話を掛けようとした。が、涙は余裕の笑みを浮かべてそれを一瞥し、静かにこう言った。

「やめとけば？」

「は？ なんでよ？」

「あはははは！ やつぱあんたたち馬鹿ね。わかんないわけ？ あたしも捕まるかも知れないけど、美衣子があいつを殺した事もバレるわよ。目撃者もいないし……、正当防衛が通用するかしらねえ？」

笑いながら肩を竦める涙に、3人は苛立ちを露せない。

「それに、」

涙はなんとも嬉しそうな表情を浮かべて、3の方へ2・3歩歩み寄った。

「あたしには最終兵器があるから」

最終兵器、という言葉を聞いた3人は困惑した表情を浮かべた。一体なんのことだろ？ 瑠夏が訊くよりも先に、涙は制服の手首についているスナップを外し始めた。

露になつた手首にあつたのは……、涙が自分で自分を傷つけていた時の、あの傷跡。

「そこまで深く切つてないから大分治つてきてるけど、リスクしてたつて事が解る程度には傷が残つてるわ。……あたしはこれを言い訳にすれば良いのよ。『美衣子があたしに対して酷いじめをして、あたしはすごく傷ついた。だからあたしも仕返ししたいと思つて……』ってね。その発言を裏付ける証拠はここにある。たとえそれが嘘だつたとしても、馬鹿な大人にはそんなことわかんない、ってわけよ」

涙はそう言って、口元に笑みを浮かべながら自分の手首についた傷跡を撫でた。瑠夏はその言葉に更に驚き、そして怒りを露にして叫んだ。

「そんなこと許せない！ 許さないわよ、るう！」
「うるさいわねー。大体、裏切り者のあんたたちにはもう関係ないことでしょう。馬鹿らしいから、あたし教室帰るわ」

涙は笑みを浮かべたまま3人の傍を通り抜けていった。3人は涙を追いかける事すら出来ず、ただ立ち尽くしていた。
何かを思い出したように涙が途中で立ち止まり、ぐるりとこちらを振り返る。そして、言い放った。

「あたしは悪くないもん。悪いのは全部あんたたちと美衣子よ」

第63話 検査

美衣子はちゅうりふその頃、自室のベッドで横になっていた。最近、いつも寝ても眠い。体がだるく、何をするのも億劫だ。

(わから起きなくちゃ……)

美衣子は重い体を起こし、テーブルの上の皿に置いてある梅干を口に運んだ。

「美味しー……」

今までそんなに好きではなかつた梅干が、近頃とても美味しく感じるのはいつになつた。梅干だけで食事を終えた美衣子は皿をテーブルに置いたまま、すぐにその場にじりじりと寝転がつた。

「うー……頭痛い……」

小さく咳こいて、瞳を閉じる。だんだん意識が遠のき、また意識を手放しそうになつた瞬間。

「…」

突然の吐き気が美衣子を襲つた。慌てて跳ね起き、トイレへ向かう。

「つづぼ、づぼつー」

美衣子は何度か嘔吐し、よつやく少し治まつたといひで息を吐こ

た。実は、ここに突然激しい吐き気や眩暈に襲われるようになつたのだ。

「……」

美衣子はぐくりと唾を飲み込んだ。少し前から体に違和感を感じ始めていたが、やはり、この体調はおかしい。あまり考えたくないがつたが、もしかすると……。

トイレから出て、押入れに手を伸ばす。開くのが怖い。それでも決意し、恐る恐る押入れを開けた。押入れの中には、布団の他につた一つだけ、ある物が入っていた。それは小さな長方形の箱。1週間ほど前に薬局で購入したものだ。

妊娠検査薬。

それがその物体の名前だった。

美衣子は大きく息を吐き出し、深く吸い込み、その箱を見つめた。そして心中で何度も何度も祈り続けた。今自分が考えている事が、どうか思い過ぎてありますように、と。

意を決して、検査薬を持ったまま再びトイレへと向かつた。扉を閉める最後の瞬間、硬く硬く両目を瞑つて。

* * *

数分後、美衣子は弾かれたようにトイレから飛び出した。髪の毛を両手でぐしゃぐしゃと搔き回し、奇声を発しながらその場へ蹲る。

美衣子は心の中で神へ批判を浴びせていた。

神様なんていない。絶対に信じない。仮にもし神がいるとしたら、存在している神はきっと死神だけなのだ。そうでなければ自分をこんなに酷い目に遭わせるはずが無い。

トイレの扉に頭をぶつけ、泣き叫ぶ。何度も、何度も。鈍い音がして、額が赤くなつていく。それでも自分の頭を扉に叩きつける。

とうとう額が切れて、血が滲んだ。

嘘だ。夢だ。有り得ない。こんなことがあつて良いわけがない。美衣子は壁に爪を立てながらずるずるとその場にへたり込んだ。

「お願い……夢なら早く醒めて……」

春風美衣子 14歳、中2。検査結果は“陽性”だった。

彼女の胎にいる赤子は、言つまでもなくあいつの子供なのだろう。美衣子に限り無い恐怖を与え、美衣子の全てを奪つた、あの男の。

「うう……うう……ひひく……」

憎らしい。恨めしい。死してなお、あの男は自分に苦痛を与えるのか。しかしあいつはもうこの世にいない。何故なら、自分自身の手で殺めてしまったのだから。

美衣子は握り拳をつくり、床を力一杯叩いた。きっと下の階の人々が迷惑そうな顔をしているだろう。でも、そんなことどうだってよかつた。他人の痛みや苦しみなど、自分に比べればなんて事はない。

「うわあああん！ あああああ！」

泣き叫び、床や壁を力一杯殴る。5分ほどその状態で泣き続けていると、大家と隣人が部屋の扉を叩いて怒鳴り、注意してきた。それでも美衣子は鍵を開けることはなく、ひたすら部屋の中で暴れ続けた。

第64話 秘密

美衣子は涙を頬に光らせたまま床に座り込んでいた。こんな事、あの3人にも、ましてや、親にも言えない。言つてしまえば最後、美衣子の人生は今以上に大きく狂つてしまふだろう。

あの3人に相談すればきっと墮ろす事を薦められると思う。無論、お腹の子には悪いが美衣子だつてあんな男の子供を生みたくない。しかし親にバレれば必然的に、誰の子供だと訊ねられるだろう。雪山の子であればもうとっくにお腹が大きくなっている頃だし、雪山以外に特別親しい男性など、美衣子にはいなかつた。そうすれば、嫌でも美衣子はある男の存在を話さなければいけなくなる。

いくら酷い事をされたからといって、美衣子があの男を殺したことは変わりがない。あの男を殺めた事が知れ渡れば、美衣子は普通の女子中学生としての立場を失う。それだけはどうしても嫌だった。

美衣子は今までいろいろなことに耐えてきた。前向きに生きようとしてきた。それなのに普通の女性として生きる権利すら奪われたら、一体これからどう生きれば良いのだろう。

泣きながら顔を上げると、目の前に置いてある「写真立て」が目に入った。涙を拭き、その「写真立て」をそっと手にとる。その「写真」には、幸せそうに微笑む美衣子と雪山が映っていた。

この頃は本当に幸せだった。誰よりも幸せだという自信があった。それなのに、一体どうしてこんなことになつてしまつたんだろう。

雪山の優しい微笑みは、いつも美衣子の心を楽にしてくれた。この笑顔が大好きだった。いつか離れるなんて考えてもみなかつた。涙が頬を伝つて、雪山の微笑みの上に落ちる。その瞬間、いつかの雪山との会話が脳裏に蘇つた。

「 なあ、美衣子。もし子供ができるとしたら何人欲しい？」

「え？ ……うーん、2人かなあ」

「なんで？」

「だつて、1人だと寂しいでしょ？」

「そつか。じゃあ、結婚したら親子4人で暮らすって事だな」

「……雪ちゃん、それって……」

「あはは」

あまりにも軽すぎるのはプロポーズだった。美衣子はドラマや小説のようなベタなプロポーズをしてもらうのが密かな夢だったが、あのプロポーズも十分心に響き、とても嬉しくて顔が熱くなつたのを今でも覚えている。

「雪ちゃん……」

[写真を暫く見つめた美衣子は、写真立てからその写真を取り出して大事にポケットの中にしまつと、携帯電話に手を伸ばした。

第65話 最後の電話

美衣子は瑠夏の携帯電話に電話を掛けた。今の時間はお昼休みのはずだから、さつとすぐに出てくれるはずだ。その予想は当たり、すぐに瑠夏の元気な声が電話の向こうから聞こえてきた。

『もしもし、美衣子？ どうかしたの？』

美衣子は電話を耳にあてたまま、玄関へ移動した。

「ううん、なんでもない……ちょっと、声が聞きたかったの」

『あはは、何それ。あ、そういうえば、美衣子そろそろ学校来れるんだよね？』

「う、うん」

『みんな待ってるよ。あと、学校終わったら、速攻で奈々と京子と一緒に遊びに行くから待っててね！』

美衣子は静かに靴を履き、扉を開けて外に出た。外の空気が美衣子の体の中を通り抜けていく。その空気を一杯吸い込んでから、電話の向こうにいる瑠夏に向かって、精一杯明るい声を出す。

「うめん、瑠夏ちゃん。今日は遊べそうに無いの

『え……どうして？』

「えっと……」

涙を堪える事が出来ず、美衣子は嗚咽を洟らした。それに気づいたのか、瑠夏が慌てた声を出した。

『う、ううしたの、美衣子…』

「な、なんでも、ない、よ」

『なんでもなくないでしょ！　待つて！　今からせっかく行くからー。』

「い、いいの」

『でも、』

「来ないで！」

思わず大声で怒鳴ってしまった。電話の向こうが、一瞬静かになる。

「大丈夫だから、来ないで」

今度は少し冷静に、呟くように美衣子は繰り返した。

『……美衣子？』

「ありがとう、瑠夏ちゃん」

『え？』

「……友達になってくれて、ありがとう」

ただならぬ気配に、瑠夏の声が低くなる。

『美衣子、本当にじうしたの？　何かあった？』

「……嬉しかった。本当に楽しかった。今まで、ありがとう」

瑠夏は教室で何度も美衣子の名前を叫び続けた。しかし美衣子はすぐに通話を切ると、携帯電話に向かつて微笑んだ。

「さよなら」

第66話 消えた美衣子

空を覆う黒い雲から、まるで何かを感じ取ったかのように雨が降り始めた。瑠夏は激しく胸騒ぎを覚え、美衣子の電話番号に何度も電話を掛け直す。しかし、呼び出し音が鳴るばかりで、美衣子は電話に出なかつた。瑠夏は乱暴に携帯電話を置くと、弁当を片付け、トイレに行つていた京子と奈々に声を掛けた。

「京子、奈々！ 美衣子のアパートに行こ！」

「え、今から？」

「何ですか？」

「さつき美衣子から電話がかかってきたんだけど……」

先程の会話を説明すると、2人は蒼ざめて早くアパートへ向かおうと言い出した。すぐに校舎から飛び出した3人は、雨に濡れた道を走つた。

数分後、アパートに着いた3人は階段を駆け上り、美衣子の部屋の前に立つて扉を叩いた。返事は無い。

「美衣子、美衣子！ いるなら返事して！」

3人の背中に嫌な汗が流れしていく。

「美衣子さん、美衣子さん！」

奈々が声を張り上げて扉を叩き、咄嗟にドアノブを回した。

「……あつ」

なんと、扉はいとも簡単に開いてしまった。3人は顔を見合せ、無言のまま意見を合わせた。

「美衣子……」「めん、入るね」

3人は恐る恐る室内に入った。雨が降つて曇つているせいか、室内は薄暗い。京子が電気を点けてみた。部屋の中が瞬時に明るくなる。

……しかし、美衣子の姿は無かつた。

荷物や布団はそのままだ。先程食べたと思われる、梅干の種が載つたままの食器も残つていた。

「どう行ったの……？」「こんな天氣なのに」

雨音と不安は強くなるばかり。3人は暫くその場に呆然と立ちつくしていた。

第67話 海

雨は一切止む気配を見せせず、降り続いている。凄まじい雨粒の中、傘も差さず崖の上から海を眺める人物がいた。

その人物は、美衣子だった。

美衣子は荒れ狂う海を思い詰めた顔をして見詰めながら、ゆっくりと、しかし確実に何かを覚悟していた。

彼女は幼い頃から海が好きだった。力強い波の音。その音は時々とても優しい音へと変わり、人々の心を癒す。

美衣子は瞼を閉じて、もうこの世にはいない、雪山との思い出を呼び起こす。とにかく素敵な事ばかりだったあの頃。まだあれから数ヶ月しか経っていないはずなのに、雪山が生きていた頃の事が酷く遠い昔の記憶のように思えた。

そつと瞼を開き、瞳の中に雨が落ちてくるのも構わず空を見上げた。それから口を開いて、空に向かって呟く。

「『』めんね……」

雪ひちゃん、るうちちゃん、瑠夏ちゃん、京子ちゃん、奈々ちゃん、お母さん、お父さん。こんな私のわがままを、どうか、どうか許してください。

美衣子は力強く目の前を見据え、1歩、また1歩と海の方へ足を進めた。雨に濡れた衣服はとても重く歩き難かつたが、そんな事は気にならなかつた。

「今まで有難う……」

弱虫な私を支えてくれて、護ってくれて、ありがとう。
瞳を閉じる。美衣子の頬に、雨と共に涙が流れた。地面を打つ雨

の音が沢山の拍手や歓声に聞こえて、今までの自分の頑張りを認めてもらえたようで、少し嬉しかった。

すぐ真下に海が見える場所まで歩いたところで、美衣子の足が震えた。美衣子は首を横に振つて再び海を見詰めると、自分の腹を抱き締めるように押さえた。

美衣子は大自然の拍手に身を包まれながら、海に向かつて身を投げた。

塩分を多量に含んだ水の中へ落ちた瞬間、美衣子は自分の顔の筋肉が緩むのを感じた。理由は解らない。ただその瞬間、ひたすら幸せな気分だった。

荒れた波が強く美衣子の体を跳ね上げ、美衣子は岩盤へ叩き付けられた。瞬間、脳内がスパークしたような衝撃を感じたが、体が海の中へ引き摺り込まれるところまで、意識があつた。塩水の中で目を開いていても不思議と痛くも辛くも無く、美衣子はそのまま安らかな気持ちで両目を閉じた。

第68話 悲劇

「美衣子……」

瑠夏たちの声は凄まじい雨音に搔き消された。雨が3人の体を激しく打ちつけ、3人は濡れ纏のようになつてゐる。

「美衣子、どこにいるの？」

「美衣子、返事して！」

「美衣子さん！　どこですか！」

人づ子1人見当たらない豪雨の中、3人は声を張り上げて歩いた。不安と恐怖がそれぞれの心の中に芽生え始める中、突如奈々が足を止めた。霞む景色の向こうに、奈々の視線は止まつたまま。

「奈々、どうしたの？」

奈々は京子の質問には答えず、まっすぐ前方を指差した。奈々の指は小刻みに震えている。……2人はその指先を目で追つた。

その先にあるのは、落下の危険がある為立ち入り禁止になつてゐる、切り立つた崖だった。

「……」

3人は顔を見合わせる。お互いの顔には不安の色が滲んでいた。京子が蒼ざめた顔で乾いた笑い声を上げる。

「冗談でしょ？ 笑わせないでよ、奈々つてば」

やつ言いながらも、京子の手は泳いでいた。

「……念の為、ちょっと見てこよっか」

瑠夏が真剣な声を出して京子の手を引っ張る。しかし京子はその手を振り払い首を横に振った。

「嫌よ！ あんなところにいるわけないでしょ？ 念の為つて、確認するまでも無いよ。あんなところにいるはずない！」

瑠夏は唇を引き結んで京子の腕を掴み直すと、力ずくで京子の体を引き摺った。京子は瑠夏に腕を掴まれたままがき、訳の解らない叫び声を上げた。叫び出したいのは、瑠夏も奈々も同じだった。けれど今は、確かめなければいけない。それがどれだけ残酷な結果であろうと、確かめなければいけないのだ。

3人は崖の頂に立つと、遙か下方の海を見下ろして溜息を洩らした。

雨の音と力強い波の音が混じり合つて耳に届く。雨が、水面に叩きつけられるようにして落ちていく。何もかも吸い込んでしまいうな、大きな青黒い海。

「こりわけないよね、こんな場所」

やがて、ぽつりと呟かれた瑠夏の一言を、京子は聞き逃さなかつた。

「ほ、ほら。だから言ったじゃん。他の場所、捜しに行こう

今度は京子が瑠夏の腕を掴み、強引に引き摺つていこうとした。

瑠夏は泥に埋まった足を見下ろしたまま、力無く言葉を洩らす。

「一度、帰ろうか。一旦戻つて着替えてから……」

2人が崖の頂から立ち去りつつしても、奈々は動かなかった。海を見つめたまま、何かに憑依されたように立ち廻っている。

「奈々」

「……」

瑠夏の呼びかけに、奈々は応じなかつた。奈々は黙つたまま自分の足元に視線を落とした。瑠夏はその様子を心配し、京子の手を解いて奈々の方へ歩み寄る。

「……奈、」

その時、奈々の視線を追つた瑠夏はある物に気がついた。草の生えた地面上に、何かが落ちている。

もう1歩近付いてみて、瑠夏は息を飲んだ。

それは、美衣子の携帯電話だつたのだ。

雨でずぶ濡れになつているそれを拾い上げて画面を開き、愕然とする。画面はメール作成画面のまま固まつていた。そしてそのメール作成画面には、こんな文字が残されていたのだ。

「今までありがとうございました。さよなら……」

瑠夏が声に出してその文を読んだ時、京子が駆け寄つてきて携帯電話を奪い取り、すっかり色の失せた表情で瑠夏に掴み掛かつた。

「違うよね……間違いだよね、瑠夏！　こんなの……こんなのが打つたんじゃないよね、違うよね」

「……でも、……」これは

「違う！ 美衣子じゃない！ 美衣子じゃないよ。」

喚き散らす京子を片手で制し、奈々は田の前に広がる大海原を指差した。

「瑠夏さん、京子さん……」

「？……」

「あそこへ、何か浮いて

」

奈々はそれ以上言葉を発することができなくなつたのが、ぬかるんだ地面に崩れ落ちた。“あれ”がなんなか気づいてしまつたようだ。

「な、奈々、大丈夫？ しつかりして！」

瑠夏は奈々を抱き起こしながら、恐る恐る海の真ん中へ視線を振つた。青黒い海の真ん中に、大きな黒い物体が浮かんでいる。それが何なのか、瑠夏もすぐに理解してしまつた。

「うそ……でしょ？ どしょ？ どしょ？」

京子は海中に響き渡るような大声で悲鳴を上げた。

第69話 決意

「では、第一発見者は貴方達ですね？」

「……はい」

瑠夏は、通報を受けて駆けつけた刑事の質問に淡々と答えていた。京子は唇を紫に染めて震えている。奈々はその後、突然地面に倒れ込んだまま気を失った。

京子の叫び声を耳にした野次馬が集まり、崖の上にはあつという間に人だかりが出来た。

誰が連絡したのかは知らないが海上保安官も駆けつけ、瑠夏たちにタオルを渡した後、美衣子を冷たい海の中から引き上げた。そこで瑠夏と京子が目にしたものは、水分を含んで膨れ上がった美衣子の姿だった。あまりに衝撃的過ぎる光景に、思わず目を背ける瑠夏。京子は叫びながら瑠夏の腕にしがみ付いた。

優しい笑みを浮かべていたその顔は青白く変わり、髪の毛は海水で固まって頬に張り付いている。本当にこれがあの美衣子なのかと疑いたくなるような、凄まじい遺体だった。

「ええと、今回の件を事故ではなく春風美衣子さんの自殺だと考えるとしたら、何か心当たり等はありませんか？ 例えば学校で酷いイジメを受けていたとか」

「……」

「あの、聞いてます？」

「……」

瑠夏は魂の抜けたような瞳で刑事を一瞥し、やがて、こいつ答えた。

「いえ……、何も、知りません」

「そうですか。『ご協力有難う御座いました、この後少々署の方でお話伺いたいのですが、宜しいですか？』

「はい……」

「では、すぐに親御さんに連絡を

警官が美衣子の体にシートを被せ、担架に乗せて運んで行く。瑠夏はぼんやりとその様子を目で追いながら、必死に下唇を強く噛む。

本当は、美衣子の精神が不安定だったことを知っている。彼女はいじめられていた。自分達も彼女を酷く追い詰めた。クラスメイトからいじめられ、親友達からいじめられ、恋人を殺され、ストーカーに悩まされ、殺人を犯した。

どうして今回、前向きに生きると決めた美衣子が自殺してしまったのか、その原因は自分達にもわからない。その事実が酷く虚しくて、辛かつた。だけどもしその理由を話されていたとしても、きっと美衣子を護る事は不可能だつたのではないか、そう思ってしまう。

今回の事件の全てを包み隠さず話せば、ひょっとしたら涙は捕まるかも知れない。だが、今全てを明るみに出すわけにはいかなかつた。何故なら例え涙が少年院に送られたとしても、極刑が執行される事は決して無いから。

女子中学生がいじめを苦にして自殺をする、なんて所詮子供の問題。真剣に考える振りをしても、大人は心の奥でそう考えるだろう。そんな大人たちに、涙の裁きを任せるわけにはいかない。

「……るう」

瑠夏はぽつりと呟いた。突然出てきたその単語に、刑事は戸惑いの色を浮かべている。そんな事は氣にも留めず、瑠夏は強く両手を握り締めた。

(気づかせてやる。自分の犯した罪がどんなに重いかつて事を)

顔を上げた瑠夏の瞳の奥には、怒りの炎が煮えたぎっていた。

第70話 変わらぬ朝

犯罪性もあるとみて美衣子の遺体は司法解剖されたらしい。その結果、彼女のお腹から赤子が発見されたそうだ。その子供が誰との間にできた子供なのかは分からず、瑠夏たちのところにも警官が話を聞きにきたが、瑠夏たちはその事実にショックを受け、大体相手の見当はついたが、何も答えられなかつた。

美衣子が自殺した原因。瑠夏たち3人の中だけで、その理由が明らかになつた。

* * *

美衣子の葬儀には沢山の人が出席した。瑠夏たちやクラスメイトだけではなく、近所のお年寄りや小学生、それから名前も知らない後輩や先輩。美衣子がどれだけ沢山の人に愛されていたのかわかる人数の多さと、流された涙の量。

棺桶の中の美衣子を抱く彼女の母が体を2つに折つて泣いているのを、瑠夏たちはただ泣きながら見詰めることしか出来なかつた。クラスメイトの中でただ1人、葉山涙だけが出席しなかつた葬儀。

白い煙が空へ向かい、呆氣無く、美衣子は消えた。

* * *

美衣子の葬儀から暫く経り、ようやくクラスメイトの顔に笑顔が戻ってきた。

「おはよー」

美衣子の席には小さな菊の花が飾られている。瑠夏は毎日その菊

の花を見る度に胸が締め付けられる思いだつた。どうしても美衣子をいじめていた時に菊の花を下駄箱に詰めた事が蘇つて来て、苦しい。

「瑠夏、京子、奈々、おはよー。」

しおれた表情の京子と奈々が勢い良く顔を上げたのを見て、瑠夏も声の聞こえた方に田線を動かす。そこには、満面の笑みを浮かべた涙が立っていた。

「涙……」

「お、おはよー。」

瑠夏と京子は何とか笑みを浮かべて返事を返したが、ただ一人奈々だけは、ふてくされた顔でそっぽを向いた。涙は奈々の態度で特に気を悪くしたような様子も無く、当たり前のように瑠夏の机に飛び乗つてそのまま3人の輪の中に入り込んでしまつた。奈々と涙を交互に見ながら、瑠夏はぎこちない笑みを浮かべ、涙に話し掛ける。

「なんか涙、久しぶり……だね。なんでしばらく休んでたの？」

「え、だつてどうせ美衣子が死んだから全校で黙祷とか、クラス全員で美衣子についての思い出話とかしたんでしょう？ 雪山の時にそういうのやつて、もう疲れたんだー。だから、そういうめんどくさいのが全部終わつてから来ようかな、つて思つて」

「…………なんだ。もしかして……めんどくさいから、お葬式にも来なかつたの？」

「うん！ 死んだんならもう美衣子の顔なんて見たくもないし〜」

涙は肩に乗つている髪の毛を片手で払い除けながら、笑みを浮かべた。

「やっぱり、こういう戦いはあたしが勝つようになつてゐるよね。
大分長かつたけど、よつやく決着がついたわ」

奈々はそれを聞いて、乱暴に椅子から立ち上がった。唇を噛み締めて、涙を睨みつける。

「……何よ

涙がそう尋ねると、瞳に涙を浮かべた奈々は、何も言わずに廊下へ出て行ってしまった。

「ふん、変なやつ。あたしあああいうタイプきらーい。根暗つていうのかな？ 元々気に入らなかつたのよね、あいつ」「……」

瑠夏と京子は何も言わずに、顔を見合させた。涙は2人を振り返つて、屈託のない笑みを浮かべた。

「まあ、これ以上変なことしないならいいけど。でもまた調子乗つてきたら、今度は3人であいつを懲らしめてやるーね！」

「あーあ、それにしてもいじめつて楽しいよねー。2人ともいじめたい奴いないの?」

涙はもう次のターゲットを捜そうとしているようだ。瑠夏と京子はそんな涙に呆れ、そして底知れない憤りを感じていた。

「あ、とにかく昨日の数学の課題やつてきた? あたしやるの忘れちゃつたんだけど、貸してくれる?」

涙のその問いかけに、瑠夏は待つてましたとばかりに頷いた。

「やつてきたよ。見せてあげる」「ほんとー? ありがと!」「うん」

瑠夏は自分の席へ一旦戻り、引き出しを漁った。机の中から数学のノートを取り出し、微笑む。

「るう、投げるから、ちゃんと受け取ってね!」「え?」

自分のもとへ持ってきてくれると思っていたのだろう。油断していた涙が、慌てて両手を伸ばす。……しかし、遅かった。

次の瞬間、痛々しい音がした。涙の頭にノートの角が直撃したのだ。

「さやあ…」

「あつ……、るう、『じめん！』だ、大丈夫？」

「……へ、平気」

涙は引きつった笑みを浮かべ、瑠夏から目を逸らした。

きつと涙は気がついたのだろう。この手口は、涙が美衣子をいじめていた時のものとほとんど同じだという事に。

瑠夏が涙に“謝るフリ”をしている間に、京子は涙の机の上から筆箱を取つて素早く窓を開け、涙がこちらを振り返らないことを確認してから、それを窓の外へ投げ捨てた。筆箱はかなり遠くへ飛び、濁りきつた水の溜まつていてるプールへ音を立てて吸い込まれていく。

「本当にじめんね、るう」

「別に大丈夫だってば。じこも怪我してないから」

涙はぶつきら棒にそう言つて自分の机上に視線を振り、あれ？と間抜けた声をあげた。

「どうしたの？」

「筆箱が無い」

「え。うそ、何で？」

「あ……わざわざ机の上にあつたはずなのに」

不安げに表情を曇らせる涙を見て、瑠夏は心配そうに呟ついた。

「そつか、書くものないと宿題つづせないもんね。シャープペン、貸してあげる」

「え、ほんと？ ありがとー。それなら別に筆箱なんてなくてもいいや」

その嬉しそうな笑顔を見た瑠夏は、心中で毒づいた。まったく、涙の立ち直りの速さは尋常ではない。

「じゃあ、奈々。るうに何か貸してあげて」

それを聞いた涙は、意外そうな顔をして瑠夏の顔を見つめた。

「え、……瑠夏が貸してくれるんじゃないの？」

「別にいいじゃん。ね、奈々？」

いつの間にか廊下から戻つてきていた奈々は、自分の席に座つたまま口を尖らせて小ちく頷いた。

「……わかりました。で、涙さん、どれを貸せばいいですか？」

涙は若干奈々を睨みつけながら少し考える素振を見せ、笑顔を浮かべた。

「じゃ、とりあえず全部貸してくれる？」

「……」

奈々はそれを聞くが早いか、筆箱の中身を机の上にぶちまけた。そしていきなり、それを力一杯涙に向かつて投げつけ始めたのだ。

「痛つ！ ちよつ、やめてよー。」

奈々は何も聞こえない振りをして、更に力を込めて筆箱の中身を投げ続けた。涙の悲鳴や叫び声は、クラス中の人間に聞こえているはずだった。しかし、涙が美衣子をいじめていた時と同じように、クラスメイトは何も言わなかつた。こちらに視線を向けようとしたえ

しないのだ。涙はそんなクラスメイトたちに苛立ちながら、小さく蹲り必死に奈々の攻撃から身を守るひつとした。

「痛いっ！」

そんな中聞こえた、一際大きな涙の悲鳴。思わず瑠夏が様子を見ると、奈々の投げたコンパスの針が涙の手の甲に刺さって皮膚を破り、薄く血が滲んでいた。

滲む血を見つめて悔しそうに唇を噛み締める涙。奈々は自分の席から立ち上がり、こちらの方へ歩いてきて、涙に手を差し伸べた。

「……大丈夫ですか？　すいません、全部ついで言つから全部投げたんですけど」

奈々は悪びれた様子も無く、そう言った。涙は顔を上げて、そんな奈々を力一杯睨みつける。しかし奈々は怯むどころか、そんな涙を睨み返し、制服のポケットに手を突っ込んで絆創膏を取り出した。

「はい、これ、あげます。貼つておいた方が良いですよ」

まるで人事のようにじたばな吐き捨て、涙の目前に絆創膏を落とす。涙はあまりの屈辱に両手の拳を握り締め、怒りで体をブルブルと震わせた。そしてキッと顔をあげ、奈々に向かつて怒鳴った。

「奈々！　あたしに怪我させたの、わざとでしょ！」

奈々はいつもどおりの平然とした表情で涙を見下ろし、静かな声で、言つた。

「奈々、なんて呼ばないでください」

「……はあ？」

「よく考えたら奈々と涙をもつて、そこまで仲良くなじやないですか。だから、奈々のことは名字で呼んでください。親しくもないのに名前で呼ばれると気分悪いです」

涙は不機嫌そつに眉間に皺を寄せたが、ふんと鼻を鳴らして立ち上がつた。

「分かつたわ。その代わり、あんたもあたしの事名前で呼ばないでよ？」

「ええ、言われなくともそつあるつもつですよ。……葉山さん

その会話を聞いていた京子が、すぐさま話に割り込んだ。

「じゃ、あたしもそつまどるうと仲良くないかい、今度からは、京子つて呼ばずに名字で呼んで。あたしも今度から、るうじやなくて葉山さんつて呼ぶから」

「……」

涙は何も答えず京子を睨むと、瑠夏の方に視線を向けた。

「瑠夏は今までどおりでいいわよね。だつてあたしたち、親友じやん？」

親友、といひ言葉の響きに瑠夏は酷く嫌悪した。しかし、怒鳴り声を上げそつになる自分自身を抑え込んで、必死に怒りを沈下する。

「うそ。……良い、よ」

「だよね！ やつぱ瑠夏大好きー」

かつて、涙は美衣子にも同じ台詞を吐いていたはずだった。それなのに、美衣子はもうこの世にはいない。涙はもう美衣子の事を親友と呼ばない。それが悔しくて悲しくて、少し切なかつた。

第72話 復讐

翌日、京子は教室に到着した。時計の針が指し示している時間は、7時20分。いつもより數十分早い登校だった。教室にはまだ誰の姿も無い。

「おはよー、京子！」

数分後、元気良く教室に入ってきたのは瑠夏と奈々だった。京子は笑みを浮かべて、2人を振り返る。

「おはよー。」

「『めんなさい、奈々ちゃんと寝坊しちゃいました』

「大丈夫だよ。あいつが来るまで時間あるし。それまでに全部終わらせちゃえばオッケー」

3人は足取り軽く下足場へと続く階段を下りていった。

下足場に着いた3人は、真っ直ぐ涙の靴箱へ足を運んだ。

「美衣子の時は外靴だったから、今回は上靴やつちやおうか

「上靴？ あはは、それは困るよねー」

「いいじゃないですか、思い切りこらしめてやりますよー」

靴箱を開け、上履きを取り出す。

「美衣子の時は……確か土を詰めたんだよね」

「今日は画鉛でも入れよつか

片方の靴の中に教室から持つてきた画鉛を詰める。いくつかの画鉛が靴の中に刺さつてしまつたが、お構い無しに続けた。

「もう片方はどうする?」

「美衣子の時は埋めたよね」

「それなら今回はもつと酷い方法で使えなくしてやります」

奈々はそう言つが早いか、涙の靴をもつてどこかへ行つてしまつた。それを待つてゐる間に、瑠夏と京子は続けて靴箱にも嫌がらせをしようと企んだ。

「流石にまた中傷落書きはやばいかなあ。すぐバレそうだよね」「じゃあどうしよう? あ、忘れ物入れに赤い絵の具があるけど……」

「あ、それ使えるかも」

2人は忘れ物入れの中から絵の具を拝借し、赤い絵の具を直に塗り付けて涙の靴箱の中を真っ赤に塗つた。

「……ただいま戻りました」

赤に染められた靴箱が出来上がり、暫くして帰つてきた奈々の手には、墓場に落ちていたという大量のカラスの羽と菊の花が握られていた。

「これ、中に詰めたらいいんじゃないでしょうか……何となく不気味ですし」

「うん、全部入れよ

カラスの羽と菊の花を靴箱に詰める。奈々が持つて行つた片方の上靴は、焼却炉で灰になつたらしい。

その後3人は教室に戻り、涙の机やロッカーの中を物色した。机の中には大量のノートや教科書、ロッカーの中には体操着とジャージが丁寧にしまつてあつた。3人は迷う事なく教科書やノート等を1枚ずつ破つてシュレッダーにかけ、そのくずは適当に教室のゴミ箱に捨ててしまった。体操着とジャージは男子トイレの個室に丸めて捨ててきた。用を足そと入つた男子が見つければ、きっと大騒ぎになるだろう。

第73話 悪魔

やがて登校時刻になり、クラスメイトが次々に教室に入ってきた。

「ねえねえ、凄かつたよね。涙ちゃんの靴箱！」

「ああ、見た見た！ 真っ赤になつてたよね。誰がやつたんだろう？」

そんな会話を耳にしながら、瑠夏たちは笑顔で談笑を続ける。それから暫くして、教室の扉が乱暴に開いた。瑠夏たち3人は一瞬扉の方を見て、顔を見合させて唇を引き結んだ。……涙が来たのだ。

涙は俯き加減で、しかし力強くこちらに歩いてきたが、自分の机の前で足を止めた。机の上に、小さな菊が花瓶に入つて風に揺れている。無論、その菊は瑠夏たちの仕業だつた。涙は舌打ちをし、花瓶ごとその花を鞄ではらいのけた。

鋭い音がして、床に落下した割れた花瓶からは液体が溢れ出る。それを見て、周りにいたクラスメイトたちが小さく悲鳴を上げた。花瓶から出てきた液体は透明では無く、真っ赤だつた。まるで血のような色をした赤。

涙は何も言わずにポケットティッシュを取り出し、その液を残らず拭き取つた。

そのまま涙は表情一つ変えず、席に座つた。床に落ちたままの花瓶の欠片を片付けようともしない。痺れを切らした瑠夏は静かに立ち上がり、笑みを浮かべて涙の方へ歩き出した。

「おはよう、涙」

涙はゆっくりと顔をあげ、瑠夏を軽く睨んだ。瑠夏が“るう”から“涙”と呼び方を変えたことに気がついたようだ。しかし涙はす

ぐに『勝ち誇ったような顔』をして、にたりと笑つた。

「おはよ、瑠夏。それから……『前田さん』と『中田さん』」

「おはよつ葉山さん」

「おはよひざわこまむ、葉山さん」

瑠夏は涙を軽く睨んでから、明るい声を出した。

「あのせあ、涙。見たよ、下駄箱。凄い事になつてたね」

それを聞いた涙は、うん、と頷いてクスクスと笑つた。

「正直、もうちょっと凄い」とそれでるかなつて思つてたんだけど、案外普通だつたわね。やつた奴らは相当幼稚だつたとしか思えないわ。頭が足りない人たちなのね、きっと」

瑠夏はその言葉に眉を顰めた。涙は、下駄箱を使い物にならなくした犯人が瑠夏たち3人だと知つた上でこんな憎まれ口を叩いているに違いない。

「ねえ、涙」

瑠夏はぱつと手を伸ばして、涙の胸ポケットからはみ出していた財布を奪い取つた。その財布は、普通の女子中学生には到底手が届かないような、有名ブランドの長財布だ。

「これって本物だよね？ 初めて見たー。ってか涙つてこんなに金持ちだつたっけ」

涙は何も答えない。ただ瑠夏を睨みつけている。瑠夏はおもむろ

に財布の中身を確認し、必要以上の大声で叫んだ。

「何いじれ！ 諭吉さんばっかりじやん！」

焦りと好奇が入り混じった声で悲鳴を上げながら、札を取り出して1枚1枚数える。

「一万円札が一枚二枚三枚…………え……27万！」

予想だにしなかったその金額に、瑠夏は無意識の内に大声を上げていた。クラスメイトもその声に驚いたようで、こちらの方に視線を注いでいる。

瑠夏は恐る恐るそれを涙に返すと、引き攣った笑みを浮かべてこう尋ねた。

「も、もしかして涙つて……援交してるの？」

クラスメイトが瑠夏のその一言でざわつき始めた。不快そうに眉を顰める女子、ニヤつきながら涙を見る男子。全ての人間が涙を軽蔑と好奇の眼差しで見つめていた。涙は勝手な想像をされることに腹が立つたらしく、真っ赤な顔をして大声で怒鳴った。

「うるさいわね！ 黙りなさいよー！」

しんと静まり返る教室内。涙は腕組みをして教室内を睨みつけると、耳を劈くような大声で叫んだ。

「Jのあたしが援助交際なんてやつてるわけないでしょ？ ただ、変態ストーカーに美衣子の情報を売つて稼いでただけ。悪い？」

第74話 葉山涙

涙がそう言い放った瞬間、また教室内が静まり返った。瑠夏が1歩涙の方へ歩み寄り、赤い瞳をそちらに向けた。

「酷いよ、涙……」

教室内の全員の視線が、瑠夏に向く。瑠夏の頬に大粒の涙が流れ落ち、床に水滴を作る。

「美衣子は最後まで頑張つてた。負けないつて言つてた。涙とまた友達になりたいって……言つてた。あんなに酷い事したのに、あたしたちともまた友達に戻つてくれた。……あんなに苦しませたのに」

涙はそんな瑠夏を蔑んだような目で見詰め、腕組みをしたまま仁王立ちになつている。瑠夏は更に涙の方へ詰め寄り、涙声で続けた。

「美衣子は、雪山先輩と付き合つてたこともあたし達に話そうとしてたはずだよ。でも、それを邪魔してたのは、他でもない、あたし達なんだよ！　あたし達はいつも美衣子の話を聞こうとしなかつた。いつも自分達の話ばかりして、美衣子はずつとそれを笑顔で聞いてるだけだった。…… 親友、だつたのに……」

嗚咽を洩らす瑠夏。涙はそっぽを向いて、片手で肩にかかつた髪の毛を払い退けながら、自分の財布を開けて中身を確認し始めた。

「ねえ涙、あのストーカーに美衣子の情報を売つたのは涙だつて言ったよね？　雪山先輩が殺されたのも、マンションに忍び込ませたのも全部、涙の情報のせいだったの？　どうしてそこまでする必

要があつたの……。なんで、どうして美衣子を、あんなになるまで痛めつけたのよー。」

瑠夏はそれ以上言葉を紡ぐことができず、その場に泣き崩れた。涙は財布を再び胸ポケットに入れて、そつと瑠夏を見下ろして唇を噛み、暫くの間潤んだ目を瑠夏に向けた。声を震わせながら、瑠夏の名前を呼ぶ。

「……瑠夏」

「涙……」

何も言わず、見つめ合つ2人。不意に、涙が口の端を吊り上げて笑つた。

「言いたいことはそれだけ？」

次の瞬間、涙は瑠夏の腕を片足で力一杯踏みつけた。地面と皮膚が擦れ合う痛々しい音が、周囲の人の耳にまで届いた。瑠夏は大きな悲鳴を上げ、その場でのた打ち回る。慌てて京子と奈々が瑠夏に駆け寄つた。

「瑠夏！ だ、大丈夫？ しつかりして！」

「涙さん……酷いです！ なんてことするんですか！」

瑠夏は腕を押さえて泣きじやくつている。見たところ折れではないようだが、痛々しく赤く腫れあがつてしまっていた。涙は瑠夏たちに背を向けて歩き出し、教室の真ん中で両手を広げ、叫んだ。

「あんたたち、綺麗事ばかりでウザいのよー。あたしはもう雪山なんてどうでも良かつた。でも、強いて言えば楽しかったの。美衣

子が泣いて許しを請つさまを上から見下してゐるの感じが、なんと
もいえない快感だつた！」

教室内に居た誰もが凍りついた。瑠夏たちだけでなく、クラス中
にいた女子、男子全員。今まで一度も涙たちに興味を示す事が無か
つたクラスメイトが、その瞬間確かに自分達の話を止めて涙を見た。
涙はその空氣にうるさえたるどころか、逆に嬉しそうに笑いながら微
笑んだ。

「大体、死んだ奴の事を、今更ゴチャゴチャうるさいのよ。あんな
奴どうでも良いじゃない。痛みも何も感じない、ただの人形オモチヤだつた
んだから」

信じられない台詞だつた。本当に血の通つた人間なのかと疑いた
くなるほどに。

誰の目にも、確かに美衣子は1人の人間として映つていた。しか
し涙の目には、美衣子はただの人形として映つっていたのだ。
涙がほんの少し弄れば、彼女の掌でくるくると踊り狂う、ただの
人形。その人形をちょっと強く弄つたら、涙の掌の上で人形は壊れ
てしまつた。涙にとって、美衣子の死はただそれだけの事だつた。

「 ちょっと待つて。それってさ、」

誰かが、声を震わせながら呟いた。4人の中の誰でもない、“傍
観者”のクラスメイトの女子だつた。彼女は唇をわなわなと震わせ、
ごくりと唾を飲み込んだ。

「それつてもしかして、美衣子ちゃんが死んだのは涙ちゃんのせい
つてことなの？」

涙は鼻で彼女を嘲笑った。

「はあ？ 部外者は黙つてくれる？ しかも、殺したとか人聞き悪いわねえ……あいつが勝手に壊れただけよ」

その言葉を聞いたクラスメイトの男子の1人が、涙を指差して大声をあげた。

「何言つてんだよ、葉山！ 僕達は全員、お前が春風に嫌がらせてたの、ちゃんと見てたぜ？」

「あはっ、それじゃあ聞くけど……あんた達は誰一人として、それを見てもあたしを止めなかつたよね」

「それは……そうだけど、でも、ちゃんと見てたんだからな！」

「“見てただけ”でしょ？ ……ねえ、傍観者も共犯者なのよ。つまり、今文句つけてるあんたもあたしの共犯つて事。あたしが美衣子を殺したって言つなら、あんたも美衣子を殺した事になるのよ」

男子は、うつと呻いて、悔しそうに俯いた。あまりにも幼稚な屁理屈だが、筋は通っている。事実、このクラスの人間はいじめがある事を知っていたが、見てみぬ振りをしていた。それどころか一時期はクラス中の女子全員が涙の味方になつた。

「あははは！ ほら、そういうわれれば何も言い返せなくなるでしょ？ あんたたちみたいのが一番痛いのよね。今まで知らん顔してたくせに、いきなり正義のヒーローぶるとか……馬鹿じやないの？」

涙は大きく笑い声をあげながら自分の席に着いた。

「ほら、授業始まるわよ、みんな……」

机の中に手を入れた涙は、怪訝な顔をして眉を顰めた。昨日机の中に入れておいたはずの教科書やノートが無いのだ。

「……」

涙は瑠夏の方を睨み、再び立ち上がる。

「下らない嫌がらせ、どうせあんたたちでしょ？ 返しなさいよ、あたしの……」

瑠夏はまだ腕の痛みで涙目になつていて、そんな瑠夏の代わりに、京子が涙に向かつて何かを投げつけてきた。それは涙の頬に当たつてから床に落ち、碎け散つた。ガラスで出来た瓶だ。

瓶の中には細切れになつた紙屑が入つていた。涙の教科書の変わり果てた姿だ。涙は目を細めてその紙屑を見下ろすと、

「忌々しい」

そう呟いて、再び席に座りなおして頬杖をついた。

1限目は美術だった。

「今日は皆で絵を描きましょう。どんな絵でも良いから、あなたの描きたいものを自由に描いてください。素敵な絵を期待しています」

優しげに微笑んだ教科担任はそれだけ言って、みんなの絵を見学に回った。

瑠夏、京子、奈々は固まつてせつせと絵を描いている。しかし、涙は一人ぼつんと席に座つて、じつと真っ白なキャンバスを見つめていた。

(……何描いていいのよね。それならもうちょっとあの馬鹿共を怒らせてみようかしら)

涙はにたりと笑い、キャンバスに筆を走らせ始めた。

* * *

先生はにこやかに1人1人の絵を見て回り、1人1人と会話を交わしている。そして、涙の絵を見た先生は、あら……と声を上げた。

「葉山さん、それはなあに？ 人形かしら？」

涙のキャンバスには、大きな掌の上で踊っている、小さな人形が描かれていた。

「操り人形です」

涙は筆を止めることがなく、淡々とそつ答えた。先生は更に優しく微笑むと、涙の絵を覗き込んで褒めた。

「素敵な人形ね。とっても可愛らしいわ」

それを聞き、涙は一瞬筆を止めて先生の顔を見上げた。

「そうですか？ 可愛らしくなんてないですよ、この人形」「あら、どうして？」

先生の不思議そうなその言葉に、涙は待つてましたとばかりに笑みを浮かべた。

「この人形はね、すぐに壊れるんです。馬鹿で脆くて、役立たずなんです」

そう言つが早いが、涙は人形の上に黒い絵の具を塗つた。可愛らしく微笑んでいた人形の顔が潰される。醜く、汚く。

涙は更に黒の上から原色の青黒い絵の具を重ね塗りし、迷つ事無く筆洗い用の汚い水をキャンバスに浴びせかけた。その瞬間先生は小さく悲鳴をあげ、片手で口を押さえて両目を見開き、眉間に皺を寄せた。

「葉山さん、せっかく描いた絵なのに、どうしてこんなことを……」「この絵はこれで完成なんです」

「で、でも……これじゃあ水浸しよ？」

「それでいいんです。この絵は水浸しがいいの。水に浸つてふやけて、どんどん汚くなるのが良いの」

あいつみたいに、と涙は小さく付け足して、喉の奥から引き攣つたような笑い声を上げた。その時、

「 もやつー 」

涙は大きく悲鳴をあげた。真っ赤な水が頭から浴びせられたのだ。

「 うー、ごめん、足が引っかかっちゃって…… 」

慌てた様子でハンカチを取り出し、涙の制服を必死に拭こうとしているのは…… 瑠夏だった。涙は瑠夏を力一杯睨んだ。瑠夏はそれに気づいて笑みを浮かべ、涙にしか聞こえないほど小さな声で囁いた。

「 血の色、お似合いよ 」

先生はオロオロと涙にタオルを手渡し、焦ったように両手で顔を包んだ。

「 大変！ 油性ポスターカラーだから、落ちないかもしれないわ。葉山さん、早くお手洗いに…… 」

「 わかつてます 」

涙は先生の手を振り払うようにして立ち上がると、瑠夏たちの絵を盗み見た。

3人はそれぞれ違う画用紙に、全く同じような絵を描いていた。黒く禍々しい背景に、助けを求めるような、今にも画用紙から飛び出してきそうな1人の少女が描かれている。そしてその少女の全身には赤い絵の具がべったりと塗りつけられ、地面から飛び出した手に引きずり込まれようとしている。

涙は気づいていた。この少女が自分をイメージした人物だという事に。

ふと周りを見回すと、他のクラスメイト達の絵もそれと全く同じ構図だった。言い知れぬ恐怖心を覚えた涙は、今日何度も目かられない舌打ちをし、美術室を飛び出した。

「は、葉山さん？……お手洗いに行つたのかしら、あんなに急いで……」

呆然とする先生の目の前で、京子が自分の描いた少女の絵に、ライターで火を点ける。焦げる匂いと共に少女の絵が焼かれていった。それを見ていた1人の女子が、京子の方に手を伸ばした。

「京子ちゃん、私にもライター貸して」

京子は軽く微笑んで、彼女にライターを手渡した。

「はい」

「ありがとう」

その女子もまた、自身で描いた絵に火を点けた。それを見ていた隣の女子も、ライターを借りて自分の絵を燃やす。あちらでも、こちらでも火が点つた。美術室には紙の焦げる臭いが充満していく。

「ちよ、ちよっとみんな、何してるのー？」

先生が慌てて止めに入ろうとしたが、誰もその行為をやめようとしなかった。瑠夏が振り向き、先生に向かつて冷たく言い放った。

「止めて下さい先生。この絵は……」

少しの間を置き、クラス全員の目が、不安げな顔の先生に集まる。

「これで完成なんですよ」

第76話 少年

涙は屋上に来ていた。怒りで肩をぶるぶると震わせながら。赤く染まつた制服は屋上の風で少し乾いたが、まだ若干湿つていて冷たかった。

「あいつら、調子に乗じやがって」

歯軋りをし、コンクリートで固められた地面を蹴りつける。髪の毛を両手の指で搔き鳶り、荒々しく溜息を吐いた。

「ふざけてんじやないわよ！　おまえらだつてあたしに賛同してたくせに！…………」^{つづいて}かしてあいつら、全員黙らせなくちや

苛立ちを言葉にして吐き捨てたその時、後ろから足音が聞こえた。自分を追いかけてきたクラスの連中か、それとも、自殺だと勘違いした教師の連中か……。どちらにしても面倒だ、と眉を顰めて振り返る。

涙は目を丸くした。そこに立っていたのは、小柄な男子生徒だったのだ。同じ学年の男子ではない。しかし、見覚えのある顔だった。何度も見たことがある気がするが、あまり良く覚えていない。

「……誰？」

涙は顔を顰め、少し強めな口調でそう訊いた。男子はその問い合わせをして、小さく俯いて答えた。

「お、俺……ええと、1年C組の、岸本棟です。…………その……、一応、葉山先輩と同じ、保健委員なんですが……」

「……あーそうだけ？ で、何？」

棗は首を横に振ると、蚊の鳴くよつよ細い声を出した。

「いえ、葉山先輩には特に用は無いんです。けど、一時間目の体育で気分が悪くなっちゃったから、ほんの少しだけ風にあたりたいなと思つて……」

歯切れの悪い説明にさえも苛立ちを感じ、涙は口を尖らせて片手をひらひらと振つて見せた。

「悪いけどあたしが先客だから帰つて。ばいばいーー

「あ……はー……」

悲しそうに頃垂れて、棗はどうぞと入り口に向かつて歩き出しだ。

(はあ、やつと静かになるわ)

しかしそう思つたのも束の間、棗は涙から少し離れた場所に座り込んだ。その行動に驚き、涙は棗に詰め寄る。

「ちょっと、聞こえなかつたの？ あたしが先客だから帰つてつてばー！」

「え、あ、……すみません。でも、その、やっぱり風にあたりたいから、ここにこさせてください。絶対先輩の邪魔はしませんから。……あの、それでもダメ、ですか？」

肯定しかけたが、流石にそこまで後輩を邪険に扱うわけにもいかないかと思つた涙は、小さく溜息を吐いて頷いた。

「あつせ、じゅあ好きですかば？」

「は、はー……。すみません、あつがとりいぢれこます」

心底嬉しそうな棗の笑顔を見た涙は、口をくの字に歪めた。

(変な子)

涙は、棗に出会ってから毎日屋上に足を運んでいた。それも休憩時間だけではなく、授業時間でもお構いなくだ。

「死ね！ ウザいんだよ！」

大声をあげて屋上の扉を蹴り飛ばし、狂ったように辺りを殴つたり蹴つたりしながら大声で喚き散らす。

「みんな死ね！ 死ね！ 死ね！ バーカ！」

美術の時間に集団嫌がらせを受けてからクラスメイトからのいじめは工スカレートしていつたが、涙は強かだった。毎日学校へ通い、瑠夏達を挑発し、嘲笑し、面倒臭くなつたら屋上へ避難する。

涙は、例えいじめられていてもまだ優位に立つていてるのは自分自身だと強く信じていた。

「あーあーもう調子に乗るんじゃないわよ。何を今更善人ぶつてのかしら。偽善者な自分に酔つてるつもり？ ほんと、吐き気がするわ」

咳きながら拳でフェンスを殴るとがしゃんと音がして、じんわり痛みを感じた。

その時、背後に微かな気配を感じて、振り返る。隠れていた人物は、涙と田が合つと少し恥ずかしそうに舌を出した。

「何よあんた。今日も来てたの？」

照れ臭そうに「ここから出てきたのは、棗だった。

「また気分悪くなっちゃったんで」

「あんたねえ、1年のうちから授業サボるなんていい度胸じゃない」

「先輩だってまだ2年生じゃないですかー」

無邪気に笑い声をあげる棗。まるで子供のよつなその笑顔に、涙はいつの間にか心を癒されるようになっていた。体を休める場所に屋上を選んだのも、少しほここの棗の存在が絡んでいると言つても過言ではない。

「あ、そつだ。先輩これ飲みませんか？」

棗はそう言つて、涙にホットココアを手渡した。自販機から買つたばかりらしく、まだ少し熱い。

「ありがと、ちゅうじ喉渴いてたの」

迷わずそれを受け取つて、涙は缶の中身を口の中へ流し入れた。甘い香りと味が口いっぱいに広がる。

棗はゆっくりと涙の隣に腰掛け、同じ様にホットココアの蓋を開けた。

「そういえば今日もすこかつたですね、先輩の愚痴」

「あんた、また聞いてたわけ？」

「そりやあ聞こえますよ、あんな大声で叫んでもたら」

1階の教室まで聞こえてんぢやないですか、と冗談っぽく笑う棗。その横顔を見詰めながら、涙はもうこちびココアを啜つた。

「そうそう、先輩、この間数学の授業でクラスの奴が……」

トらない世間話を始めるのは棗からだ。涙はいつも黙つてその話に耳を傾ける。じつして棗と話をする事も、密かに涙の日常の一部になっていた。

「でね、その時そいつってば、」

「ねえ棗」

棗の話を遮つて、涙は口を開いた。涙の真剣な表情と口調に、棗は驚いたように目を丸くする。

「はい。何ですか？」

「あたしが毎日授業サボつて屋上にきて、大声で怒鳴つてる理由、知つてる？」

棗は暫し考え込むよつに押し黙つた後、首を真横に振つた。

「いえ……」

涙は軽く鼻で笑つた。それが棗に対しての嘲笑だったのか、それとも自分に対する嘲笑だったのか、明らかでは無い。

涙はホットココアの缶を地面に置くと、棗の方を向いてこう言つた。

「あたし、クラス全員からいじめられてるの」

棗はそれを聞いた瞬間、ココアの缶を地面に落とした。缶が転がり、地面に茶色い染みを作る。

「……え、え！ それ、ほんとですか？」

「うん。今日もノートに、ギブリの死体挟まれてたのよ。マジ、陰湿でしょ？ この間なんて家にあたし宛の手紙が届いて、その中から虫の死骸がいっぽい出てきたの。あはははっ、馬鹿みたいよね。そんなのであたしが参ると思つてたわけよ、あいつら」

授業の始まりを告げるチャイムが鳴る。涙は次の授業に出るつもりはなかつたので、さほど気にも留めなかつたが。不意に、棗がぴんと背筋を伸ばした。恐る恐ると言つた風に涙の顔を覗きここんでくる。

「あの。先輩、それって、原因とかは無いんですか？」

思いもよらなかつた一言に、涙の目が大きく見開かれる。棗の事だから少しば慰めてくれるかと思つたのに。涙は気分を害し、頬を軽く膨らませながら尋ね返す。

「何よそれ。どういう意味？」

これは俺の勝手な推測なんですけど、と棗は地面上に転がったココアの缶を拾い上げながら呟いた。

「いじめって、何か原因が無かつたら起こらなこと思つんですよ。たとえば、先輩が最初に誰かをいじめていたとか……そういうことはなかつたんですか？」

「……それは……」

思わず口籠つてしまつた涙に、置み掛けるように棗の追求は続く。

「先輩は本当に何もしてないんですか？ 先輩は何も悪くないんで

すか？」

「……」

「もし何か思い当たることがあるのなら、クラスの人にくちんと謝るべきだと思います。そしたらきっと……」

棗は何も知らないはずなのに、痛いところをピンポイントで突いてくる。涙は勢い良く立ち上ると、耳を塞ぐ真似をしながら棗を怒鳴りつけた。

「うるやうるさうるさい！ 調子にのるんじゃないわよ！ あんたには関係ないし、あたしは何も悪くない！ 悪いのは全部向こうなんだから、あたしが謝つたりする必要なんかないわ！ ……つたく、ちょっとスキを見せるところなんだから。ウザい後輩ね、あんた」

涙はそのまま逃げるよつに屋上を後にした。階段を駆け下り、息を荒げながら近くのトイレに駆け込む。

腹が立つた。悲しかった。棗なら慰めてくれると、少しは自分に賛同してくれると思つていたのに。なんで怒られなければいけないのだろう？ どうして自分が。

注意される事や悪者扱いされる事にはもう慣れてしまつていたし、どうでも良くなつていた。しかし、注意された相手が棗だつただけで、こんなにも腹が立つ。

棗には悪者扱いされたくなかった。味方でいてほしかつた。大丈夫ですよと励ましてほしかつた。

その時、涙はふと思い出した。この感情は、あの時と同じものだ。美衣子をいじめていた時に雪山先輩に怒られたときと、同じ感情。好きな人に注意されたり怒られたりすると、悔しくて、悲しくて、惨めな気分になる。自分の味方が誰もいなくなつてしまつたような気持ちになる。今の涙が感じているのは、それと全く同じ気

持ちだつた。

涙はハッと思をのみ、トイレの鏡に映る自分の顔を見つめた。心臓が早鐘のように激しく脈打つ。涙はそのまま目を閉じ、小さく呟いた。

「あたし、棗の事が……」

涙が自分の気持ちに気づいてから、1週間の月日が経過した。しかし、あれから涙は屋上に訪れていない。気まずい思いをするのが嫌で、どうしても行けなかつた。あんなに酷い事を言つた後なのに、どんな顔をして会えば良いのだろう。

この1週間、依然としてクラスメイトからの嫌がらせは続いていたが、今は棗の事で頭がいっぱい、正直言つてそれどころではなかつた。

この日も涙はいつも通り登校し、下駄箱に足を運んだ。上履きの中にいくつか画鋲が入つている。上履きを逆さにして、中に入つていた画鋲を床に落とした。

その時、靴の中から画鋲と一緒に小さな紙切れが落ちてきた。四つ折の紙。ノートか何かを破つたものらしい。新しい嫌がらせの手かとも思ったが、一応開いて確認してみる。文面を読んだ涙は目を見開いた。

それは棗からの手紙だつたのだ。

『葉山先輩、今日の放課後、下校時刻が過ぎてから屋上に来てください。話したいことがあります。岸本棗』

心臓が破裂しそうになるほど速く脈打つ。頭がぐらぐらして、立つて居られなくなつた。

下駄箱に寄り掛かつて、うつとりと溜息を吐く。

棗が誘つてくれた。棗も自分に会いたいと思つてくれていたに違いない。

涙はそつとその手紙を胸に当てるとい、明るく笑みを浮かべて教室に向かつた。

* * *

その日は一日中何度も時計を確認した。こんな時は時間が遅く流れているような錯覚に陥ってしまう。

クラスメイトからの暴言や嫌がらせを受けても何をされても、この日は全く気にならなかつた。

放課後に待つていて幸運を想像すると、自然と頬の筋肉が緩んでしまう。こんなに嬉しくて幸福な気持ちになつたのは、美衣子と雪山が死んだ日以来だつた。

第79話 屋上

下校を告げるチャイムが校内に鳴り響いた。ようやく待ちに待つ放課後がやってきたのだ。

下校時刻を5分ほど過ぎてから、涙は席を立った。教室には誰も居ない。セピア色の教室は、昼間の騒がしさからは想像もつかないほど静かだった。

鞄を片手に、急ぎ足で屋上に続く階段を上っていく。屋上の扉が見えてくると、無意識のうちに階段を上るスピードが上がった。そこを上れば、棗がいる。涙は扉に手をかけて、深呼吸をした。

「あ、先輩。来てくれたんですね」

扉を開けると、そこには棗の笑顔があつた。

「棗！」

大きく手を振りながら、棗の方へ駆け寄る。棗はにつこりと微笑んで手招きをした。立ち入り禁止の札がかかつたロープの向こうに、彼は立っていた。

涙は躊躇いもせずそのロープをまたぎ、棗の目の前へ向かう。

「すみません、いつものフォンスの場所じゃなくて」

棗は少し申し訳無さそうに俯いた。今涙たちが立っている場所は大分前にフェンスが壊れ、一步足を踏み外したら落ちてしまいそうな状態だった。

涙は、棗が目の前にいることにかく嬉しくて、笑顔で首を横に振った。

「別に平気よ」

棗は嬉しそうに微笑んで、思い出したよつて両手を叩いた。

「そうだ、先輩。あの手紙、読みましたよね？」

「もちろんー。これでしょ？」

ポケットにしまっていた手紙を棗に見せると、棗はそれを涙の手から取り、自分の制服のポケットにしまった。

「これは俺が持つておきますね。誰かに見られたら恥ずかしいですし」

棗のその台詞で、涙の心は跳ね上がった。あまりに自分勝手な妄想なので自重していたが、やはり、この雰囲気は告白なのだろうか。乾いた唇を舐めて棗を見詰めると、棗は優しげに微笑んだ。

「俺、先輩に言いたいことがあるって書いてましたよね」

「え、ええ」

「えっと、棗は……」

棗はそつと目を瞑り、すぐに目を開けると、涙の目を強く睨み付けた。

「会つてもりたい人たちがいるんですね」

第80話 真実

会つてもらいたい人？涙が口を開くよりも早く、両端の物陰から沢山の人影が現れた。振り返ると、後ろにも。

涙を取り囮んだ人物たちは、彼女が良く知っている顔ばかりだつた。瑠夏、京子、奈々をはじめとする涙のクラスメイト全員が、恐ろしい目をして、涙を睨み付けている。

流石の涙も足が竦んでしまった。助けを求めるように、涙に視線を振る。

「なつ、め？」

涙の瞳には、田の前にいるクラスメイトたちと同じように、殺意と怒りと憎しみの色がくっきりと浮かび上がっていた。

「先輩、すみません」

両足を引き摺るようにして一歩前に出た涙は、震える涙を目の前にして、顔を上げた。

「さよなら」

突き出された涙の両手は涙の肩を押し出した。その瞬間、涙の体は強く重力に引っ張られた。

大きく悲鳴を上げて両手を振り回し、涙は辛うじて地面の端を掴む。脂汗と恐怖で、今にも手が滑りそうだ。下はコンクリートで出来た地面だ。ここから転落したら、確実に命を落とすだろう。

「助けて、涙！」

必死に助けを求めるが、棗は冷たい瞳を涙に向けるだけだった。

「どうして……？」

涙は放心したように棗に問いかける。棗は俯き加減で、口を動かした。

「美衣子先輩……」

その名前を聞いた瞬間、涙の体が強張った。体中に電流が流れたよつの衝撃に、思わず手を離しそうになる。

「美衣子？」

涙は戸惑いを隠せず、困惑した表情を浮かべている。棗の瞳から大粒の涙が零れた。呆然とする涙を睨み付けて、棗は涙混じりの声でこう語つた。

「俺、小学生の時から美衣子先輩の事が好きだつたんです。美衣子先輩は誰にでも優しくて明るくて、俺の憧れの人でした。でも……今年の初めに雪山先輩つて方とお付き合いされ始めたつて知つて……。俺、正直ショックだつたけど、心から2人の幸せを願いました」

涙は愕然とした。今までに見た事の無い形相で、あの棗が自分の事を睨んでいる。どれだけ突っぱねても優しい笑顔を浮かべてくれていた棗が、殺意の籠つた目でこちらを見ている。

「それなのに、2人とももう逢つ事の出来ないところへ逝つてしましました。雪山先輩が亡くなつた時はただびっくりしました。でも、

その後美衣子先輩も亡くなつたって聞いて、明らかにおかしいと思つたんです。俺の知る限り美衣子さんは強い人だつたから、後追い自殺なんてするはずないつて……。俺はずつと美衣子さんの死の真相を知りたくて、少しでも解ることがあればと美衣子さんの葬儀に参列させて頂きました。そしてそこで瑠夏さん達に会つて、貴女の存在を知つたんです

「棗は服の袖で涙拭い、涙を冷たく見下ろした。

「俺は、貴女が許せなかつた。だけど、もし、もしも美衣子さん達の事、少しでも反省してくれていいなら、貴女を許したかつた。だつて、……だつて、貴女は美衣子さんが大好きだつた親友ですから。だけど貴女はそのチャンスを自分から撥ね退けたんです。はつきり言いましたよね？ 自分は悪くない、悪いのは全部あいつらだつて……そう言いましたよね？」

熱を帯びた棗の涙が、ぽつぽつと涙の手の甲に落ちる。涙はぼやける視界で棗の顔を見詰めたまま、唇を引き結んでいた。
泣きたくない。泣きたくない。美衣子が好きだつた男に涙なんて見せたくない。

「今まで、反抗して疲れなかつたですか、先輩。全てを捨てて、辛くなかつたですか、先輩」

棗の問いかけに、涙は鼻を鳴らした。最後の、精一杯の反抗。

「辛くも悲しくも無いわ、あの女はあたしの玩具だつたんだから

それを聞いた棗は何度か瞬きをして、涙が地面を掘んでいる手に自身の足を載せた。

「ねえ棗あたしはね、あんたを、」

次の瞬間、指先に鋭い痛みが走る。

涙は無意識の内に手の力を緩めていた。心臓が跳ね上がるような不思議な気分と共に、棗とクラスメイトの姿が遠くなっていく。

(あんたを、)

涙は地面に叩き付けられるまでの数秒間、自嘲的な笑いを口許に湛えていた。

自分はあの男に一体何を伝えるつもりだったのだろう。あの女を好いていたあの男に、何を。

次の瞬間、涙はコンクリートの上に落下した。骨が崩れる音が聞こえた気がしたが、恐らく錯覚だろう。

それから涙は、思考する事が出来なくなつた。体が痙攣し、口の端から血が噴き出す。そして涙は目を閉じた。

最後に彼女が何を考えていたか、それは誰にも解らない。

第81話 爭いの終わり

棗は地面に叩きつけられた涙を見た瞬間、瞼を硬く閉じ、その場に尻餅をついた。自分自身を強く抱きすくめて、ガクガクと震える。額から嫌な汗が滲み出た。

瑠夏が静かに棗に歩み寄り、その体を抱き起ししながら恐る恐る涙の状態を確認した。

赤い絨毯のように広がる血だまりに、涙の体が静かに横たわっている。涙はびくりとも動かない。うつ伏せに倒れているので、涙がどんな表情を浮かべているのか解らなかつた。

酷く変わり果てた涙を見下ろす瑠夏の頬に、涙が流れ落ちた。

棗はまだ震えながら自分の両手を見つめている。そんな棗の頬にもまた、先程までとは違つ意味の涙が流れていった。

「俺は……こんな終わり方、望んでた、わけじゃないのに……。ほんとは、ほんとは誰も苦しまずには普通に、みんな生きて欲しかつた……。雪山先輩も美衣子先輩も……。それなのに……」

自分には何も出来なかつた、と自分を責め、咽び泣く棗。瑠夏と奈々と京子はそんな棗を、静かに見つめていた。

自分達も何も出来なかつた。何一つ、護る事ができなかつた。全てを護ろうとして、全てをダメにしてしまつた。大切なことを一瞬でも忘れてしまつていた自分達のせいだ、歯止めの利かなくなつた涙の暴走をこんな形でしか止められなかつた。

そう、全ての始まりは涙の嫉妬から始まつた。瑠夏たちは涙を止めようとせず、壊れかけていた涙に協力する事を選んだ。それが傷付いた涙に対する最大の善だと信じていた。

そしてその結果、美衣子も涙もこの世から消えてしまつた。否、

消してしまつたといつ方が正しいかもしない。

史上最悪とも言える生徒同士の争いは、一番悲しい形で幕を下ろした。

最終話 親友のそれから

今も鮮明に脳裏に焼き付いている、涙の声、言葉、笑顔。あれから3年の時が経った今も、一向に色褪せない記憶。忘れない、否、忘れてはいけない、記憶。

涙と初めて出会ったのは小学生の時だった。隣の席になったのがきっかけで、そのまま何となく一緒にいるようになつた。やがて中学校に入り違う小学校出身の子達と仲良くなつて、その中で一番親しくなつたのが美衣子だった。

涙は本当に明るい子で、話す度、ああこの子と友達になれて良かつたなど心から思った。美衣子は優しくて可愛くて、話す度に癒されて幸せな気分になれた。

そんな自分達の関係が崩壊したのは、3年前。あんなに強いと信じていた絆は、非道く簡単に崩れ去つた。

何故、あたしはあそこで涙や自分達の行動を止められなかつたのだろうかと思う。どうして協力してしまつたのだろう。どうして他に協力者を募つてまで美衣子を虐げようとしたんだろう。

中学生とはいっても、きっとあたしたちはまだ精神的に未熟で幼いところがあつた。それが全ての悲劇へ繋がつたのだ。

涙を傷つけた美衣子を憎み、美衣子を殺した涙を憎み、今は自身を強く強く憎んでいる。しかしたつたひとつ、涙や美衣子を憎んだ時と違うのは、どれだけ憎んでも、あたしは自分を殺せないという事実。他人にはどれだけ残虐なことをしても平氣だつた癖に、自分に対してはとんでもなく甘いのがあたしという人間だ。

あたしがあの2人の問題に関与しようとしてしまつた時点で歯車は狂い出していたのだ。2人の問題は2人だけで解決させるべきだつた。もしあの時点であたしが涙に協力しなかつたら？ そうしたら何か変わつていただろうか。少なくとも、誰も死なずに済んだだらうか。

あたしは殺人者だ。涙を殺した。親友を殺した。でも学校関係者も両親も警察もその事には気付いていない。その代わりに、涙が死んだ翌日、小さく「女子中学生 足を滑らせ校舎から転落」という見出しの入った新聞が届いた。

本当は全てを吐き出して楽になりたい。涙を殺したのは自分だと白状して逮捕され、服役して自分の罪を償つた氣分になればいい。でも、駄目だ。それだけは絶対にしてはいけない。この罪は一生かけても償いきれない。懲役何年とか何十年とか、その程度で罪を償つたつもりになつてはいけないのだ。

瞼を閉じて小さく息を吐き出す。涙の声、言葉、笑顔。美衣子の声、言葉、笑顔。ずっと変わらず2人の笑顔を見ていられると考えていた、あの頃のあたし。

涙を殺したのはあたしだ。美衣子が死んでしまったのも、元を返せば涙を止められなかつたあたしの責任だ。それなら一番の加害者は自分自身ではないのだろうか？ そうだとしたら、あたしはこの先どれだけの時間を掛けて2人分の罪を償わなければいけないんだろう。

死んでしまいたい。

その考えは何度も思いついて、すぐに意識の奥底へ沈下する。怖いのではない、悲しいのだ。そんな事を思いついてしまう自分自身がただ情けなくて、涙が止まらない。

他のみんなもそうなのが知れない。京子も奈々も棗も、それからクラスのみんなも。自分の犯した罪が恐ろしくて堪らないのかも知れない。でもみんな、死ぬことを我慢して生きている。生きているならまだしも、もうこの世に存在しない人間に謝罪する為に命を失つてもそれはただの逃げだと、あの2人に對する最大の侮辱だと、みんな頭の片隅で理解しているんだ。

夜中に何度も麗されては目を覚ます。あたしはどうで間違つたのかと必死に考える。
答えは未だ見つかっていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4790c/>

あたしは悪くないもん

2010年10月23日19時12分発行